增補改正
俳諧歳時記栞草

俳諧歳時記 栞草

增補改正

俳諧歳時記 栞草

仮名文字遣改正

全五冊

東京 三書堂梓

俳諧歳時記栞草

俳諧季寄の書なり曲亭主人
法の書なりまことや乱ら寺
名を年ふかく記して活
死編る栞時記は神祭佛
事公家を始めかく
註した社寺もそうひ学の階
梯とかりもくれたるそ
社くこの名を書き改め

左りふそれとそ木島
敷まさ其餘の註釋全
うらいはるそのの多くして
時ふ悟みとらへるもあ
望ねへとものれいとあたる
おくく其ら志らぬを補い
志書きをはふき誤を
をこ正へ先生詞の頭字
をとりて部をわち歳

時記栞草と名けたな
せて坐右最愛の物
としそて趣むなるまいつ志の
等發堂のこのく吐志い
見はをまていそくく社よし
そいとめやをそ社よし
野のよ博識そ
志ものをふ礒をとこも桜
木ふちりを免れむ手

むつ田舎に住乃事このく
ふの名」をも申てるゐるゐやと志
ゐらそこ長井や百姓を
我里にこひくや百姓を
深い乳母の懐をあへ
夫つひふこをたのをへ
申くふ山名井乃忘まよ
るく妹ならそうし
素乳三年 藍子
成業月 書藍

俳諧の字義

史記滑稽傳 注ニ姚察云滑稽猶二俳諧一也、言
諧詰滑利其知計疾出故云二滑稽一也、○青
藍云古今集ふ誹諧とあるより、誹と俳乃
議論諧抄ふらえて一決をぐしたるをあて
古今集打聞ふ今の本ふ誹諧とあるハ写し
誤るあり、草の手あく俳と誹のまぎらは
るをおのそで、後ふさ乃くらいいらぐ
事ふうと、真淵翁の考へのくの如し 正字
通誹敷尾切音斐 說文ニ謗也云云俳、鋪埋切音排 俳優雑
戯也、云云 同義ふからぐるをとらるべしざるを
隋書ニ候白字ハ君素、有捷才一為ニ儒林郎一通俗
不レ待二威儀一好為ニ誹諧雑說一まと世說新語補の
注ふと誹諧とあるバかく〳〵へい俳と誹と通
ぜ〳〵ものるべ〳〵そる馬琴公翁の說をと

ろ〳〵、世説の本文ゟ侯白好俳謔とうきゝ開表一笑七之巻ゟ引ふるも、俳謔とあまごゝ誹俳の誤ゟ成ること徴し、支考が十論ゟ芭蕉家の書法ゟを、人偏の俳諧と用ふべ〳〵といへるを擾あり

俳諧之連歌權輿

詩家ゟ俳諧体あるゟ倣ひて、和哥ゟ俳諧体ともふのつゞけこゝろを敬ひて連哥ゟ俳諧体あるべきゟ莵玖波集雑体連哥之部俳諧といふる条奥山ゟ船こぐ音やきこゆるの木の実やうゝとゝゝるらん、又あゆ〳〵く膝ゟり上のさゝるこゝろ越のゝうゟ雪やふるらんと附らるゝなど當時多くまゝ俳諧発句のそれめといへ同上元句連哥といへる条黒男黒

戸のゝゟ音をきゝ、堀川院云御製俳諧十論文明の頃ゟん山寄宗鑑法師ゟ其世ゟ俳諧の名あるよゟ、守武望一ゟそゝとゝ学びて、百韻ゟつゞけ千句とつらね、貞徳貞室ゟ宗匠の名あり〳〵、唯俳諧の言語をつゝしら拙しゞが貞室ゟゆ〳〵芳野山の花と詠じ、これ〳〵くとぞうり花のうの山貞室隅田川の鳥ゟ吟じて、いざのれ嵯峨の鮎こゝ都鳥貞室其句ゟ和歌の姿情ふるゝへで今の俳諧の根さゝとやいゝん、其のち難波の宗因ゟ武蔵ゟ檀林の額うちく、俳諧の混乱ゟ破ることゝ耳う言語のをりゝを得て、眼ゟ姿情のさびゝさをやうぞ云云

青藍按ずるゟ貞風の混乱との多数年五畿内ふるもち雪や川めと飯五器とりふより雪を飯とゝらてるあり又檀林風の眼う姿のさびゝさをもゝさゝいへ「揖子木も紅葉しもり唐〳〵」といへる

例の輕口をさ〳〵ていふるわらべ、

葛の松原　元禄五年卯本支考〳〵撰、芭蕉庵の雲、一日嗒焉としてうそふく、曰風雅の世ふ行ふ迅さるゝへバ尺雲の風う臨めるがごやそ〳〵、一囲い皂狗とまり、一囲も白衣となりて、ごろふごゐれる處をもう〳〵まで、ゝなゝらまで中間の一理あるべ〳〵とて、春を、武江の北ふ閉さゐつゞ、雨靜ふ〳〵く鳩の声ふのく、風ふそらうみ〳〵く花の落る支ふそ〳〵、弥生をおごりをしき〳〵こゝろふゐありん、蛙の水ふ落る音ふぞ〳〵あらゆゐて、言外の風情この筋ふうつのゐて、蛙飛こむ水の音とらつる七五そ、得るつりく、晋子う傍う侍つるく、山吹とのふ五文字をかうむら〳〵をそんふくおよをゐ侍るふ、唯古池とをさゝまりぬ、云云此句う自己の眼をひらきさゐまつひ、正風の一派ひろまりくるとぞ、

俳諧の大意

俳諧の名ハ、史記の滑稽傳より古今集うもじまり、連哥ふうつりてより、宗鑑をもらひ、守武と学び、俳諧の詞ハひろまりくれど、一座の興のいひ捨ゐて、今の俳諧の姿情ふあらぞ、且俳諧の心を傳へくる人ものき故う、芭蕉の翁俳諧ま古人るゝとやこを、記そこのふ門人ふさゝやきて、家訓の秘文とい あせりくるとぞ、その俳諧の心とハ、霊実の自在より、世間の理窟とをなる事をらふまりくまさて、風雅ふ遊べ の人和ハ、五倫の常法ふてて俳諧ま三条あり、世情 此名とまるづく、ちびゝきい風雅の体ふこふる べゝ、人よゝ此三ツをまるとまきハ、身ふ千重の羅綾をうざるとも、萬一枚のさびとまされ

をロふ八珍の菓肴とつらぬるとも、一瓢乃飲
の楽をねもや、心ろ〻世上の變をわすれて、笑言
ふ耳と遊ぶ〻むる、俳諧自在の人といふべし、
こゝもらのことわりをもさまつ〻くよの〻く俳諧
ふ遊ふ時ハ、産を破ろ業を怠るといふる、放
逸のうき名をもまぬ〻くべし、

凡例

○世ふ俳諧詞寄の書あれしとゝもゝ、註釋全らざる
故ふ初学の人時ふ臨んで惑ふ支あり、故ふ曲亭
馬琴翁先こゝのうち俳諧歳時記ふもあれ八
増補をなしてそれ見安からん為ふ四季の詞の
頭字を、いろは四十七字ふ部とわうち、註釈と
くだ〻く席上の便りとも、

○さう　かう　ちう　せう　ふう　ねう　りう　
ちやう　てう　ふう　ねう　とうの類の假字つ
くひを正し、悉く部とうる時ハ却て初学の惑
ひとまるべ〻もとづく其声の赤めもとらん部
ふ併せ出さゝもとづく、そ〻うかうの類ハ[こ]の部、
あそせ、せうハ[せ]の部、てうてふハ[ち]の部、へうハ[ひ]
の部、さうハ[そ]の部又ぢハ[ぢ]の部ふ併せ出さ、余ハ准ぐ〻もるべし、

○漢文を優語ふ書あるわせるハ、專ら初学のふの
とうやもさ〻んが為ふまづ〻ゆさ〻く本文の詰

路ふいさゝうそむきそうもあるべし、

○引書ハ時代の新古よりからず、只初学の解しやすきを抄出せり、

○近世の俳書ふ出せる、正しからぬ詞ハ多く省きつ、

○淡雪と春ふ、非翡翠冷麦を夏ふ、拈毛花木兎鶏尾越の鴨、冬瓜介鶏の類ど冬ふ定めらるゝもあれど、蕉門の式ふよりて、部をわかちたるぞ、増山の井ホの古式ふ因て編る詞寄ハ大ふさうなれど多くされバ春の部ふ索てもれりと思ふ詞ハ夏秋冬の部ふ載せらるゝぞ、

○近世の詞寄ふ、新ふ載せらるゝもあらざるを、と思ひ足らざるてかゝらるゝと、又過ちてのせらるゝ詞ありてハ追加の部ふくはへらるゝぞし、

増補俳諧歳時記栞草

春之部　曲亭主人纂輯　藍亭青藍増補

春

漢書律暦志 少陽者東方、東動也、陽氣動物於時為春、春蠢也物蠢生迺動運、日行東一度、太蔟陸謂之春、

禮月令註 太蔟、帝嚳氏之樂、木官之聖神、継天立極生有功徳於民、故後王於春祀之、四時之帝與神皆此義下效之、

月令 其帝太皞、其神句芒、

句芒 神名氣始発色蒼仁也、

天 春の天とゝ、

東君 郊祀

爾雅 春為青陽、

青陽 漢律暦志

記晋亞祠東君、

景曰媚景韶景云、

韶光 春の景色のうるハしきをゝもふ

韶美也

正月

夏ハ寅を以正月とすこゝを人正とゝ商ハ丑を地正とゝ周ハ子を以正

月ことさらを天正と云 字彙正字本音去声音政云至秦始皇諱政改為平声音征後生至今猶之 睦月 世諺問答正月をむつきと云ことは人ちかくよりそひ月をむつびむつぶことをいふなりそれ月をむつびつきと名づけたるをもてしるべし〳〵むつまことも 左傳春王正月、周正月也 太簇 律 月令 正月律中太簇 高誘曰簇簇也言陰衰陽発萬物簇地而生 立春 月令廣義 周天王衡六問云、大寒後十五日、斗柄建艮為立春、正月節、立始建也、春充始至、故為之立也 雨水 同上 立春後十五日斗指寅為雨水正月中、雨水中気雪散為水也 孟春 元帝纂要 正月為孟春 陬月 潜確類書 正月為陬寅位之月故曰孟陬 夏正 月令 廣義 大禹以金徳王、都安邑國号夏仍有虞以建寅之月為歳首故謂夏正 上春

元帝纂要 朋 詩 初春お同し 太郎月 望る水曰人の子のをふなとて一年の沢をうるゆゑなり太帝の名あるをあぐるたらちねはさえずまりの初月 後鳥羽院 霞初月 雪のそら名斗や雪あるめ月 宝家 初春月 同上 まあらう初月月の新 家隆 早緑月 朗恒秘蔵抄 おそめ月ハやさしくなり小松ねの貫之 年端月 莫傳抄 拙もやさうふおこなひ月名もめりしくなるなり 新月 同上 こまて一月をいふ又くるたちんねの 暮 三月 潜確類書 仲春者日月會於降婁而斗建卯之辰也 衣更 儀抄 三月ハのどかありしたゝ此月さゝ衣と更きるゆゑ 夾鍾

律 月令 律中夾鐘、高誘註、萬物去陰夾陽、聚地而生、

驚蟄 節 月令 驚蟄 後十五日斗建 卯 蟄虫咸動、啓戶始出、註、謂始穿其穴而出也

春分 中 月令廣義 驚蟄 後十五日斗建 卯 當九十日半也故為之分、夏冬不言分、

仲春 元 帝 纂要 二月 曰仲春、

陽中 月令廣義 審志云、春為陽中、萬物以生、

如月、令一月 纂要 二月為仲春、又曰、令月、日在營室、

梅月 蔵玉 風の情を報ふ、

見月 蔵玉 ふく人もおきふるころの梅を報ふ月と、

草長 月令廣義 有家小草、

生月 同上 生月まちえてさくなれば、

初月 未考

花月 未考

中和の節 潜確類書 季春者、日月會于大梁、而斗建辰之辰也、弥生 朔日○唐の徳宗の時、上巳九日を加へて三節とす

三月

奥儀抄 此月をやよひとそ、この月いろ〳〵生ものの、

姑洗 律 月令 三月、律中姑洗、高誘註曰、姑、故、洗、新也、是月陽氣發生、去故就新、

清明 節 月令廣義 孝經緯云、春分後十五日、斗建乙為清明、三月節、万物至此潔齊而清明矣、

穀雨 中 同上 三月中、清明後十五日、斗建辰為穀雨、言雨生百穀清淨明潔也、

季春 字彙 凡末月曰季月、

竹秋 廣韻 三月、蘭秋七月也、

病月 玉燭宝典 三月為病月、病音丙、亦曰嘉月、

嘉月 同上

禊月 張衡南都賦 暮春之禊元巳之辰、方軌齊轂、招搖在巳、

蔵玉 あてやうとゝえて禊月

於陽 濆

櫻月 蔵玉 うつぐるころ、

同上 落こゝろを

見月 つくんをおくれめ〳〵むつ

後鳥羽院 春

惜月 同上 救あ〳〵ぬ月をとゝおもふぶりとかさ

正月

院拝礼 元日 天府記 延久五年正月一日辛巳、院、拝礼、乍レ剋、諸卿以下参集、次無二晝御座一、庇御簾間次御出、直衣装束也次関白前、太政大臣、右大臣、并大納言、中納言、参議以上一列、庭中次、殿上四位以下、別當判官代等一列、拝舞了之後、従二上臈一次第退出云々

嚴島祭 下文 地の御前八乙女 嚴島と同体と、毎年正月下の亥日記畧記

小神祭あり、近国より衆船つゞく、恭諸す、この祭、正月下の亥日より二月初の申日迄十日の間、祝師嚴島の上卿齋呵之入〳〵潔斎す、国府の奉幣使社家ゟ来、日嚴島へ渡海す、夜半ゟ至〳〵七度半の使あり 道芝記

居籠 九日

夷祭 十日 摂州西の宮太神宮の祭し、村民九日の朝〳〵夜未ゟ至リ戸を開て出す、ことさら居籠とゝ、一説に 雍州府志 ゟゝ居籠

女六神前ゟことり男ハ家ゟ居るとそ、

祭ハ正月初の申日〳〵四日の間〳〵祈の森ゟゝ申日〳〵亥日に

至りて神事畢る、傳ゟ此間悪鬼遊行すことをふるゝをの崇りあり、故ゟ児女及六畜と他村ゟつゝ、男子家うるさて門戸開闔の音と禁〳〵声と揚ず、民間居篭とゝ、亥日旅所ゟ神事あり、社司斤斧と以て口鼻と覆ひ人氣ゟ〳〵神輿ゟ觸〳〵ず、榊と持ゝ従行す、又五穀の雑種と各一器ゟ盛りゝ農具と村民お携〳〵供奉す、神輿液所ゟ迁りて後諸民大ゟいこゑ〳〵と呼ぶ是居篭の式故〇 摂陽群談 ゝゝ毎年正月九日蛭兒尊 廣田の社ゟ臨幸あり、神の容相美ゟると汉人倫の見んとを耻ゝよゟの諺とありて、村民戸と閉て外へ出ず門松と逆ゟさゝして居篭とゝ、明旦諸家各戸と開ゝ恭詣す世俗十日夷とゟ〇諺ゝゝ十日ゟ恭諸きると十日夷とゝ、蛭神ハ龍宮ゟくまもりゝゝて、恭諸の人社の後の羽目板と敲くし徘ゝて来花代衣蛭蛟ハ判おどをゝめでくゝ紀物と賣る下向の人ごとゝかゝ〳〵笹のゟゝ結つけ、又賣る処の烏帽子と買ゝ頭ゟ戴き往来の人と笑ハせ興するてゝ〇京ゟ〇商家ゟ歩日大ゟ宴と設け客とむのゝゝ饗應す、江戸ゟて八その月廿日夷祭もゝす いねつむ 寝積 寝舉 寝と稲と和訓同ゝ故ゟ祝詞と積も舉も又稲の縁語ゟう

雑誌抄 云寝卧と常のごく唱ふるハ病床ちごふまごころ
ちふ名さバかくらかし疲とあざすとよぶ同じ

葦索 くの部画鶏戸ふ帖 いものかしら頭と唱ふる例の祝
語ふ女蕃頭本工頭ちごめかとをそ条ふ読す 芋頭 羊がらと頭と
かなべてこれと男ふハ多子の義ふ取ふ

垣磯辺の 凝かへる 字彙 云凝氷堅也○とけし氷
若菜ちう の再び結びつふる意ふて沍ごつ
とつゐ同 飯鶏 和漢三才圖会 云状九五六すゞめ
ドこそ 其頭鳥の卵のごとく頭中ふ白肉ふ
煮て食ベ其肉粒おくく飯のおくく故ふ飯鶏と名く
正二月さこのころふ出ハ播州高砂の産 飯多へ

兼三春物 遊糸 荘子逍遙篇 云野馬塵埃也生
物以息吹者也 希逸註云野馬
遊糸也水氣也○杜詩、落花遊糸白日靜
○かげろふ糸遊一物ふふ糸遊ハ異名 契沖雑記
紙老鶏 風巾ともふ同じ、漢高祖陳豨と征す
鳶 る時未央宮の遠近と量る為ふ韓信造るとい

続博物志 云今紙鳶ふ糸と引て止るハ小児をして口を
と張ることを仰ぎ視しめて、小児の内熱をとらしむるなん
為ふ、本邦ふおゐて亦小児さんふ乗ふ小児ふおゐて益ふ
さふあるべし 俳諧歳時記 云烏賊幟と名づけるハ
ふ後のまゆや、甚形の烏賊ふ似ふふ江戸の俗章魚と云ハ烏賊ふ對して
河迫の間ハ五月上る、其製三河ちふ巧ふ

二月 雲

虎杖 蕪頌畫經 虎杖、三月生苗 茎如竹筆状上有赤斑點、初生分枝子葉似小杏葉、七月開花、九月結実○時珍曰杖言其堅 虎言其斑 和名抄 虎杖伊太止里 枕草子 つゞくハと

其をとたゝうあふぎ年浪草ふ挙ぐる 後拾遺集 ふ三月ばりの空
命 藤原義孝 おぐこゝ花ばやうひの月のそらるゝものでまぎう
らこうそさらごゆうめて 童蒙抄 八雲御抄 なじこふハさい
たつちハ春の若草とよよ、いとぞくそ
狂きの部さいくつまの愛ふ

糸櫻 大和本草 樹彼岸櫻と同じ 枝長く垂

の如くみえて下て墜る花うらに彼岸ざくらもや〳〵花稍おそく

開花成簇青白色二三更開

花隨即落人罕見之下畧

三月石山祭 三日

江州石山寺八真言宗うて御室を傳ふ本尊如意輪觀音聖武帝の勅願良弁の開基し今日の祭ハ石山寺の鎮守三十八所明神伽藍境内新宮大明神寺辺の村々ありの祭かく〳〵古式ハ朔日より三日まで朔日三十八所明神の拜殿にをいて神祭あり神輿東寺崎へ渡御一山の衆徒と出仕三日新宮にをいて仁王八講を修す三十八所にをいて神輿より饌と供ず晩景に及て能藝あり長命太夫こととつとむ獅子舞胄無狂言とゝ衆徒各公文所ふ出仕す三日神輿渡御龍蔵権現にをいて獅子舞献供あり其間馬場にをいて競馬と催す駿馬并徒者と貫首より出す其両側ふ遨法師列立す各花笠とゝのへさ太刀と佩大口ととゝて五人或ハ十人左右ニ執綱〳〵競馬の勝負と決す勝方ふ白布と給ひ又獅子舞ふを禄二計と賜ふ今ハ古来の祭式退廃す朔日ふ新宮八幡の両神輿新宮の神殿ふ出御神樂あり三日両神輿渡御三十八所の拜殿にをいて衆徒法樂の奉幣あり次ふ神酒を供ず畢〳〵還幸ありて

祭 五日 八大天王の社洛北一乘寺の東ら在祭る所祇園三社の中八王子ふ出入産土の神とす祭ら神三座共ふ今日祭礼ふ

紀事ニ一乘寺の村人烏帽子素袍と着て各禮と呼〳〵神幸とすむ〇一説ふ宵祭ら高声ふ有幸〳〵と呼〳〵還幸多ゝ云

一乘寺競馬 七番ぐらゐ宵ふ馬場にをいて走馬一

石清水臨時祭 又南祭ト云中午日〇山城国男山八幡宮天禄三年三月八日臨時祭其後毎年祭之ごとく八平ノ時門乱逆の報祭賽のつめ天慶五年四月廿七日ごろ始まるよ

當日ハ旅所ふおいて村民ら仆乗ら神鉾出づ

公事根源 先辰日試樂ふ舞人竹葦のととゝのへ御前ふ到て陪従ととゝまる〳〵竹枝と捕頭うく〳〵仁寿殿のととゝまるとこや當日ハ大近衛の召人求子こゝへ音樂と合てまるとこや當日ハ大臣以下ぐ〳〵の花と使舞人の冠ふさ〳〵三献五献の後おさ〳〵けの事あり

荒野集 沓音をとゞふおぐさ〳〵弁荷今

十訓抄 一條院の御位の御時実方中将祭の試樂ふ遅参ありてむざ〳〵の花と給ハりぐ〳〵ぐるゝ〳〵ぐるゝ〳〵ぐるゝ

枝と折てさゝらさゝらとおしめぐらし、こゝそこゝにのち試楽の始ゝみ八竹の枝とさゝてさゝやかに

稲荷の御出

雍州府志云齋場所稲荷の御旅所八油小路七条の南にあり、弘法大師東寺と営むの時八幡と土地の神とすゝめて後稲荷の神出現すむぐ〳〵芝寺長者の家に寓年月をへて稲荷山にうつる、今の旅所八芝寺の宅地に祭礼の時、神輿こゝにおいて二十日昼古への遺風こ 紀事云 新御供社家毛利氏調進す、此日七条高瀬橋の東に大松炬火と立る、土人傍にあつて、神輿の来るをまつ時八火と点す、神輿本山稲荷と出て、大和大路よりこ七条通と経ゝ、九条の御旅所に入社家并に氏子供奉す、御旅の間四月第二の卯日に至る、其間諸人群参す、凡旅所の散銭米八田中米女島右近受納す、この神、二の午日御出、二の卯日還幸故ゝ世俗の諺ゝ、ウニ〳〵と御出ウカ〳〵と御還とそ

池上千部

九日より 九八日迄

三月十九日より九八日迄法花経千部千日讀誦、此節参詣多、當寺八日蓮上人終焉の地、但遺骨八身延山へ葬るとそ

伊勢櫻

此花緋櫻の種こ

をうつすゝ近〳〵終と尾張と訓通ず、尾張の国ゝ近きゝ八伊勢国こ因て伊勢と名づく

家櫻

李吟曰、人家こ咲櫻こゝ〇花ゝうすく毛虫ゝいぬ

犬櫻

小白花うつてこるゝゝ櫻の属ゝ

あらゝ〳〵家ざくらゝ嵐雪

いやゝ〳〵故ゝ犬櫻とそゝぐて似て非あるとのゝ犬の字と付て

ろ 正月 六の餅、六入や

部叢

一歳桃

実と種ゝ當年花さく、其色單重花犬

りほとの多ゝ犬蓼犬蓣豆犬柘又一番鶏二番鶏ゝ似て非ある

ろゝ武家ゝ犬鏑とそ或ハ犬筑波集の類こゝ同ゝ

三月 爐塞

炬燵 〇冬十月ようこ寒くとそのぐ為ゝ炉をひらきこ炬燵とおく、

寒 三月こ至て暖気ころゝ故ゝ塞ぐ止む 白氏文集 別春炉

は 正月 腹赤参

元日 公事根源ゝ腹赤の贄こて

会まゝゝ供ゞるゝや、腹赤の魚と筵紫ようゝ奉ゝし、昔ハやがて節

て食ゝうゝ、十二代景行天皇筑紫の長濱ゝて海人是と釣て奉る、

其後四十五代聖武天皇の御時、天平十五年正月十日太宰府ゝ是

と奉る是ゝ年毎の節會こハ供ずきゝはし定めおゝるゝゝ

腹赤と八鱒（ますの）の魚のごとし

初夢 紀事 云九初夢ニ八大晦日の夜（よる）より元日の暁（あかつき）に至るの夢（ゆめ）を○年（とし）ごとに来（きた）るの夢（ゆめ）と思（おもひ）寐（ね）のをさくこゝろそへ八夜（よる）を勿論（もちろん）元日（ついたち）と鶏旦（とりのとき）ととゝろ○け部ニ注（ちう）可見合（みあはすべし）

初鶏 鶏旦 御傘 元日の朝鶏の鳴（なく）を云寅起鳴（とらおきなく）初（はつ）る鳥（とり）と云（いふ）

初暦 暦開 雑談抜 九暦（こよみ）を賣（うる）ハ冬（ふゆ）の用（もち）ゐ共（ども）春（はる）の用（もち）ゐ共（ども）賣（うる）ハ春（はる）勿論（もちろん）なり、

歯固 鏡餅

世諺問答 云（いふ）ごとくこゝろもちにむすびハ故（ゆへ）や、昔人（むかしびと）ハ歯（は）と汉（かく）食（しょく）とを子（こ）る故歯（よわひ）の字（じ）とろひと訓（よみ）歯固（はがため）ハ云（いふ）ともなむる心（こゝろ）ともひハ近江の大切のものひと用（もち）ゐ故（ゆへ）や、

本朝食鑑 本邦古（いにしへ）より餅（もち）を汉（かく）て神明（しんめい）の供（そなへ）とし大円塊（おほまるかた）に作（つくり）鏡（かゞみ）と称（しょう）す、ハ心の鏡（かゞみ）ふ擬（なぞら）ふる故（ゆへ）、正月朝旦（しょうがつあさ）必（かならず）餅（もち）と汉（かく）て諸神（しょしん）ふ供（そなへ）及（および）一家（いっか）の長幼（ちゃうよう）團楽（だんらく）して同（おなじく）鏡餅（かゞみもち）を食（しょく）す、新歳（しんさい）を賀（いはふ）ふ○歯固（はがため）の具（ぐ）ハ折敷（おしき）六寸（ろくすん）ニ押鮎（おしあゆ）大根（だいこん）橘（たちばな）鏡餅（かゞみもち）を種（しゅ）々の物（もの）と具（ぐ）すふ擬（なぞら）ふる、

岷江入楚 故事要言 云年の始（はじめ）ニ馬（むま）と作（つくり）て頭（かしら）ふ擬（なぞら）ふる歌（うた）の舞（まひ）をのことゝ春駒（はるこま）と名（な）づけ

春駒

て都鄙（とひな）ともろ〳〵、是（これ）ハ禁中（きんちう）ふく〳〵正月七日ふ白馬（あをうま）と御覧（ごらん）のことを、是（これ）と下（くだ）りけて老（おい）を

三才圖会 摂州天王寺の民家（みんか）ふて河内（かはち）の上糯米（じやうだまい）の穀（こく）と敷（しき）爆（はぜ）張（はり）浮（うか）のごとく脱（ぬけ）去（さり）潔白（けっぱく）雪（ゆき）の花（はな）の如（ごと）云（いふ）○昔（むかし）ハ正朝（しゃうてう）ニ家内（かない）ことを撒（まき）ことをく賣（うる）と云（いふ）説（せつ）みやさ

蓬萊 蓬萊（ほうらい）と敷（しき）ことを今（いま）ハ白米（はくまい）と用（もち）ふ江戸（えど）ふてハ雛（ひな）祭（まつり）ふ是（これ）を供（そなへ）ず

海螺腸身 同上 海螺（ばい）俗（ぞくに）云（いふ）海中（かいちう）ふ生（しやう）ずて小（ちいさき）螺（にし）ふ似（にて）色形（いろかたち）田螺（たにし）小（ちいさき）ふ似（にて）堅（かたく）田螺（たにし）より大（おほき）ふ、春夏（はるなつ）ことろふ多（おほく）出（いづ）、其肉上黒（そのにくうへくろく）中白（なかしろく）盤曲（ばんきょく）ふ殻（から）ふ入（いり）ひて蓄腸（ちくちょう）ふ腸（はらわた）を去（さり）煮（にて）食（しょく）ふ甘（あまく）鹹（しほからく）、高家（こうか）ふて除夜（ぢょや）及（および）歳（さい）の始（はじめ）ふ心用（こゝろもち）の酒肴（さけさかな）ふ、

破魔弓 破魔

矢 世諺問答 蚩尤（しゆう）が眼（まなこ）の瞳（ひとみ）と抜（ぬく）ふ木丁（きのえ）の王（きのえ）とかの眼（まなこ）のふく抜（ぬく）ふ三重（みへ）と画（ゑがく）ふ中（なか）の瞳（ひとみ）と除（のぞく）

雑談抜 或説ふ正月（しゃうがつ）ふ射戯（いあそび）ふる濱弓（はまゆみ）ハ蚩尤（しゆう）が眼（まなこ）ふ射破（いやぶる）ふ由（よし）ふて、通唱（つうしょう）の亘（わたり）ふ、

破魔 破魔（はま）と破（やぶる）の意（こゝろ）ふく破魔弓（はまゆみ）と書濱（かくはま）の字（じ）心（こゝろ）ふて

羽子板 胡鬼板（こきいた）ともふ

つく

世諺問答 稚子ども、吾とさうきそ、胡虎の子とそつこと作ろハいうそ
秋のそらぶ蜻蛉こそ出さそ蚊ととりくうそをこのこ蚊こころ
とそハ木蓮子ろぐこころんぞうがこうそてそ寝つけこうそ耳そと
桜さくあぐ見バおつる時とんぞうがぐし初嵩 初賣
のやうしさそ蚊ともそれおめんがなりし
賣初 注釈ふ 初子日 子日ノ遊 子日ノ松 扶桑
及バず 小松引

略記 宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴行幸北野雲
林院 菅家文章 予亦嘗聞于故老曰上陽子日遊歌老又曰
倚松根以摩腰習風霜之難犯也 拾芥抄 正月子日岳ニ登
るハ何ぞや傳ニ云正月子日岳ニ登ろハ遠く四方と望ミ陰陽の
靜気と得煩悩と除くの術なり 十節記 初子の子ふの玉箒 万葉集
初子乃今日乃玉箒手尓取加良尓動具玉乃 始春之
緒 家持 袖中抄 玉箒とハ蓍と云草小子日の小松と引
ぐして箒ニ作ル田家正月子日ふ 紀事 正月初
蚕飼する家と掃初ることを、 初寅 寅の日師ヶ山

鞍馬寺ニ詣ず是と初寅祭と云此日鞍馬の土民福等木と
以て鑰と作ル是と賣るこれと福掻とこと云福徳とうけと
のひひく又生蜈蚣と賣是と福蜈蚣とこと云多門天の使令
とするものゆえ鞍馬山中雞と養ハずゆえハ鶏好ざ
蜈蚣と喰ふ故なり 初卯 正月初卯日摂州住吉の社へ詣是
も初寅詣と云社内ふ於て神符を
春詣の諸人ふ授く是と卯の札と云江戸ふても此日本呼
の妙気へ参詣す今日受る処の紙符と串ふ挿ミ諸人是
を頭おさして家ニ歸る 萬春樂 春鶯囀 梅がえうふ
青柳うふ 大芹うふ 入楚 峨江

万春樂ハ蹈哥の曲ニて萬春乐ハをどりて八句の詩ニそれと漢音
ふるふりて句毎のおわりふ万春樂と唱ふるし蹈哥の舞人の立ざ
まおりおりと○體源抄 春鶯囀 合管の作者照手山右大略樂
器とつくり樂の作者ニ一説ふ天長宝樹樂と名づけこれも蹈哥
の曲ニ○梅枝 梁塵秘抄 呂之部ニうめ枝おきわる男やそれる
けてまれ三段春うけく男どもいやどゆさハふうて三段あそれそ
こうぐや雪ハふるふる○青柳ハ同抄 律之部ふあをやぎをかさい
とふようていおけや鶯の三段鶯のゆふとつおさハおくや梅の花

ぐさ○大芹 同拾 律之部に大芹ハ芹のさゝとものこぜうこそゆ〳〵しけれ〳〵こゝろむきう〳〵こゝやこのぜんぶんさんのまのゆ〳〵のさのおんむ〳〵かめのどう〳〵さらくのさいやうさいとさゝやうめんかをあうけうるさゝとゝり〳〵かうそらぜんさ五六う〳〵の一六のさいや四三のさいや 年浪草 云各蹈哥の夜のこうらくのものし、我皇延祚億仙齢 万春楽元正慶序年光麗 初天 万春楽かくのごく八句の詩の句毎ニ万春楽と唱ふ云

神、初不動 廿五日、元八日八、天神、不動の會日〳〵今 元日ニ月、元日園子 和漢三才畫会 京師の俗、正月九日家毎ニ赤豆餅餌と食ふ 紀事 今日地下の諸人まの〳〵遊び、元日ニ月とらむく園子と食ふ、是と元日園子とらいて佳節と予、 事文類聚 江東俗号正月廿日為天穿〇、今日又婦人鏡臺の鏡餅と祝ふ、元日と初顔と其訓近〳〵故 紀事 正月二日四条お初顔を祝ふの意ろう 河原浄瑠璃歌舞妓等こゝと始むると初芝居とう 武江墟町、大坂道頓堀ホも又もろ 春永 初春ホ三春の季長をとそ〳〵て

花の兄 梅の異名〳〵二十四番花信風小寒二候梅と以て始とす、故ホ花の兄とう 春告草 梅とゝ 蔵玉 そう〳〵の春つげ草の花のいろあ〳〵ホをゑうるう〳〵雲 畑打、畑すき 田とすく 和漢三才畫会 田と墾く〳〵ハ耒耜ヲ用て土とうく〳〵「田をむく〳〵」とす訓同

耦と堀 本草 時珍曰、蓮花兼常ホ偶生す偶せざるハ生ぜず、故ホ字耦ホ从ふ耦ハ耕ホ春ホ玉く〳〵藕と堀ると、こゝ泥と耕し、冬ハ月早春もぐりて漁人是をとゝて、ハ市ホ賣るとゝ、子細あ〳〵 春宮 礼記 春宮太子ノ東宮也 夫木 呉竹の園より

春雨 春の雨 鬼貫独言 喜雨 春の雨ハとの色ハこゝうゝき 後京極ことゝ 春告鳥 鶯の異名〳〵 古今 鶯の谷く生る声てさへづる

千箱柳、白楊 時珍曰木高大葉圓ハしく梨の如く、肥大ゝ〳〵尖ゝて面青く

もて光て背甚白く、鋸の如き歯み、木肌
細く白く、性堅く直く梁栿とも造て撓曲ず 春のわざ

か部、霞の
条を注す 春ふあふぐや 春を逢んと云詞、又来る 春
あふぬ 伊勢物語 月やあらぬ春や昔のそる
あらぬ春や昔の身ひとつハいづく、青盖按ずるに、
ぬ 春文が春まつるとをことしとらるハいつ春ともちらぬと意の
身ふりさけ見ざらめやハ家持○鶯の木づたふ梅のうつろひさくらの
花の時うつさ 三月上の午日と云 神社啓蒙
まつぬ人九 三月 初午 二月上の午日と云 神社啓蒙
稲荷の社ハ山城国紀伊郡ま、
京城と去ると東南一里ばかり、祭ところの神三座、下社ハ大山
祇、中社ハ倉稲魂、上社ハ土祖神云〇元正帝の御宇、当社影
向の日 偶二月初午日故ふ今ふ至て此日と用ふ 神祇拾遺 雍
州府志 当社の出現ハ和銅四年二月九日ふ此説ふ従て長暦と

春は

以てこゝを推すとき其日偶初午の日ふ当ふ然れとこゝに今九日
と用ひずして初午と用ふ故ふ俗、初午詣ふ云又福参と云 紀
事 此日新御供社家ゟ利氏調進す、中の社ハ倉稲魂ゟ祭り、
田中の社ハ大巳貴命ゟ祭ハ朱朝衣食の祖神ゟ祭ふ生
安逸の社ゟ今日農民黍詣ことふ多し、門前の家ゟ百穀の
種并ニ雑菜の種ゟ賣ふ又木ふの陶器ゟ賣ふ、その文ふうとの
ゟハ塼法と云其ことふ摂州塼法の海濱ふ始てこれゟ製
す故ふ塼法焼と云是ゟ其小さことのごとくふく小
の中に運塼ゟ多ハつゞくくの音ゟ、故ふ名ゟす、こゝゟとゝく小
児ゟ賺し、又大人ゟ塩と此肉ふ入く火中ふ投下焼塩とす、
今日民家多く菜の葉ゟ食ふ凡恭詣の人神前ふ投ゟる
処の銭ゟゟ〳〵簀の間ふこぼるゝとの ふ其ハその人福ことゝ
ゟとゝ、請得て家珍ゟす〇此神ハ七度詣といい傳ふ 拾
遺集 ふ滝の水ゟゝとゝゟゝとゝゟゝとゝ

初電

月令 仲春之月、雷乃発声、始電

紀事 九一春の中始て声を発ㇾ雷を初電と云

蜂

同巣

蜂数品あり、蜜蜂、土蜂、大黄蜂、竹蜂、赤翅、蠭蜻おし、蜜ハ夏月蜂の脾の中に貯へ、已ㇾ冬竜の食物とせんが為に、自然に脾と結び貯ふるを山蜜と云、熊野ふくハ山蜜ともひて上品とす、又大樹の洞中に貯ふるを木蜜と云、家に養ふを家蜜と云、九蜜と醸す所、諸国にあり、紀州熊野を第一とす

孕鹿

時珍曰、鹿の性淫にして、春三月、秋八九月孕む、九月にして一子を産す、年ㇾ年滋し、一牡常に数の牝を交る、牝妊むる時ハ山谷の人跡稀なる所に往て産の説未詳、

○薬文曰、本草に九月にして一子を産すとハ誤歟、

孕雀

雀の子 本朝食鑑

雀の性淫にして、春三月、秋八九月孕む、巣を檐間の甎隙、堂社の破壁朽木の空穴に巣とつくりて、卵を伏す、小さきものを黄雀と云、雛の口黄にして赤黒き斑故名ㇾ

そてに鳥

か部 鶺鴒の条に注ㇾ

初桜

花ハ端山より咲く、奥山に至つて、紅葉ハ奥山より染く、端山に至る、其冷暖みだりに遠近の差別あるにあらず、凡桜の初て開くハ皆単葉山桜、彼岸桜、姥桜の六ㇾ

花を待

初学和歌式 花咲そめてハうれしきものを、花もど、眼前の気色たゞ猶ハ詮なし、花とそ人の心をやまする、故に花ハ散名残と云ハ前後あるにあらず、凡桜の条に注ㇾ

花鎮祭

晦日 公事根源 是ハ大神狭井の二祭と云と 神祇令 のせう、春花の魂ふるころハ疫神ろ散〳〵、此祭ハあとより、神祇官にて行ㇾ

三月

巴字盃

き部曲水の条に注ㇾ

半仙戯

志部 鞦韆 の条に注ㇾ

凡三日より七日迄に、汝手見物の輩泥中の蛤とると、方言ふ入をやまする、故に三月三日ハ蛤の為に神祇官にて行ㇾ

蛤ずる

摂州住吉の浦の遊子ハ為ㇾ

花

横川曰、櫻の我国ふくハ花と云〇芭蕉翁羽曰、我家の正花論ふ花ハ櫻にあらずと云ㇾ

花盛

花譜 吉野山の櫻ハ立春六十五日と云ㇾ

温(あたゝか)くて遅速(ちそく)あれども大(おほ)むね吉野山の町(まち)より上(かみ)のかた八六十五日(ろくじふごにち)ほどにて花(はな)ざかりハおそし

彭(ほう)牡丹記(ぼたんき)半晴半陰(はんせいはんいん)謂(いふ)之花曇(これをはなぐもり)養花天同(やうくわてんおなじ)之(これ)恋様一任春風(こひやうはいちにんしゅんぷう)花飛如(はなとぶこと)錦(にしきの)幾濃粧(ごとくいくのしやう)下裳(したもの)

陸放翁(りくほうおう)

花曇(はなぐもり)

朗詠詩(らうえいし)織自何(おるはたいづれ)絲唯暮雨裁無(いとはくれのあめにたつことなし)

花錦(はなにしき)

古今序(こきんじよ)そらの山の櫻八人丸ぶ月ハ雲ゝと松のさくら〳〵花雪(はなゆき)

人丸集(ひとまろしふ)白雲の色の千種(ちくさ)ありつゝ花のさくら〳〵

花雪(はなゆき)

雲(くも)

御傘(おほんかさ)花の滝公滝の如(ごと)くおつる花をいひ又花の散(ちり)交(まじ)りおつる滝ともいふ○山櫻(やまざくら)咲(さき)初(そめ)てより久(ひさ)しく落花(らくくわ)のこゝに去(さり)かしこに来(きた)り又滝の上(うへ)おさし

花滝(はなたき)

こゝろ

御傘(おほんかさ)花の波正花(なみしやうくわ)、水辺(すいへん)ニ三句(さんく)し波の花ハ正花(しやうくわ)あらず白浪(しらなみ)の花ハ似(にた)ると又(また)波の花の下ニ云(いふ)、波の花雪の花ハ正花(しやうくわ)ニあらず、但(ただし)波ニ落花(らくくわ)のまじる句体(くてい)ハ春(はる)ニ植物(しよくぶつ)ニ正花(しやうくわ)ろ○

通村抄(みちむらせう)云(いふ)花ニ鈴(すず)をつけて鳥(とり)を追(おふ)ときハ曇(くもり)ときハ雨(あめ)ときハ風(かぜ)ときハ笑咲(ゑみさく)ときの字(じ)と訓(くん)じ、花の開(ひらく)ゆくこゝろ

花笑(はなえみ)

鈴の索(つな)と以(もつ)てすることと驚(おどろ)す護花鈴(ごくわれい)ことをいふ

護花鈴(ごくわれい)

天宝遺事(てんぽういじ)寧王春時紅(ねいわうはるときこう)の綵(いろど)と紅(くれなゐ)と金鈴(きんれい)と縷(いと)とを以(もつ)て、花の梢(こずゑ)小鞦韆(こしうせん)を結(むすび)て鳥鵲(てうじやく)翔(かけり)集(あつまる)ことを待(まち)て園吏(えんり)をして綵索(さいさく)を引(ひか)しむ、

花の鈴(はなのすず)

朗詠(らうえい)誰謂花不語(たれかいふはなはかたらずと)轉濃(うつりてこまやかなる)艶(えん)影(かげ)

花笑(はなえみ)

ふたゝび美(うつく)しく花の艶色(えんしよく)ふたゝび正花(しやうくわ)ろ

花容(はなのかたち)

きびくの上(うへ)にいのく正花(しやうくわ)ろ

花容(はなのかたち)

動(うごく)

花ぶさ

蕚(がく)也

字彙(じゐ)草木英華(さうもくえいくわ)也

花ぶさ

一輪(いちりん)とも

花一蕚(はないちがく)と

花輪(はなわ)

詆(そしる)

字彙(じゐ)詆毀(そしりそこなふ)花貌(はなのかたち)也

花詆(はなそしり)

の姿(すがた)、花の肌(はだ)、花の粧(よそほひ)

源氏物語(げんじものがたり)寄木(よりき)ニ云(いふ)

花の顔(かほ)、花の窓(まど)、花の扉(とぼそ)、花の戸(と)

今式(こんしき)此(これ)ろおもふ〳〵花(はな)おるところろ

花心(はなごころ)、心の花(こゝろのはな)

花でろれそする君ゐまバ御傘人の
心も、春ハうかるゝ事バ心の花正花と 花衣 花の衣も

の袖、花の袂 技折萩 花の袖、うつくしき袖も、花ハるゝ
る詞も 御傘 こゝもとに紅葉つゝ染れ
バ雑ちらぐれど、只あるときとて、春の 花筐、花籠 和漢
花ゝゝゝゝろそ○正花ゝろゝ 三才画会 竹、器無係為筐有係為籃下略 和名抄 筐加太美

御傘 正花と、植物と、春と、ゝ○花ざかり共ゐ花とさすか
ごと、四時何の花ととさすものあらず只花と 佛家にて
いへバ専ら春ゐろ例あるゆゑ也 供養の
花と盛る器ハ 花活、花入、花筒、花瓶 このるゐ
ろ、正花と 皆花とさ

花車、花見車 開元遺事 楊国忠
を器あるを 移一木檻中ゐ植、下に輪脚を設け、挽ゐ絲縄と以てし、至
る所自ら移春檻と号す○花見車ハ花ある処へ乗く
行く車

花笠、花蔓、花の盃 増山井 其

器ゐ花と 敷ゐ花と
かざりく

花空穂 貞徳翁の説ゝ筏ゝ

花の散ゝろ

花の随身 年浪草 大臣家の賜ゝて召
見せらるゝ随身ゝあるゆゑ花
の身に随ふの義ゝもゝろゝバ楊
国忠が移春檻の類ゝや可尋

花造 年浪草 花肆
又造花肆ゝ類

二十○新古今集 琵琶新成櫻花と題

花むすび 新成櫻花ハ古き枝に作花のそれ
ゐ、新水の花の名と 探題ゐどの如く闇どころかゝる奇をこゝ、
又ハ男女の名ゐ准らく縁むそびの戯れそうのこと、女子の

花宴 類聚国史 弘仁二
年二月、神泉苑ゐ行幸ありて、花とそゐの、
文人ゐ命じて詩と賦し禄と賜ゝ

花軍 天宝遺事 長安春時遊賞
花宴の節ゝこれそうし始まりて
を盛ゐろゝ士女花と闘ゝ、栽挿むゐ奇多ことのと以て
勝ゝ、十金と用ゝ名花と市ふ庭ゐ植ゝ以ゝ春時の

闘備心

花莚 月令廣義 緑草鋪裀落花為褥○
落花の上ゐ坐そるとこゝいへ又花見の志

そのそらへ又花見 **花の席** ともいふこと

の都 釈名 国城と都とは八國君の居る所人の都會する所こゝは花の都ハ只都と云 **花をかざす** 法華經序品是時天曼多羅華、摩訶曼多羅華、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華ふりしく佛上に散ル 諸の大衆ハ何とあらん花と春にうる 御傘 法華經の四種の花とゆへ 御傘 花やうちる盃の踊とゝとゞこゝ常の事まで、せんさくもつかし、正花ニうるハ春し風靜花芳とらうる題おて世中おだやかに春

踊 **花香**

花の縁 一説ニ花の渕の誤ニ考ふ 御傘 花やうちるゝと風あることが歌ふそゞと花の香ハうつりけり 逍遥院

花鳥 季吟曰花ニやどる鳥し又花と鳥とゝとゝ、○花と鳥と二ツとゝ花ハ鳥の字清て訓ス

散る、飛花落花 天水抄 花のおつる体ハ山里深山人倫し絶くるる人も稀なる所花おるとゝく

さびしを体ニハ七ゝ五ゝ五ゝ七ゝ七ゝ五ゝ七ゝ七ゝ五ゝ七ゝ七

て剛こ

母子草

鼠麹草し、時珍曰、二月苗と生ず

莖葉柔軟くす許あり、白茸茸の

耳の毛の如し、小黄花を攅く、據子と結ぶ、大

本草鼠麹草又佛耳草と云、上巳日羹と用て粢と和、

近世多く救荒本草山茶料、條の高さ四三尺

芝葉と用 **令法** 枝梗ゞ灰白色、葉ハ皂莢の葉に似

リやぼう

ゝ円く又掬の葉ゝ似亦円く、四五葉一処に攅り生ず、莖ざ

ゝ円く、ちゝ祢どとかすこゝろ

おつる宇治の紫舟寂蓮 **春の湊** 春のけしきやうやと云心を

とあまの人と ○くれなゐ春のこゝろ

をゝそう芭蕉

正月

女叙位

八日、近代八

吉日とえらぶ

日本紀持統天皇五年春正月癸酉朔、賜内親王女王

内命婦等位ゝ是始ゝ公事根源是ハ女房の位階と

叙せらるゝことくおて、ふだりのぶらう

隔年おこなはるゝ **二宮大饗** 公事根源正月二日王

拝礼あつて饗ごくとし、二宮 卿以下二宮ハ泰りて

ゝハ東宮中宮の御事あつて

竈

紀事火炉と庭上ゝおき、合家

と庭竈とゝ 世間胸筓用

の家ゝおく庭ゝ竈つくり、釜うけ、焼火ゝく、庭ゝ敷物

ちゝく其家内旦那も下人もむつまじく楽居して、不断の居

間ハ明おそ、呼のあらハゝとて、揃ゝ入くる

丸餅と庭火ゝて焼くふとやら **螺香** 時珍

形蝸牛ゝ似て其類多く、唯泥水と食ふ、春月ゝ人取て鍋中

ゝ置こゑを蒸ハ、其肉おのづゝ出づ、酒ゝ煮糟ゝ煮こまと

兼三春物

食ふ

匂ひ鳥

莺の異名 異名分類 篠目ゝ

雪もや消そおふ。山里ゝ

南都東大寺おこなひて、朔日より十四日ゝ至く行之 紀事

牛王加持の行法を、朔日より七日ゝ至る、これを上七日と云、

二月

二月堂行、同水取

三月堂本尊観音の像大小二体あるも上七日ハ大像観音の前ふれいろ〳〵法事と修す八日ゟ十四日ニ至るこゝろ下七日と云こゝハ小観音の法事あり七日の夜又十四日の夜ハ水屋の井ゟ汲て牛王と貼するの水とす九年中用る処の水この両夜ゟ汲ハ汲く桶ニ蓄ふ古へ実忠菩狭国笥飯の明神の詫宣みづそゝぎ拮井ゟ汲ハ七日十四日の夜水ゟそゝぎ拮井ゟ涌出るそ今の井水の常ゟ満るか如し

韮 時珍曰葉青く翠し根と以く多つゞく子を以く種べし、葉の高さ三寸、剪ゟ日中を忌む一歳五ゟび剪ゟ過ず子と枚るとのハ只一ゟび剪とあるハ九月花と剪ゟを叢ゟ八月種ゟ春苗と食ふ、九月ゟ子を枚む

蒜 夏葷と食ふ秋種と

牧 おもとこのもの

接骨木花 和漢三才畫会 接骨木人家の藩離ゟ多ゟを植る三四月小白花を剪ゟ攅生〳〵ゟ朶と作す年ゟ

迩波櫛 和名 抄 朱櫻 和名波一名迩波佐久良 ○季吟曰山櫻も庭櫻も、その山ゟ咲ゟ庭ゟさくらと云と、名木のゟうゟハあらざること

蜷 時珍曰蝸嬴一名螺螄師ハ衆多ゟ江ハ湖溪ゟ江ゟ河ゟ池ゟ田ゟ皆ハ有こゝ故ゟ二名あり其大ゟ其形蝸牛ゟ似く其類衆多ゟ厚くたゞ泥水と食ふ春月人采く鍋中ゟ置く〳〵ゟ出ゞ清明の後其中ゟ虫あゟ用る堪ず 和名抄 河貝子 美奈用 蜷の字非也 下畧○

鮠子取 和漢三才畫会 南部津輕蝦夷最多し、九十月ゟて春ゟ至〳〵こゟを取、大さ尺餘あり一網ゟ数万を得る頭と尾と去〳〵魚ゟ、去るところの頭尾ハ田圃の培とある数の子即ち鮠の子く

雄の女詣 三月九一日御影供と修す故ゟ女人登山すること許す、いとゆゝ結縁の意ろ

三月

仁和寺高 滑稽雑談 當年星の九曜ゟ歳の初ゟ祭ん為ゟ其星の形像と彫て禁裡院中ハ佛工所〳〵調進す是と頭密の行者或ハ陰陽家ゟ仰せく星供と行なゟ、民家

ほ

正月

星佛

ゐと赤星を祭る、この九曜の次第、羅土水金日火計月木と一歳ごとに九歳にして九年目ごとに一めぐりす、当年の星とあるおのれ〳〵、当年の星とす、

紀事 倭俗新年三方輩ゐ海老尉鬚昆布摺燈穂俵ゐを置、先賀客ゐ供じて新年を祝ふ、是と蓬莱菜輩之種と蓬菜盤ごしゐ據ら

云 列子 渤海東有山、一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬萊華実皆有滋味食之不老不死、所居人皆仙聖

曽、神馬藻 漢語抄 奈乃里曽 和漢三才畫会 西南の海小多く冬ごろを取乾し、藁押とゆふ一握りづゝ折巻て束ねて来俵のかたちにつくりて穂俵と名づく、正月蓬莱輩の飾ゝす

糸ゐ出す

宝引

福引 雑談抄 餅の異名を福生果とゝ故ゐ餅と福とゝ云古へ福引として、餅と二人ゐて引ゐて侍ることゝ云、

福引宝引ゝまふもの

穂俵

朝式 奈ゝ里

蓬莱飾

爆竹

さ部左毛長の条生

骨正月

京大坂ゐく新年の嘉祝ゐ必ず鯽の脯と用ふ、其魚の骨ゐ大豆酒の糟を入ゐ煮熟して節物とゝくことを食ふ、故ゐ骨正月とゐ、

堀入

の部野大根の条生

兼三春

物波陵菜

時珍曰四月蕾と起ゝ一尺ばかりあり、雌雄あり、莖ゐ折ゐ、種の時研開まぐうゐ〳〵月初を過て乃生ず亦一異し

雌ハ実を結ゐ刺あり、種の時研開まぐ

防風

和漢三才

二月

孟会

其嫩き時醋未醤ゐ和ゝく食ふ極めて口さがやうもう、五月花を咲ゝさ子とむまぶ

本妙寺詣

初午日〇江州三上山の辺ゐ旧跡あり、今を二月初午詣あり、此本妙寺、山門ゐ属ゝく天台宗し、織田家の兵火ようやく、山門一旦亡滅の時、江州辺の末寺を共ゐ回禄す、ゑを又其一寺うぶゝ相傳ふ、近江国野洲郡、百足山本明寺、本尊馬頭観音ゝ、今旧跡、三上山中ゐあり、堂宇僅ゐ二間四面里俗の説ふ、本尊ハ俵秀郷が守り本尊ゝし御長一尺ばかり、毎年二月初午開帳あ、甥口の鎗ゐ、百足山本明寺とゐ、其麓の

亜林ゟ三上明神の社を、是と改く思ふ、本明寺観音八三上明神の本地佛ゟ〜ゟや、堂の前ゟ三拾三間の矢場あり、初午日今ゟ至〜弓矢荘嚴と〜里民も弓矢と商ふ参詣の人ゟを買〜奉納す、本尊平日ハ秘仏ゟ〜、初午日或ハ三十三年と開帳の期とす、當日初午の外ハ北ゟゟ南ゟゟ村の百姓四十人ゟ講を結びゟ〜一村ゟ六人で各十二人を年頭ゟ〜、万事と支配す、本尊、南村ゟゟ北村ゟゟ封を付、北村ゟゟ南村ゟゟ封を付く互ゟ尊敬の意を示すとゟ、初午ゟ日、節分の豆と十二銅と捧て、諸人祈願すとゟ

三月

木瓜花 和漢三才圖 世ゟ木瓜と称す

是本桃ゟ〜木瓜ゟあ〜ず、近頃唐木瓜とゟをのゟ、人其花を愛すゟ乃ち真の木瓜ゟ〜 稽頌圖經 木瓜ハ棠の如く、春の末花 花彙 山中ゟ多く生ず、一根叢生す、葉長さ一尺、冬ゟ歴ゟ〜凋まず、形短き芒ゟ似く、厚くて〜とく〜深紅色 緑色し、冬ゟ中箭と発〜、数簇苞ゟあす、紅白色、三

春蘭花

月ゟ玉〜幹の長さ數寸 揺ゟ當つ〜花苞中ゟ〜出くたぶ一花五出、青黄色、形建蘭花ゟ似く〜ちるぐ〜や、潤〜、香気あり、此物蘭譜ゟ出る独頭花ゟ

郭公の巣 和漢三才圖會 杜鵑ゟ巣と嘗

なぜことあ〜ぐず、鶯の古巣と窺く借〜卵と生ず 諺文 杜鵑 蜀王望帝所化也、至今寄巣生子、百鳥為補其雛、尚如君臣、

二月

蛇蝮地虫の類穴を出る 月令 仲春之月、蟄虫咸動啓戸始出注、謂始穿其穴而出也

月歳徳神 元方棚 紀事 陰陽家来年の支干ゟ因〜四方の間吉兆を考

ことを得方と祢す、 蒲簍内傳 年徳神ハ顔梨女いまゆる八将神の母ちゃ、云〻 下巻

桃符、桃板、桃梗 仙木、神荼 淮南子 昇、桃梗ゟ死す、許慎注云、梗ハ木杖ゟ、桃と次てことをつくゟ以て昇をとらへ殺すゟ以来鬼桃と畏ゟ、今人桃梗と沢く杙と作り、歳旦ゟ門ゟ植て

鬼を砕くこれ其故と 六帖 元日桃符を造り戸
ふ着くことを仙木と云ふ 百鬼の所畏こ 風俗通 東
海度朔山ふ桃樹を有り其卑枝東北ふ
むく鬼門と云二神あり、神荼鬱壘と云、衆鬼出入執て
以て虎ふ飼ふこゝおいて 黄帝法く 膏薬 三日
こゝ象こゝ桃板を門戸の上ふ立り
主上へ千癒膏と云膏薬と進ろこ 後醍醐拠 御額并ふ
耳の裏へ傳ふ云々 江次第 二月上丑之 右の並名指と云て
左の掌ふ書つけ、注ふ、右の寸四の指と曲るは、
是大師の印相こと云 一名千癒万病膏と云、かくの
名と忌て 屠蘇 とむやと云 供ずの条ふ出て 年男
汲ひと年 鳥追 若水と
男とりふ 雍州府志 七丐の人元日より十
面と覆ひ手とくゝ祝語をなす門戸ふ至て米 五日小至ら笠と着白巾を以く
銭と乞ふ、是と敲の与次郎と号す又鳥追と称す、
とと民間田疇の鳥と追ひやらふ辞なりとぞ ○
今東都ふて八俗ふ女太夫と唱ふるもの編笠と着、三

絃をひきうたひ銭をこふ 年玉 新年の賜ものこと
大黒の湯 三日武江東叡山中護国院ふ大黒天あり、正
月三日、餅と湯ふひく泰詣の人ふ飲ます
こゝを大黒湯と云、こゝをのむもの必所願成就をとぞ
とぞ、此日諸人泰詣す、或ハお福の湯とをひやう
さ部左義 長の条ふ云 宿直人 真言院御修 泊山 ゐ部の、鳴
法の条ふ出す 鳥狩の条
に 鳥さうる 書言故事 仲春厥民と
出、 ハ折ろ鳥獣ハ孳尾 十のゝの花
ま、部松の 晉宋家筑紫へ左遷の時、梅ご詠ひのる
花の条ふ出 梅 哥ふ、東風ふバ匂ひおこせよ梅花あ
るじなしとて春をな忘そよ於て とめこゝの梅
梅 毘 ゆくく、謫所の庭ふ生ずゝゝ
新古今 とめてう梅さうろう我宿と
うゝゝしくハをうふこそよけれ 西行 野老 和漢三才
葉願る薯蕷ふ似くふ白花とひさ青き子と結ぶ三稜 倭訓栞 云蔓
ろ、其根老萱薯蕷の形ふ類す、俗ふ野老しゝ、鰕とぞ

海老ゝ〳〵て共ホ

嘉祝の食物ニ充ツ

兼三春物

烏轉 水鳥囀

古今 百千鳥さくづる春ハ物ごゝろ

あゝなそゝぞゝゆく 我ぞふりゆく

めるゝこゝゝゝゝゝゝ 公忠

紅梅の花ふゝゝゝ

そのゝゝゝ鶏冠のおゝゝ

紅色みゝゝ石ゝゝゝて生ず

二月 東福寺懺法

恵日山東福寺八洛の東南ゝゝ門前の街道ふ橋ゝ北と一の橋

とゝ愛宕郡の境ゝ南と二の橋と名ヅク、即稲荷の社前し、

毎年二月ホ方寸の紙ホ寿の字と書ゝ、當寺内の同聚庵

ようゝ出ス火災疫病と除くゝゝ〇今日初午方丈ゝおいゝゝ、

明兆ガ画ク処の観音三十三幅 四日〇神祇官ニ於テ

の像と掲ゝ懺法と修ス

祈年祭

神祇式 祈年祭、神三千一百三十二座之内、神祇官祭ル

神七百三十七座 案上 案下 国司

祭神二十三百九十五座 古ヽ

道明寺祭 九五日、河内国志紀郡

土師村ゆゝ一名土師寺ゝゝ中興住持の尼覚壽ハ菅原相

の伯母ゝゝ故ホ左遷の時、この寺へ立ゝゝゝ、

雑談抄 當寺興の天神ゝゝ、二社合ゝゝ、この二十五日ホ祭ると、道明寺祭ゝゝ〇世ゝ

道明寺 精進ゝゝ、この八、

此寺の比丘尼の手業ゝゝ

鳥巣 古巣

五雑組 羽族之巧過於人、其為巣只汉一口而結束牢固甚於人工、大

風拔木而巣終不傾也、雑木枯枝縦横重畳不

知得膠固無恙、此理之不可曉者、凡鳥将生卵、

先雌雄営巣、成而後遺卵伏子及長成飛去

則空其巣不復用矣

三月 桃花粥

月令廣義 唐徳宗以上巳節為令節、桃花節據之乎

鶏合

列子 左傳 事文類聚 紀事禁

裡清涼殿南階の前ゝゝ闘雞あゝ、其雞諸家の中雲客

ゝゝゝ出ゝる、仙納弥市此ゝゝ頭ゝ

勝負ゝ決ス、是ゝゝ行事ゝ称ス

土佐海ニ硯

桃花の節

為令節、桃花節據之乎

月令廣義 唐徳宗以上巳節為令節、桃花節據之乎

列子 左傳 事文類聚 紀事禁

裡清涼殿南階の前ゝゝ闘雞あゝ、其雞諸家の中雲客

ゝゝゝ出ゝる、仙納弥市此ゝゝ頭ゝ

勝負ゝ決ス、是ゝゝ行事ゝ称ス

土佐海ニ硯

石取 雑談抄云、毛吹草ふ、三月三日土佐国の西寺の御崎の海底にて硯石と取出す事侍る、其潮干の時刻ふ及ぐ、西寺の僧、海上ふ出ぐ經と讀誦すぐ侍る、今世多く八国主領主の采地とふるぐ、擬ぐふ石ととぐふ

鳶巣 鳶の巣八樹上ぐ在、木の枝と以ぐ組合をぐ、巣とぐふ

歸雁 千載集 花八根ふ鳥八古巣ふぐぐ春のとぐふる人ぞおぎ 順徳院

虎尾櫻 此樹の類ぐべ枝條屈蟠ぢぐ、花の並みぐぐ、枝上ふ花と葉と斑みぐぐ、虎ふの如ぐ、故ふ虎尾の名を、

ち 正月 朝賀、朝拜 奏賀、奏瑞 公事 小朝拜、

根源 朝賀ごぢと朝拜とぢとぢ、元日辰の時ふ天皇太極殿ふ行幸あぢぐぐ行ぢぢぐ、群臣ぐぐ礼服と着ぐて、ぢぢぐぐ御即位の儀式ふ同ぐ、奏賀、奏瑞と八、去年の目出度嘉瑞どぢとのあぢぢを国ぐとぐふぐとせバぢぢと記ぢて、今日奏すぐ、小朝拜八只臣下の元日あぢぐれだ、天子と拜ぐぐ奉ぐべぢぢぐぐ請ぐ行ぢぐ公事ぐぐぐ

本朝食鑑 二月彼岸ふ種と下す、三四月ふ苗と生ず、葉と采る、暑蔬と食ふ足る、五月黄花と開く、初て綻るる野菊のごとく、一花子と結ぶ

三月 中和節

ふく寒食す、上巳同時二月と以ふ、中和の節と云ふ、按るふ、山櫻のうちふ、二月朔と以ふ、節と名づけむと欲す、汐加へふ三令

兒櫻

別種ことあり

山櫻の一種あり、又小櫻のるふくふ節ことあり

紅色と含ふ羞ふふく愛らき花あり、故ふ児櫻の称あるとぞ

時珍曰、蝶ハ髪鬢美ありふ、蛾ハ眉美ありふ、故ふ又胡蝶と名づく、俗ふ髪鬢を胡とすふ

蝶

胡蝶、黄蝶、蝶々、鳩車、胡蝶の夢、

格物論 一種大さ蝙蝠の如ふ、或ハ黒、或ハ赤、或ハ青、斑るるものと、鳳子と名づ、一名鳳車、又鬼子、

新撰字鏡 和名加波比良古

荘子齊物論 昔荘周夢ふ胡蝶ふる、翩々然ふふて胡蝶ありて、自喩で志ふ適ふふ周ふることをもふざるふ、俄然ふふく覚る則ハ蘧々然ふふて周ある、もふべ周ふ夢ふ胡蝶ふるふ、蝶の夢ふ周ふあるふ、周と胡蝶とかふふぞ分あふむ

三月

重三

野客叢書 今五月五日を重九とふ、三月三日ふ重五とふらい、九月九日を亦重三とふふ

長春

時珍曰、月季花ハ處々ふ人家ふ多ふ栽ふふ、挿さむ、亦薔薇の類ふ、青き莖青き葉ふ硬き刺あふて、花ハ薔薇ふふ小ふふて、深紅千葉厚靭ふふ、月と逐て開放ふて実と結ばず

丁子草

大和本草 葉ハ柳の葉ふ似ふい中の堅筋すふ白く、花ハ子ふ似て浅葱色ふふ

茶摘

燕ふ春中始て嫩葉ふ生ず、蕊焙て苦き水ふ去り、こふふ末ふふ、飲べきふ

本朝食鑑 九茶ふ採ふ候ハ心十八夜ふふ、氣候ふ遅速ふ随ふふ、八十八夜ふ前後ふ宜ふふ、○宇治ふ茶師馬場氏信俊ふ曰、始ふふ茶ふ摘ふふ手始ふふ、九三月朝日、或ハ三月晦日ふふ、

正月 履端

左傳 先王ふ之正時也、履端ふふ於終ふふ、○

両のとの

小土器ふふ、名義詳ふふ、疑ふふ元日と三ふ雑煮ふ膳ふふ、右ふふ此両種ふふ、八開豆開牛房ふふ両種と土器ふふ盛て物ふふ、両種ふふ盛物ふふ、其ふふ略語ふふ、又料ふふ

臨時客 年中行事哥合 正月二日、臨時客とて、摂政関白の家か、春の始、大臣以下の上達部と招て遊ぶことあるうへ、さまざまある公務ありて、臨時客とて侍る哥、大方大臣の母屋の大饗八年とて〳〵行侍るべし、鷺飼ふ童ハ領するなり、

鏤人 唐の時三月三日鏤人蒸餅と云ふ事、鏤く八咲ふるよし雛人形のごとくなるべし

履新之慶 季吟曰履端ハ端ようなり、其興ありそうと云ふ事にて同下

林檎花 宋馬志開本艸 林檎樹奈る似く木の条に出き部の曲

三月

兼三春物 毛衣ふつく〳〵鴨の足 芭蕉○常にぬくいと云曖ること

ぬくい 元日ふ降る

正月御降 雨雪とふ

大服 大服と八点茶の名と記事 其式奈と点ど塩梅山椒を茗碗の内ふ漬て合家こぞとのむ又賀客ふ献ず、これを大服と云、季吟曰、元日ニ大ふくふくたる茶と大福とのひ物ふ用ふるこそんとぞ、」大服ハ去年の青葉の白ひあるの卵 防川 押鮎 江次第 元日押鮎一坏煮塩鮎一坏、云〻」 玉佐日記 元日ふ用ふることそ、是歯固の具ふ〇鮎ハ年魚とて、其年長ずる故ニ、新年嘉祝の食とす、

女玉禄 八日ニハ女王ふ禄を賜ふことふ、其禄法、人別ふ絹二疋綿六屯とおふて 江次第ふ委〳〵、

公事根源 云、女王禄と字ニハ書なれども、たゞ王禄とのみ、そして、女の字を略するを口傳とハする、

男踏歌 公事根源 踏哥とハ正月十四日の男踏哥のことふて侍るべし、近頃おこなハれ侍るハ女踏哥ふ、そもそも八十六日ニ、光源氏物語ちがふこと多く男踏哥のことを侍るや、

岷江入楚 天武天皇の御時ふ始てふ、聖武天皇の御時ふ行ハれ、おこなハる、又曰、円融院天元六年正月十四日、有ニ男踏哥、以後中絶、

西宮記 古語ニアラレバリト讀云、曲の終りふ、万年アラレとハ祝言と必ずアラレバリとハ納むる故ニアラレバリとハ云ふ未詳

花鳥余情 男踏哥十四日ニハ、殿上地下の四位以

下の輩もそゝぐぎ呼ぶとゞめ、催馬楽ともいふ舞ふ
あつることなり、○男踏哥、女踏哥、隔年みるべし
流抄 みそかの夜、○かゞ〳〵のくさ〳〵は河海抄 踏哥の人、綿の造
花を次く、冠の額にかざしけることは、踏哥の人まづ
禄 女踏歌 十六日 公事根源 たゞし正月十五六日八月の
頃あるべし、京中の男女の声〳〵物うたひめ〳〵
つどひて、年始の祝詞をうたひ、舞ともなほ舞ひ
故ふ、踏哥とは天武天皇三年正月廿六日大極殿に渡御
あつて、男女うたふことなり〳〵闇夜ふ踏哥のことみえたり、然
るに八月のころもあるは如何、○此外季〳〵のことは 江次第
○鳥羽王の闇の夜うたふべし、
等のことも今こゝに略ス
の夜より疫神を祭るが故ふ、男は夜分よりでも参詣す女子
は夜るとより時分の家事多くて、暇なく詣づることえ
ず、よつて十九日を節分の代りふ詣づる心ざし、女節分とよる
なり、吉田の清核の 大鏡
条と互見すべし 女礼者 注ふ 村上
帝天暦年中ニ清涼殿の梅樹枯萎ひ、勅ありて、花開けば其色
深く其香濃く、こゝに其えらびたる
應ずるものゝ主の女、枝ふ短冊を着て献ず、既ふ叶ふ禁
庭ふ移す、主上これを見させ給ふ歌ふ、勅をもつて
もてなさる、嘗の宿もこゝに ○此木相国寺中ニ
こゝろむ 紀貫之女 今此木 崔禹食経 状芳草ふ似
抄 薺菜、一名荵蒿、和名於八木 和名
く香ばしく墨と炒りてこれを食ふ 夫木 ふはなさ雪よ
のおそざくらさきぬらん信実 ○よ部よめざさの条見合すべし 大苔
仕部 萬歳
くさ 黍の条ふ云 三春物 臘月 白楽天詩不明
天暗臘七月、新古今 てりもせず曇りも 大江重 於胡海の
まだ寒き春の夜のおぼろ月夜おもしろき 和名抄 海中石上ふ生ず、乱髪
苔の如くもろ〳〵青色ふ東海ニ多し 二月 おそざき
釈奠のつかさ、
つとめて せ部ニて可見 黄梅 大和本草 黄梅ハ小樹ふして、
もろ〳〵も本草ニ溼草の

下み載て曰、高さ二三尺、方る莖厚を葉、初生の葉の如くく、歯あり、面青く背淡し、云々、所言ロ忽ち同じ、正月み黄花を開く、故に迎春花と名づく、花のころ梅と倶に咲、故ふ国俗黄梅とらふ、

大原野祭

上ノ卯日○山城国乙訓郡み在、春日と同神也、

公事根源　この神ハ皇后の参詣のためとて、本社遠きをふるとて、都近きところに侍やとて、奉らるゝ、されバ大原野行啓ちどりとぞ此ほかう、毎年彼岸の申日に、摂州四天王寺念仏堂ろく此ほかう、天華の名号ありて、北八菩薩の画像と掲ゝ念仏修行をし、相傳ふ、良志上人、洛北鞍馬の毘沙門天ようて感得の御影ありと、今日平野大念寺来りて法事を修行ふ、法会ふ

踊念仏

ろぐ大和河内の道心者来りて各十徳と着一鉦二鉦と付て、手ふ持ゝ踊ろ踊ろふハおゝぜ、一心不乱ふ念仏ちて、誠ふ感ふたくく踊るがごくこゆるし、大和河内ふ者とゞぐも由緒正ゝを豪家の禅門まくでハ此法席ふ入事と許さゝとも、此寺の西門ハ極楽の東門ふおろろふ吹ふ、昔ようて浄業を修するの人、此寺ふてぞろて西海の落日を観ようし弘法大師まこの西門ふて日想観と修しうへ、法然上人も、此地西南の一宇今無号一心寺ふおゝくく、没日ふ浄土の観を別ゝ由、旧記ろを侍ろや、今と諸人弥陀の来迎と拝をゝて、今宵彼岸の中日群集すとも、是没日ふ向て浄刹の方を拝むの遺意や

萩の焼原

原と云

年浪草　引説ふとゞぐのやけくくろをゝけくく若菜つゝを誰とゝゝむ

続古今　春部　順徳院御製、かゝが

萩の若葉

三月

御身拭

十九日○山城国嵯峨清涼寺の本尊釈迦如来、五尺二分の立像ゆくく、天竺毘首羯磨赤栴檀と汉く作る処ゝ、今日開帳を、寺僧白巾を以くく仏像とぬぐひ拂ふこゝきと御身拭とゝ、この起ハ此堂建立の人、七日籠のころふ本尊告ふ、汝が父今生と畜生ふ溥ふ此堂

の材木を引く牛とある、弥増々善を為すべし、急ぎこの牛を乞得堂の側へ曳ざせ、父の恩を報ぜん、養ひが三月十九日に死ぬ牛の衣を以て如来と拭ひ赤栴檀の薫りをうつし牛を着せ奏へたり、其後年毎々々今日如来の妙香を以て、衆生煩悩の不浄と清むと知り

梨 芋生の浦

勢州芋生の浦、梨花の名呼び新古今撰ばれさのもふの子山梨の花 俊頼

正月

若水

包井、井華水 公事根源あり

若水桶

今の春立日是を奉ると若水とゆふ、こゝを以て年中の邪気を除くと云、李文公八年中の邪気を除くと云、李文公

世諺問答 る故し

くゝる水と飲事まぐるうるずとゆふ意し今歳旦ごとに用ゐるとゝゝ○包井ハ御内膳司より、正月上子日に是を奉る、寛平年中より始まりしや、延喜十年正月七日の後暁より七種の若菜を

御傘 若水立春し元日ゟあ

生気の方の井ゟ盃とゝく

立春ゟ開くと包井開とゝも

若菜

初若菜 公事根源

内蔵寮差

供ぜらる○七種

若恵

夷廻 紀事 京師街頭より鞍馬毘沙門天の紙符差ニ

の条見合ハすゝ

若恵美須ゟの福神の簡を賣る、四民こぞりて門戸ゟ貼り、或八歳徳棚ゟ供ゝ、元日是を拝ゝ福と祈りて祓をとゝむ、南都の市中毎年吉野より来る、守り福神の札を賣、二日の暁又毘沙門天の札を賣る、これを三日の暁又恵比須と迎ふるとの、猶京師ゟて元日の暁天ゟ若恵美須の札を賣ぎゝ○夷廻ハこゝ也 倭儡師をゝ津の国西宮ゟ跡を垂ゐふ夷三郎殿歳の始ゟ衆生ゟ笑ひとりて富貴と守らんとの託宣ゐく、昔より西宮より春の始ゟハ都を始め方々倭儡ゐりて勧むるゝ、この倭儡師を夷ゝこゝとゝもゝ、路鳥水を夷廻とゝゝ、又京大坂とゝ大黒舞の類ゐく、夷三郎殿の姿をまねび、鯛と釣ざこゝゝゐると雑ゝゝれども、こゝにて悲田寺或ハ四ケ所の垣外の賤き者の業ゝ

若餅

雑談抄 三日の間ゟ搗と若餅由古老いふゝ 一説ゐゝ三ケ日ゟ餅搗ことある、俗ゟ餅の大小とゝ時、小ゝを若ゝゝゝ、是小の詞と忌てゝゝゝし賀客ゟ饗すゐ便ある故ゟ小ゝと賄ふ故とゝく唯祝語とゝる

の **若草** 新草、○三種ともふ、春初草、艸の初生とき幸木の条ふ云 **若緑** 本草 松二三月雞と抽んでゝ花と生ずすべて、松緑柳緑ふ其色の青黄の間色とりつゝふべし 兼三春物 **若布** 桑布ふ對して弱布とも **山蓼** 山蓼山姜の名あり、中夏の書ふこゝえず、漢名ちべ 和漢三才圖会 山中水ふ近き石間ふ多くあり、人家ふこゝ也とし 大和本草 山蓼加茂蓼ふ似く、其根の形味生姜ふ似ゝ、故ふ 山蓼 山蓼の名あり、中夏の書ふこゝえず、漢名ちべ 和漢三才圖会 山中水ふ近き石間ふ多くあり、人家ふこゝ也とし 大和本草 山蓼加茂蓼ふ似く、其根の形味生姜ふ似ゝ、故ふ

二月

蕨 一種る、二月種と下して三四月苗と生ず、葉蕗及び蓼の葉ふ似ゝ、六七月穂と為すこと三寸、細ゝる黄白花とひらき、細ゝる子を結 早蕨、鐮蕨、 本朝食鑑 春初蕨、蕨手、の初め先生ずると早蕨と号す ○時珍曰 二三月芽と生ず、拳曲として状ち小兒の拳の如し、 朗詠 紫塵嬾蕨人拳手 ○仙人の碁ごと指さす蕨ゐ 乙由 ○序ニこの朗詠の句、塵と嬾との二字ハ誤のゝ、下学集ふ辨じ

貢 ふの塵ともちゐゝ春の野ふあるる蕨ハとのうげみて、こゝろをゝ心えゐゝべし、 **若紫** 本草 蘇恭曰 紫草ハ蘭香ふ似て苣赤く節青し、二月花とひらく、紫白色ゝ実とむすぶ白色ゝ秋熟す ○雑談抄 連歌ふ若紫と春ふ用ひ、花紫を秋ふ用ふ、本草ふの説のごとく、二三月花とひらくとハいへど、和ふあるとの、秋月花とむすぶ一種あるとや考ふべし、若紫ハ春月の嫩苗とりてゝ食り **三月** **若蒋** 本朝食鑑 訓麻古毛 古訓古毛 江湖池沢の中ふ生ず、二三月白芽を生ず、筍の如し、是蔬菊菱白蔬菜也、こゝと若蔬とらべて **若薤** あ、部鮎の子の条ふ云 **忘霜** 八十八日の夜あり、必霜あり、諸木の花房嫩芽こゝろあり、時ハ多く枯る故ふ此前後霞簾を以て是を蓋ひ霜気とふせぐ、園畝ふこゝと長る、八十八夜をぐる時ハ霜と防ぐの霞簾とを撤す、八十八夜の後さゝ〳〵に霜あり、故ふ忘霜別霜とも

季吟曰、在家の妻戸ふ掃と搆へく神と祭つて夜ハうくけふ
灯と供へ侍ること○未其義と詳こそぐ、按ふ月令廣義
ふ云、除夜門神を祭る注ふ道家門神と謂て左と門丞と
いひ、右と戸尉と千、蓋一門と司どるの神と其義桃符よ
こと本づく、神荼鬱壘と以て、邪と辟る故ふ門松立松
こと千門ふ樹るこく本朝も此意ふ據う

門松

世諺問答 門の松立ること、昔こうまあつて
来さるまぐ、松ハ千年と契て、
竹ハ万代と契ることのかこまハ、
年の始ふいそひ有ろう、

飾松、飾竹

飾縄、飾藁

同上 もめ縄とこそのハ、左縄ふうて、縄のもーとそろくぬハするん
のく、左ハ清浄るつれこと、
ちう、浄不浄ところつ故ふ、神事の時ハ
必引く、正月の神を祝ひ祭るところもう、

飾炭

本草 白炭除夜立之戸内亦辟邪悪云くこの義ちく、
細目

飾海老

紅鰕、俗ふ伊勢海
老とく、或ハ鎌倉え

門の禮帳

明世説新語排 びとも称ーて賀祝つこと
京師節日主人 門ふ
圖俗春盤ふことを用ふ、

皆出賀惟置白紙并筆硯于几賀客至記其名」

歳の子

これ本邦ふて年始五節供ふ出す賀客賬ふ同ド

本草 鼢の子く臘月歳始及び婚家以て
鼢祝の有ーて多子の義ふ取ろかう

搗栗

和漢三才圖会 搗の訓を勝の字ふ
かく、諸勝負の利あると悦て用之

かんと祝ふ

雑煮の部

懸鯛

紀事 元日小鯛魚一双藁索を以て
条ふ云 両喉と結び歯裂并由都里葉を挿
く竈の上ふ懸て是を掛鯛と称す六月朔日ニ至て、和
美ーて食ふ之云、かくのごくまる時ハ温疫痢病諸の
邪気を辟ろく

粥木、粥杖

十五日 粥の木ふて女の尻とう
てバ、男子をうむ呪ふと
く打こと云、女ハうれごと防ぐく、抛草紙、狭衣物語ふど
みえたれごと本文ふハ見へ侍らねバ
濃、飛騨、三河の三國ふて漆掻の木と一尺二寸ばかふ切
上下ようう削りかく、さ紅の方に左巻のうちち或ハ柳櫻花の
ごく紅ふて紙ふ〜切ふて粘ーて松煙ふくまと煤べ其
かうちをとう除くれバ白く其摸様残る、是と名づくて

祝棒とも新婦ある家毎ゐ入〳〵新婦の腰とゝん、兒童の戯ゐ入〳〵食ゐと粥柱とも、七日の粥ゐ入〳〵食ゐと五日の粥ゐハ往古ゐ入〳〵食ゐ部男踏哥の条ゐ出す、**鏡開**　開とのつゞる条ゐ云

獺の祭りゐへ〳〵ゐ瀬田の橋

祭魚　堆雅　獺取鯉於水斎、四方陳之進而弗食也、世謂之祭魚、蓋祭其先

草　物の異名ゐ〇山ゞとの彩ゞよさけるかざゐ

色とゝ香ゞとゐたゞよへるやさん、順徳院御製　兼

三春物　**霞**　和名抄　唐韵云、霞赤氣雲也　和名加須美

〇吾邦みゐ〳〵ゐ霞の網ゐ水辺ゐあゞ霞の海

の字ゐ、**霞の網**　御傘　水辺ゐあゞ　**霞の衣**

あれら、　家集ゐ衣ゐ

月とゐゞやこゐるとの　霞の

蜜のごべごゐ　正徹　御傘　衣類ゐあゞ　是も形容し、古今　春のゐゐる霞の衣

粥柱　粥の中〳〵餅と入〳〵食ゐと

かざしの綿　部

獺魚を祭る

礼月令　孟春月獺

香散見

霞汲　流ゐ霞、ゐとふ酒とゐ　抱朴子　到天上仙人以流霞工盃飲之　書言故事　天仙酒名流霞、

霞の袖　霞のゐ袖、

霞の窓、霞の笆　霧のごとゐふ霞の衣の縁語ゐるべし、

霞の波、霞の沖　霞の海の縁語なゞ、

鐘霞む　春の

ゐゞ、声のかまむとゐるゝ、夜ゐあゞず、

霞の洞　真活。詩、万里洞中朝

霞の壇　御傘　霞の洞、仙境とゐ、王帝九光霞内宿仙

又院の御所を下ゐ、

霞の命　仙人ハ霞とふゞ

て命とのゞるとの

ゐゐふゐハ、長ゐとゐふ　〇八重霞　八雲御抄　八重ハ只深ゐとゐり、

多ゐとゞゐを八重と号す、〇九うすゐ、仙境とゐとゐり、

〇一下霞、横霞、ゞまも霞のゐゐべゐとゐ風情とゐ、

〇春のゞし、契沖曰、春のゞしとハ霞とゐゐ、奥風の哥、山ゞぜ

の花の香ゞゞゐふゐハ春の霞ゞゞし

陽炎 蜻蛉輪 陽火糸遊 同物二名ニ、春気地より升る
を陽炎或ハうげろふ又陽炎ともいふ 空にちらつき
ゆらめくもの

川柳 水楊ニ、其葉円うして尖り、枝短く硬くして、水辺ニ生ズ、又蒲柳と云、川ぞひ柳ハ只川辺の柳をいふ、

門柳 陶淵明宅の辺ニ手づから五株の柳を栽ゑしより五柳先生と号す

風見草 柳の異名ニ 蔵玉 あづさ弓春の梢ニ風見草のごけきつろのうちおびくくもむ

二月 春日祭

上申日ニ大中納言の内一人、勅使として奉幣の義あり、上卿ハ、前夜京を出て、南都あをもろく、夜ニ入て奉幣の勅使を勤ろう、左右の馬の允神馬一疋をひく、翌午剋帰京ニて上卿往還の間雨ふらざるハ、祭の前日、春日の社家祭日の支干と南曹の弁ニ告、朔日ニ関白氏長者并諸家門外ニ僧尼 公事根元 輕重服の輩不可入の札を立

亀戸天神花踊 九五日 江戸本所の赤、亀戸村ニ、二月九二日花踊の神事ニ、祭礼八月廿五日ニ、本所牛御前と隔年ニ、

貝寄 雑部抄 天王寺法花記ニも粗其旨あるごとく、仏縁感動ニ、二月九日前後ニ難波の浦辺ニ吹風の浦ニ浮ニ出て、此會ニ値遇ニ奉る謂なり、傳ニ曰、竜城の魚鼈鱗介の種類あつて此沖津風ニ濱ニ吹よせらるる貝と拾ひとりて、聖霊会供養の造花ニ着て上宮太子の前ニ献ず、恰と麥の苗葉のごく叢生ず、女児春月是を採りて其葉三四寸バの髪ニ結び髪と組のごく編ひとす、故ニ髪草の名あり○又雛草と云、為忠朝臣の哥あり、

髪草 本名未詳、九二月三五

かほよ鳥 景鳥 八雲御抄 貞鳥ハ春日山ニあるよし、
尺恋するものとぞ夜鷹ニ似ず

恋すとの心ハ、まだ〳〵ちいさき鳥ニて、源氏物語若菜巻にもあるごとく、是其鳥と定る証なし、但定家ハ知之ごとくニ、ちいさきを推ふ只ごとく、花ごとく、花ごとく、貞鳥同ごとく 仙覚抄 此鳥のなくと鳴声と名とをもて 湖月抄 貞鳥ハ深山にある鳥ニ、常陸国ニ小、杜若とよめる花と云、此花咲時鳴とぞ○森文曰、のれ鳥

かりよ鳥ともこと鳥一物みゝ、何の鳥ともさだめがたきまゝや○此外諸書おさ〳〵の説あれども略す。

歸鴈 今ハの鴈 **月令** 孟春、月鴻雁來 淮南子 燕春分而來、雁、春分而去○今ハの鴈、今ハとハ今ハかくせんもどゝ云心、今ハかくせんと思ひうみをさすめり **猿簑** 立さるぐ今や紀の一人 澤雉

鳴 **夫木集** 川越のをちの田中の夕闇ふ 為家

蛙 何ぞときけば亀のかく鳴と **長明無名抄** 井手の蛙とよみてことやうあるよし侍き、世の人おもひもぐ〳〵ハ只水うみて侍るあひだ、それもたゞひもぐ〳〵とぞ思ひ侍るらん、まぐ〳〵ず、只この井手の川うみて侍るくゝ、色ふかきやうみえず、あさハかなるやうつゝ、あるハことゞもあるくことゞもいてきまぐ〳〵ず、をゝ水うみてすみ〳〵、夜ふかるまぐ〳〵鳴ふいとゞ心すごくおぼえ侍るなり **無声の蛙** ○無声の蛙とハ、江戸小石川無量山壽經寺傳通院の開山了誉上人聖冏和尚勤學のさまぐ〳〵げんとて、一山の蛙と封じこめたりしとも、當山の蛙今に声なしとぞ傳ふ

三月

寒食 荊楚歲時記 去冬至一百五日、有疾風甚雨、謂之寒食 周礼 烜氏仲春禁火于國中 注 季春將出火 琴操 介子綏、五月五日以て死す、文公これを哀み、民をして火を挙ざらしむ、今の人冬至より一百五日を寒食とす、其説已ふ互ふ異あり **五雜俎** 鄴中記ふ舜州介子推が為ふ火をたつること三日、漢書周挙傳ふ太原今子推が骸を焼と以毎冬中一月寒食す、魏武帝の時、太原上黨冬至後百有五日皆火と絶す、訛を以て訛を傳ふ唐の時ふ至て遂ふ普天皆然而て滅ず、云ゝ民間禁を犯すふ至て、雞羽と以挿て灰中ニ入る焦ざるの八輒死と論ず、是何等の刑法ぞや、國朝火を禁ぜざると其見卓矣

杏の粥 **玉燭宝典** 寒食ふ大麦粥をつくり、杏仁を研て酪〳〵餹と以て是ふ沃 ○来の粥、つゝゝ、来 **事文類聚** 寒食ふ麵と以ふ葱餅様をつくり、名けて来饘と云、疑らくハ来ゝ粥 ○

揚花粥 青精飯、潜確類書云、洛陽の人家寒食ふ萬花爨と雑ひ楊花粥と煮る、 **玉燭宝典** 居人寒食ふ遇

ベ楊枏の葉をもて飯を染ふ、色青くもて光あり、是と食
つべ陽気を資く、道家これを青精飯青飯飯とふ、
○桃花粥 金門歳節 寒食ふ萬花奥 ○楡柳の火 周礼
を粢ひ桃花粥を煮ふ
四時回の火を変る、春ハ楡柳の火と取、夏ハ棗杏の火を取、
季夏ハ柔柘の火と取、秋ハ柞槲の火と取、冬ハ檀檀の火と
取る、 輦下歳時記 唐楡柳の火を取て
以て侍臣ふたまふ、陽気ふ順ふ、

かご 草 櫻の異名、

きの大宮人ハいとまあれや桜かざして名づけつゝ
古哥よめる是歟、

樺櫻 大和本艸
樺をバざくらと訓るハ非し、かばざくらと訓べし、
加尓波、今云加波佐久羅 ○樺櫻ハ山櫻一重櫻ニ、 多識篇
の属、古今ふゝざくらとのせたる是歟、

海棠 瞧花
唐楊貴妃傳 明皇嘗て木真妃と召す、妃酒と被て新ふ
起く、帝曰、此乃ち海棠の睡未足 雑話抄 俗ニ
耳、」ふゝかゝる花の名ふまに出ろ

柳葦 柳の花とゝん
で柳の葦と称す、」按ふ柳の花三月未開、依て宗瑞ゝ
柳の秕ともゝど、柳の葦ハ京畿の俚語ゝゝ、柳の花とゝ、

本州の説も四月開花とゝん、えよゝと、季
吟が増山井ふ三月ふ出す、是ゝ
児童柳の花の蒂抜落ゝと拾ひあつめ、藁稭ゝ貫き連
ゆて玩弄す、是を柳の葦を繋ぐとゝて、花ふ治定せず、

雁風呂 秋ア雁の渡る時小き木とゝ来る、是を海上ふ浮べ其上
ふて羽の労と休む、其木を、南部外ケ濱辺ニ落ゝおき、
又春その木とゝ帰るふ残れる木多くあるハ人ニ捕らし又ハ死セ
しアのあれゞ故ニ其木と拾ひ供養の為、風呂と焚て諸人ニ浴せ、

蠶蟲 蠶飼、蠶棚、 先代旧事紀 蚕と養ふの法、養屋の
桑蠶、飼屋、西北ふおいて一の祭棚と設け、注連
を曳て常ニ蚕神と祭る、頒て素の大葉と取て、絵千布千
とゝ、ゝとゝと篦箱の中ふ納めこれと祭棚の上ゝ安ゝ、蘭室
蝶を出す時ふ至て、其干葉と取り茎の上ふ置ゝ蚕種
を産しむ、産已て、種子と汲て篦箱ふ納め、老蝶を以ゝ
鋪幣ふ宿ゝ、同ゝ祭棚ふ安す、 和漢三才圖会 ゝるさま
ゆと作らんとする時、葭箒ゝ用て棚とすゝゝ凡蚕已ニ生て
稍長ずるをのれと篦ふ箱ニ入ゐて並ゝ置の処ニ
と蚕棚ゝ、 尓雅 蠭桑蟻也、雌由蔣蟻也、蔣蟻棘ゝ、樂ゝ

之蚕皆各因所食之葉色ニ名ヲ云ニ桑蚕ハ食桑ノ蟲故ニ
み名く○飼屋ハまをやうち蚕をふ家ニ蚕家ともいふ、
蛙のめかる時 夫木 はるの子と祝ふせで夜とあす
多よめるに蛙のふるまひ、年浪草 是ハ
俗ニ蛙のめる時とて、蛙の鳴ころ眠を催すと云ふ○此めう
る蛙と八目と借るとふ心ニ夜短く眠を催すと蛙の人の目を借よ
うにて俗諺ニ 西華集 卯花と月夜と見ふ山鴉、里ハ焙
炉の匂ふ門といふる脇句の評ふ、支考曰、其頃蛙のめう時
あるゆへ、日永く夜短ふゆへ、移ぬくてふ、葛松原 閑子鳥
あくや蛙のめう時 珍碩○年浪草、俳諧歳時記などふ
只めう時とのミ出せるハこれ禄年間の
又此題、増山井、そさまにあとふも出さず、今この季と定めんニ、支考
句ニも題とハいへる例をもて、初夏の物ふいひてもあるせくれバ四
が評の詞も、珍碩が句も、初夏の物ふいひてもあるせくれバ四
月の部ニ入べきをのなるゆへ

よ

正月 よの年 去年ことし年とい

吉田清祓 十九日 紀事 正月十九日、大祓毎年夜ニ入て
吉田卜部家新年の行事を、斎場
所の前ニ八所壇をもふく、八方と拝せるゆへ、其後斎場所八角
社内ニ入て、宗源神道の行法と修せるゆへ、こゝと大祓とを云、
○一説ニ、今日の祓ハ疫神祭ニ八幡の疫神祭ニ同じ、節分
の夜ゆへ正月十九日迄ニ此間疫神と封ずるゆへ、十九日ニ至
て其塚を撤す、餘寒 春寒 説文 餘ハ残也○ 蕖高
時珍曰、二月荳を生ず、葉食ふべし、野圃家園ニ分ケと
を用ゆるゆへ叢生す、香気あり、秋花をもらく野菊
ニ似ゆへ○ヨメガハギ、ヨメナ 同物あ
るべし、オハギハ似れども別なり 兼三春物 横霞
かゝる部霞の
条ニ出す

二月 吉野の餅配 朔日 吉水院考物 二月

て當五月ゆゑ来五月まで長日不退の行人寺僧方ニ花供
と号し、満堂方と献法と云、件の両行者、二月朔日本堂へ
出座し、御供神酒と献じ奉幣等あゆゑ、本堂の廣庭
みゆゑ、餅ニ餅とまゐらせ、世俗是を吉野の餅ともいふ、餅配もの云ゑ、其外満山の堂社のゆゑ御供餅
も献備ゆゑ、右ゆゑ正月下旬三日の間、華供献法の両

頭坊よりて施行の儀あり、辺国の貧人乞丐數百来集る、

雑談抄　摂州平野大念仏寺の本尊一仏十菩薩の画像ニ供する元朝の餅を、歳首ゟ吉野山蔵王の神人参りて此餅と取替て、奴蔵王権現へ備へ供養式終て此餅と破砕多くの米ゟ炊き又餅とし、今朝日本堂にありて諸人ゟ施す是を餅配と云、又吉野山中の僧俗ゟ残賦ありて、寺と金峯山寺蔵王権現三躰へ、役行者の開基本尊ハ蔵王権現と号し

ゐて腹ハさゞ子鷺のごとく、足ハ鳩のごとく火〳〵高〳〵、又曰、おほ鳥ともこの鳥ゝ、今俗のかんて鳥ともいふ、換子鳥の字音よりとまく誤まるゝ

た

正月宝舩數

大晦日より元日小至るの夢を初夢と称すれど、今俗悲田寺垣外の二日の夜ゟ宝舩とまくらに入て寝る、大黒舞姿も摸〳〵面とふう頭巾と着〳〵、民間の門と唄ひ舞ふ、年〳〵嘉祝の詞を改〳〵新作〳〵て唄ふ故ふ歩唱哥をと大黒舞ともいふ、新吉原町ゟ限ともこれも非人のごとく、狂言物真似をもつて歩く、

橘

和漢三才畫會　太知波奈の和名ハ橘類の惣名也、今ひとふ方もちぢまく称するものハ乃ち包橘ゝ、○大和本草　二、橘と密柑と千〇時珍曰橘品十有四、

月令廣義　正月初二日、賜橘於群臣、則古今以橘為嘉祝之、

橙

和名抄　橙似柚而小者也、和名安倍太知波奈

和漢三才畫會　五月小白花を開く、凡八年を歴るときの実を結ぶ、霜後黄熟す、其辨苦くして微〳〵酸食ふべし、春ゟ至る〳〵色濃く久きゟ耐ふ、夏ふ

後色と変〳〵青〳〵新舊辨ずべし、故ゟ俗ニ唑代〳〵と名づく不啻とのごとし、以て嘉祝の果とするゝ、

俵子

名義未詳、按ずるふ奥州金花山ゟ近き海辺ゟく海苔を取と金海苔とゝ其形あるゝも俵のごとく祝語と考ふ、

春耕糸切歯　俵子ハコマメゝ小殿原

和漢三才畫會　五穀八武家の祝語、田作ハ農家の祝語、俵子ハ商家の祝語、〇南海ゟく海苔と俗ゟ俵子とゝもに一名田作、又古止乃波良とふ、

田作

小殿原　米鰕ゝ正字未詳、

店卸

商家ゟて去年中金銀の出入算用、又ハ賣買の利不利の高まと改めこゝを店卸とふ、

大元師法

延喜玄蕃式　凡大元師法、毎年正月起八日至十四日一七日於省修之

公事根源　治部省ゟく七ヶ日是を行ふて、蔵人内蔵寮の官人をゝて御衣と給く壇所ゟ御衣箱ニ入緋のつゝみ〳〵是ゟて封と付く、是を治部省ゟつゝみ〳〵、御祈をいのりて、結願の日ハ御衣をゝとの如く返上をゝ、〇師の字をゝ子ハたいぐんの法ゝ、御所ゟて蔵人

種物

神代巻曰、

以粟稗麥豆為陸田、種子以稻
為水田、種子因定天邑君云々

抑 祢美の名く、玉搏玉拍ともかゝるごとし

二月 晦の能 或ハ芝の能とも○紀事

七日より南都興福寺南大門新の能ごとき、乞是興福寺夜中の法会の間、寺僧の奴僕春寒ふたゝび至り、門前において火を焼、其光うつりてよろこぶ、俳優と称し、長夜の戯とするのみ、其後金春観世保生金剛四座の業両座東武にあそび、南都休暇の両座これを勤む、今七日二座交〳〵勤之、八日も亦かくの如し、九日に至りバ、初日の一座衆と徒ふ告〳〵、若官の前ふ於て藝を施す、其日次座門能を勤む、七日之間両座を八十四日臨時ふことを勤む、

鷹化為鳩 月令 仲春之

倍ふ藤菜と称す、或ハ鼓草と称す、倶ふ名義未詳○

雑談抄 タンホこの名、鼓章ともかゝる名よりと出るを、

田螺 和漢三才図会 和名太都比、俗ふふ太仁之

種井、種浸、種

ふせる 紀事 二月出用の中、吉日とえらびて農民旧穀の種と水田ふ作る彼岸の前十日穀と水とふ和漢三才図会 九田ふ取出〳〵種ともうす、彼岸の後十日生ず○種井ハ種を漬る井とも、

大根の花 時珍曰、春の末ふ高〳〵墓と抽く小花と

介雅翼 野人今歳山と樊とこゝハ来歳蔬菜敏茶生

十日

三月 **高雄の法華會** 高雄縁起 安良比花 三月十日紫野ふ人あつまり集りて高雄の法花会ヤスラニハテヨとえざさ、やすらいはなとも、百練抄 久壽二年四月近日京中児女風流を備へ鼓笛ともゝ〳〵紫野の社ふ参る、世ふ夜須礼と号す勅ありて禁止す 紀事 今日やすらい花の神事辰刻ふ上賀茂南上野村の土民烏帽子素袍と着〳〵、或ハ異形の装ひを好〳〵、各一村の摠堂ふ集る、人村里の中ふ一章堂を造て、常ふ僧ともを守うもち、支あるごとにこの堂ふあつまりてこと〳〵と謀ること

捻堂と号す、是より先光念寺の北上の御前の社を詣て、各異口同音に安乐比花と唱ふ、太鼓横笛この節と助く、その後大源巷の社下の御前の社を経て、れの〳〵踊と躍りて上野村の捻堂に帰る、是もまた一の里正の前において踊畢て各家をこのる、又上賀茂梅辻、邑本、河北三ヶ村の士俗、今宮を詣てれの〳〵踊と催すこと、上野村の如し、もつて後各賀茂に帰る、時に社務及社司の家をも踊とぶらふ、到る処其家の主人肩衣を脱ぐてこれを与ふ、是と期とせて踊を止む、纏頭の徴意歟【傳】云、春時疫疠多く行はるる、今宮八疫神に故に踊を奉つて神灵と動め祭るにと、或説に、花まづその祭ありて花落と惜む風雨あるをと祈るに、故に安らい花ぐゑと、又一説に、今日高尾神護寺の法花会動もれバ驚障ある故に踊と催し魔と防ぐ、故にまた安らい花と八法花平安に終るとを祈るとも、此説さもあるべし、むさゝ【雑談抄】その祭に、寂蓮が奥行七〳〵処こ今主人の難〳〵唱ふること、寂蓮の作とぞ、【夫木】高尾山あらしあらしまつ〳〵つとめあへやもゝ〳〵しい花と

【傳】西行　竹秋　【廣韻】藻竹秋三月也、【蘭秋】七月也、【類寧】竹

【譜】八月為春、三月為秋、云〳〵

辰【注】以人為万物之霊故謂人日、

二月　列見

【公事根源】上卿弁外記史もどまるう、太政官少、六位以下の芸能あることのとゝのひて、式部兵部の二省より率〳〵まるると上卿めし〳〵器量容儀と見るところ、挿頭の花と上卿以下冠ゝ、大臣八藤の花、納言八櫻の花、参議以下八時の花をさすなり、【江次第】云、列見、二月十日、諸司長上成【擬人列】見太政官二省申之、

【和名抄】和名以多知久佐、一名以多知波世

正月　霊辰

【唐李嶠人日詩】七日最霊

正月　姜瑞

【部朝賀】の条に出ス

雑煮祝

かんと祝ふ【雑談抄】雑煮【布打】ハ餅ふ大根芋薄鳩昆喰ふ多種と交へ煮る故に雑煮と孫するを是と畧もて姜と祝ふこゝ、【拾芥抄】を加へて黒豆と厄神詣の送窮【四時宝鑑】云高陽氏の子、衣条に出ス　九日

の敲きそうと好そくゆと喰ふ、正月晦日

死す、世ふ糜と作て破衣と巻口は捨く貧鬼とのぞく、
又池陽の風俗正月九日と以く窮九とす、屋室の塵
撒と掃除く是と水中ふ投ると送窮こ云 五雑俎 謝
肇淛曰、俗説ハ信ずふ足ず、窈也窮也、皆晦盡の義也、
諸月といはずして、独正月といふとの八其端ぁと挙ふし、
○按ふ送窮ハこの
方こ云晦日掃、

兼三春物 素麪海苔 長く

色青黒く海
素麪是う、

二月

園韓両神祭

雍州府志ニ曰 宮内省ふ在、後
禁庭ふ移す、古へ春二月冬十一月上丑日こと祭る、冬
誄一人祭所ふ就て事と行ふ式西宮北山両抄ふ詳ふ、
相傳ふ延暦年中迂都の時、處と他處へ易へんとす、神
託ありて曰、唯この地ふ、皇基と護るべくと、今八
其社ふ〳〵惜いかな 紀事 追加ニ云、洛陽醒井通り高辻
上ル町ふ社あり、延喜式ふ所謂園神

二 正月 包

一座、韓神一座ふ是こ今本荒神こ云
孫す、十三日より十四日の朝ふ至て 紀事 江州大津の人、三井寺門
去るとこゝこの戯を所く 前の人と、各野原ふ於て、左右
条ニ 部、若
水の条ニ出

繼尾鷹

鳥狩の

土筆

和漢三才圖会 春月土より
出ス 出く、状筆の頭のごく

兼三春物

摘草

雑菜摘

通俗志 雑菜磯菜
雑こ摘ハ春こいふ

角組芦

芦角 ○支考曰、あの
芦錐 むこ、○野相公詩ニ 碧王寒芦錐脱嚢 新古今
三島江や霜もまだらめ芦の葉ふ
角ぐむなどの春うもぞふく

和漢三才圖会 其莖厚く大きふ艶美ふして牡丹芍薬ニ
亞ぐ惟恨らくハ其莖むろき甚醜く、其落るも亦脆き
のこ、單の辨赤きものと山椿と名づく、此乃ち本源ふ、
白紅粉絞て紅或ハ白相半す、八重千辨の種枝挙せ
ず、秋ふうて苔と生じて、春花と開く、冬開く、人収くるとを賞す

列く椿

通光

椿

山茶、海石榴ま
とつづくること訓ス、

万葉 巨勢山乃列木椿都良々々々尓見乍思奈許
湍乃春野尓」此哥ようの作例ここのそこつつく
木の数本列なる椿と云し、○ 唐椿、澤椿、葉の紋横細う
生なる椿と云し、○ 唐椿、葉狭く長く色淡く
みつく聳状う似う、其花重辨大きく ○ 玉つばき、
して正紅なるゆゑ、いそゆる 蜀茶 ことなるもの
○ 八千代の 荘子 大椿 ともいふ、八千歳を以て春とし、
玉椿 八千歳を以て秋とす、 後拾遺 君が代も
かぐらもあくび色八あくともゆるも」○ 二階椿、
こを荘子にいふ大椿と云、○ 椿を以て山茶を唯ことゝ
○ 伊勢 椿、 花形のかはりたるもの、○ 落椿、 散椿、 椹茎 笋も
そも昔や 甫公英 ○ 散草 の一名く
もう椿羽紅
月令廣義 梨と接ぐふ、春分の前十日と用ふ、 ○ 葛の若葉
ぐ、柳を接ぐふ、春分の後十日と用ふ、
大和本草 地錦 葉八衣の紋お付ろつふ似く、冬月葉落
お、秋八紅と、又常のつことも八冬葉落つ秋八紅葉すると

三月 接木、接穂

芽花

その両種の若葉遅速あり、冬葛 燕、同巣 乙鳥、鶡鳥、鶺鴒
八并ぐち遅く夏葛も早し
淤波、天方、和名、豆波久良女、俗云豆波久良又云豆波女 和漢
三才畨会 燕八玄衣白頸赤黄の頷く、春来り秋去る、催鳧
と表裡ろう、其飛翔ること甚捷く、直ち翻り仰ぐ亦能
飛他鳥のあとぐくろ、故ふ鷹鵰あって敵せず、○
時珍曰、泥とつそ、 本艸 白茅、葉尋
屋宇の下ふ巣ふ、 三月 のごとし、故ふことを
茅と云白 油桃 花常の桃ふ小さし、
花を開く 和名抄 李桃和名都波岐毛々
ふて八花の墨つぶの形ちくゆゑるで、壺墨入の意や、 壺董 兼名苑 折
つつじ 千金翼方 羊その花とくバ躑躅もく聲す、
躑躅 故ふもろ〳〵一説ふ羊の性至孝く此花の赤き者
とゝも母の乳と思ひ躑躅〳〵聴い折〳〵飲之故ふ志
ふ 躑躅衣 桃花御記 面蘸芳裏青打三月着之、 記
云 躑躅下重面蘸芳裡紅打 唯心院御抄
つつじ面紫裡紅、岩つつじ面紅 ○ 山 つゝじ、時珍曰、高さ
裏ひもの一 四五尺低きもの一

二尺、枝少〳〵花繁〳〵、一枝数蕚、二月始て花と開く、紅ろ
あり紫なるあり、五出ろくろく千葉ちくさ
石榴又映山紅 万葉 細比礼乃磐垣山乃白管
又杜鵑花ともゝ ○白 躑躅、自吾介尼保波氐妹余示 作者未知
○羊躑躅、韓保昇曰、小樹、高二尺、葉ハ桃の葉に似て、花黄し、
瓜の花に似り、和名抄 羊躑躅以波豆々之一云毛々知豆之 和漢三才画会 羊躑躅ニ一並八九
○蓮花 つゞ、蕚、遠望ハ蓮花の如〳〵、故名之ト訓ス、韓保昇ノ説も亦蓮
按本草ニ羊躑躅ヲ蓮花ツゞト訓ス、韓保昇ノ説も亦蓮
花ぐさし、麟ツゞ、羊躑躅同物と見ゆるでも、倭俗別種ます、
○浅葱 大和本草 葉ハ大霧島の如〳〵枝莫のごとし、
はなじ、小木ニ、花ハ棉花の如〳〵色アサギニ、五
大山の岩上にあり、 同上 紫花春実未の高
深山つゞじ、○紫の 山つゞじ、一丈許なるを、常のつゞ
の三倍の大サあり、花ろ〳〵、葉三角にて野州日光山中に
多〳〵土人ヤシホと云、又白花のもの有、又土人白ヤシホとふ、
姐 洛外山中多〳〵、花紫色、小輪紫の 嚶蕗
○つゞじ、 映山紅の花に似て、葉三角し、花可愛

紫の花小ろ〳〵枝に連ろ〳〵咲て下り垂る
こと瓔珞のごとく〳〵、故に名づくるなり、
ともゝ云、平戸九州の地名なり、琉球よう出づ、四月
花と開く、單瓣白し、其大なる者一二寸又至る、○段 つゞじ、
地名し、上賀茂の南の山に壇とゝ呼ぶ所あり、赤紫
○茜草 本草 ○蓮花四種のつゞじを、壇段西宇恭書来り
茜草ニヨメルヒ 和名抄 山榴、和名阿伊豆ゝ之 本草綱目
サウキとも訓ス ○おいつゞじ、時珍曰、深紅色者、即山石榴、ニ
○そうしま 白紫の数品ありてことと大隅
ほうし、 国霧島山よりして出せるや 琉球 躑躅 段 段
年始状 注ス 子日遊 は部、初子、 子日衣 何そも子
日の遊ハ着用の衣をゝべし、 猫の妻戀、 猫さかる 雑談抄 此者 陰獣 然ハ

報 正月

二月のころ 仏のワ号 撰厳経 涅槃乃清浄不死不生
さら〳〵佛 之地、一切修行者所依帰 注

超脱輪廻出離生死之地と云ふ如来御年七十九二月十五日大衆ヲ示ー已テ頭北面西右脇ヲ下ー滅ー給ヒ妻ハ大蔵一覧入滅品ヲ出ヅ○涅槃像ヲ画ク也、五十二類天道人道地獄の三十六禽洪河の鱗魚天地の間ニ生を受ルことの皆愁歎の容形を画ク也、

正月

菜摘川神事

七日 神社啓蒙 勝手明神の社、大和国吉野川ヲ祭る所の神一座、受髪翼神云々毎年正月七日此社の神人氏子の男女此川の辺ヲ至ル若菜ヲつミ勝手御前の神供ヲ備ヘ祭祀をなす故菜摘川神 公事根源 内宴ト八ろ〳〵の節会ニ仁寿殿の事と云、**内宴** 是ハ行ル文人ども題ヲ賜ハりて詩を作ル、やがて御前ニて講ぜらるゝ、

七日正月

俗ニ正月七日と五節句の初とて、七種の菜ヲ羹ニ煮て祝ひ遊宴をなすことを云、義とふす是を七日正月と云下賤の業也正月七日と五節句の初ニ、恣ニ遊びをなすことを云、

七草、

荊楚歳時記 正月七日七種の菜と以て羹と作す、○七種ハ芹、薺、蘩、蘩、佛座、菘、蘿蔔ノ、世説故事苑 七種の菜と打て、諸子の考いまだ見ず、按ふ事文類聚ヲ歳時記を引て曰、正月七日多く鬼車鳥渡る家ノ門を趍戸を打灯燎と滅ー〳〵、ことを攘ふと、和俗七種を打ヲ唐土の烏ヲ日本の玉地へ渡らぬさきニふと唱る八此鬼車ヲ忌む意ニ汝と打八鬼車鳥の止まらざるやうニ攘ふ、ノ、太平廣記 鵂鶹八即鴟梟ノ、ある人一名姑獲一名夜遊女又八鬼車と名づく春夏の交稍陰晦ヲ遇ハ飛鳴ー〳〵嶺外ヲ過ぐ、尤多ー人家ニ入人の魂気を鍊ル或云常ヲ血を滴ラす、ノ家八凶咎あると、云ヘ

鳴鳥狩

泊山 朝鷹

鈴ことす、○泊山と八山野ヲ出て宵ヲ雉子の鳴所を聞置て未明ヲ行て鷹鳥ヲ雉子を捕らするを、泊山とも鳴鳥狩とも聞ゑ云、○鈴子指八鷹百首抄云、是八泊山泊狩ヲあやまりたるヲかけるニ鈴ヲ鈴子と云をのをさゝて鈴の鳴らざるやうニ鷹とすゑ〳〵狩ゝて合するニ鳥とちがひ〳〵ことゞの義ニ云、○継尾八古へ継尾の鷹鳥と云ことのあるニ鵠の尾と以ことを接ぐ何の用ニもたゝず近世尾羽

損傷して、或ハ短小あるその他の贋の尾と以てこれを接ぎ兼三春物 永日 避日

詩国風 春遅々

二月

苗代

朝食鑑 二三月時をのと民俗苗代と云、籾種を用て俵子ゐ売て川水ゐ漬す、十五六日、或ハ十八九日、及び廿日三五十日もおきて芽あるひ取出して俵子を解ず、四五日六七日を経て後ゐ假田ゐこしらへ時と苗代こゑ、○苗代と云名ハをと種とあろす処の田とさだめてえこ代とハ七十二歩と十代とゐ云ゐこえて、田畝の数こ五百代千代ゐこゑ代ゐ同じくさだめ轉ずるく、春田ニ水と引種蒔ことの各目と本朝食鑑 元稲苗水と浮ざるバ拈ろ故ニ苗ゐ定めて、苗代の水口ゐ幣をひ立て祭るく、俊頼朝目の説ゐ和漢三才畜会 胡頽子大低三種あて、其葉と実と皆少異あるのこ、一種春月ゐ當ゐて、苗と種時実熟す、大さ小き枣この如く、苗あの八ち代胡頽子と云、

菜莧

花 時珍曰、菘八今人白菜と呼ぐ二月黄花と結ぐこと芥の如く四瓣三月角と結ぶも亦芥の如く、実と結ぶ三角こ未大く本窄ゐて三絃の撥の如く、小児其二ツと以く相磨まバ音あろ、故ニ三線草と名づく 庖厨

本草 冬至の後苗と生ど、二三月細白花を開く、

三月

東東の粥

大和本草 夏芽を虫を故ゐつめ、ゑ○廉文曰ゐ京の間東この芽たち又花をふ上の説の如く夏こ、俳諧活法の書ゐ三月ゐ出す、恐らくハ誤ならん、凡東こハ四月小葉と生ど、五月葉稍く長ど、葉の間ゐ小白花を開く、微青し、

梨花

時珍曰、二月白花と開く雪の如く六出、

棠

上巳ゐ風ゐくゑバ実と結ぶこと佳あり、○

梨、

時珍曰、棠梨ハ野梨こ、夏こ山林ゐあり、其樹梨ゐ似て小く、二月白花を開く、○

軒の妻梨、

和漢三才畜会 葉地こ布て生ず、枝ち角と結ぶも亦芥の如く、実と結ぶ三角こ未大く本窄ゐて三絃の撥の如く、小児其二ツと以く相磨まバ音あろ、故ニ三線草と名づく 庖厨

本草 冬至の後苗と生ど、二三月細白花を開く、

東東の粥

大和本草 夏芽を虫を故ゐつめ、ゑ○廉文曰ゐ京の間東この芽たち又花をふ上の説の如く夏こ、俳諧活法の書ゐ三月ゐ出す、恐らくハ誤ならん、凡東こハ四月小葉と生ど、五月葉稍く長ど、葉の間ゐ小白花を開く、微青し、

梨花

時珍曰、二月白花と開く雪の如く六出、

棠

上巳ゐ風ゐくゑバ実と結ぶこと佳あり、○

梨、

時珍曰、棠梨ハ野梨こ、夏こ山林ゐあり、其樹梨ゐ似て小く、二月白花を開く、○

軒バ

妻梨、

和漢三才畜会 葉地こ布て生ず、枝ち

沙石集

奈良の櫻

都の八重櫻とゑゐゐ八當時も東円堂の前ゐ上東門院奥福寺の別當ゐ仰せてゐかの櫻をゐ堀こ車に

入こゝろおそきと大衆、名と得さる擯と左右ゟ奉らえ俗事ゟうとて打ぐめさ女院ゟゝめ」て、奈良法師ハ心おさそのと思ひさ比べ、うゟ物を大盃ゟ真ふ色ふ一とて、さゝバ此櫻をバ我擯と名付んとて、伊賀国余野と云庄をうせて花がさの座と

名付けてかをとせてめう ふをみ

青白く白華細豆曼生す、四月中子ゟ生ずゑ」時珍曰、豨簽ハ葉蒼耳ふ似て微長く、地菘ふ似ゝ稍薄く、節ふ對て葉と生ド、皆細毛あり、肥壌ゟハ一株ふ枝と分つこと十八、九月小花と開く、深黄色ゑ、中ふ長さ子ゑゝ

徒然草

めおゝとゝ云草あゝそらかをゐさゝれるゝ人、

夏近ゝ

此草をつゝ身ゑゝするおゝちいゆゝとゟゝ

夏を待、ら 三月 禮拜講

台記 後一条院御宇ゟ寿二年、大宮権現の詫宣ゟうて、叡山大宮の宝前ふて、法花八講と修すこと、以来毎歳三月十二十三日ゟ行ふ、てきと、ゟ礼拝講と云、新礼拝講ゟ云ハ同月廿四廿五日、十禅師の社前ふて、こきと行ふ、是又後堀川院元仁元年、慈鎮和尚の本願ゟゝ

む 正月 結昆布

新年の雑煮ふゝゝゟゝ加ふるゟゝ むつびよろこぶとゝに訓のちりくさバ

二月 紫の塵

ゟや、部厥の条ふゑふ、

蒸鰈

会大き尺ゟゝゟゝるゝものを塩水と以ゝ蒸うて半熟せゝめ取出て陰乾ゟゝるゟ数日ゟゝ炙て喰ふ仍てむゝ鰈と名づく、

三月 麥鶉

春月ゟ賞之、本朝食鑑三四月田麦長き時、うゝぐゐと春草麥の中ふ子と哺ゟる鶉ゟ景鶉の雌ゟゝゟゝ、雌ハ轉ゟゝ、子と哺ゟる時、ゟゝとゝ、

ら 正月 裏白

古部歯条出、

裏白連哥

雍州府志 北野社ふ、正月四日裏白の連哥あゝて、凡連哥懐紙四枚ゟう、中古執筆誤て、厄面と脱一てまゝと記ぎゝ、是ようて、厄面を白紙ゟす、故ふ一枚とそゝゝ五枚と手、依て号ゟる歟ふ、

謡初

雑条出

馬乗始

江次第 上古有出御南殿皇太子参上儀、近代不行春宮被注釈ふ、

卯杖

献卯杖、其木、槙、櫃三束、比々良木三束、卒保己一三束、黒木三束、桃木三束、梅木三束、椿三束、[公事根源]御杖とハ、持統天皇正月の卯日大学寮ゟ是を奉る、日本紀ニあり、又仁寿二年正月ニ諸衛府祝杖を献ず、精魅を却ると、是を以て悪鬼と拂ふなり、[雑談抄]今の世ニ賀の方の獣をほぐるとて、卯杖ゟ作物所ゟすべらぎを造物の木ゟ其上の岩ゟの御座の下ゟ、悪気ゟ取出して、卯杖ゟ作る、在家ニハ一尺余ゟの白く削りかけ也、[三光院御説]卯杖卯槌ハ、木ゟ日陰のかづらと纏ひ、倶利伽羅竜の形ゟ作りて物ゟ祓ふ、[月令]孟春之月、魚上ル氷、○孟春発端の年中の悪気ゟ去ル、

魚氷ゟ上る

[本朝食鑑]其生ずる二三寸ゟものゝ氷ゟ穿て、氷ゟ上るゟ、気ゟ発じて、魚泳ぐ、

鶯菜

是を鶯菜と号すゟハ、鶯の鳴く時ゟ當て生ずる故、

土竜打

[歳内正月十四日]此事ありて、貝原先生の歳時記ニハ、西国をさして此日薄暮ゟ明暁ゟ至るまで、土竜を打とて、藁と束ねて、地を打てあるいて、浪花ハ此日地上を海嵐と縄ゟて、鉦太鼓を打て拍ゟ呼ゟあり、[和漢三才図会]鼹鼠海嵐を畏る、串海鼠の柱を以て、花園とおひうてバ、羅ゟくゟ入らずと、

梅

[和名抄]梅、和名字女、[潜確類書]梅四徳を具ス、初生の蕾ハ元亨、開花ハ亭々子を結ぶハ利ゟ、成熟するハ貞ゟ、梅ゟ四貴あり、稀なるを貴て繁ゟを貴ず、老ゟを貴て、嫩ゟを貴ず、痩るをたつとぶこと、肥ゟを貴ず、巻ゟを貴て、開くを貴ず、○梅数品あげて計がたし、中華ゟハ大度山嶺梅多し、名勝の地とす、日本ゟてハ、山州日野ゟ梅ゟ畑、鞍馬、高雄、伏見の梅林、その外諸州ゟ多し、凡梅の実ハ完成大梅譜ゟ詳ニ、○飛梅、江梅、紅梅、鶯宿梅、越中梅、緑の梅こめこうの梅、未開紅、鑓梅、八重梅、櫻梅、座論梅、○異名、好文木、このゟ、花の兄、春告草、白草、香散見草、以上ものゝ頭字の部ニうちはらう、尋見ろべし、○難波梅、中花ゟ、大花ゟ、白く千葉ゟり、○豊後梅、大花ゟく白く、八重ゟく淡紅ゟ、○軒端の梅、中花ゟて深紅ゟ、紫のごとし、

單葉うす、淡の寺町、誠心院の境内ある、小式部の墳墓
あるこゝ、つくゝ、和泉式部の愛せし処の木ありこゝ、○行幸
梅、大花すくく紅あり、千葉、○倫吉梅、梅屋鋪、
こゝは行幸梅とおぼしくその手ならつう、
臥竜梅、武江本所亀戸清香庵にこゝあり、数十株の梅と
栽、世こ梅やこゝとゝ、又一株の梅あり、枝條地ゐ
横ふして、卧ふる竜の如し、故ゐ卧竜の
名あり、○白雲の竜とつむや梅花嵐雪 梅暦 梅是山
家暦、○
山中ゐハ、梅の咲をこゝて春と
知るとを心つくく、昏とらゝ、梅が枝うぐひ は部萬春ホ
の条ゐ注す、

梅花衣 称念院御拠 梅重表濃紅裏紅梅、 逍遥院御
拠 梅衣面白裡薫芳自十二月至二月ニゝく

鶯衣、鶯袖 藻塩草 荻枝折ホ、袖の腋縫ふる衣
の袖こ東小袖とゝ、衣の色ゐあらず、名
ゐ依て春
あるべし、

兼三春物 麗 杜詩 遲日 江山麗○義
麗、華麗、妍麗、ゐく続く皆
春色の百花咲乱れ、鳥獣山川
までもいろめきて春とむぐる意こ、

鶯 詩経 出自幽谷 遷喬木 古今集
渚の谷より出る声あくハ春ふることを誰もしれり、大江千里○
渭山記 正二月ホ至る毎ホ鳴と春起とゝ三月ホ至て鳥止と
春去とゝ呼て報春鳥ともそ、 和漢三才畜会 鳴ともハ尾を
揺うハ冬月啼ゃともが如し、人の古鼓ホ似ふ、立春ホ至ふ
始て囀り、季春ホ止る、其声清亮円滑ふう、飛啼ともき
ハ急ふて長し、法花経ともが如く、或ハこけかともが如く、
月日星ともごと、 歌よゝ鳥 鶯ともゝ、 古今序 花ふくぐひす、
水おとむ蛙の声ともきけばいきとし
いけるもの、いづれか歌を詠ざりける、こゝきう等ふ
鳥ともいふし、○とゞめ鳥、人来鳥、経ふこゝ鳥、金
衣鳥、春告鳥、ふぐひす鳥、以上鶯の異名ふう、おの
〳〵頭字の部ホこゝら入ふと見ふべし、○黄鳥、
詩ホゝ呼の黄鳥ハ今の鶯ホあらず、あるゝの説ありこゝ、
黄鳥ハ俗ホ朝鮮鶯とゝとの事ふし、其羽真黄ふて嘴の本ゝとゞ
鶯の琴 未詳、疑らく ハ鶯の琴ゝや、

鶯笛 徒然草 ふゑ、こゝろべ
あとの作りて吹笛也、

鸎 鸎の琴 和漢三才畜会 其声円滑ふて短く、鳴時、声
ホ随て両脚と互ホ挙て、琴を弾ずを揺す

ず如〻、故ゐ俚俗宇曽琴と弾とゝ、或ハ形亀〻〻く声艶
ちるを以て宇曽姫とゝ、雄ハ晴ゝよゞび、雌ハ雨をうゞ大
和本草 雄とてゝうゝとゝ紅うゞ
雌とあゝうゝとゝ紅〻〻 獨活 本草別録 此の
動ず、風あく〻て自ら動く、 草風と得て
故う〻独揺草と名ばく、 三月 五加木 蘇頌圖經
苗と生ド、豆葉ゝとも 五加木春
ゐ青〻叢をなす、 蛺蝶 羅山拾撫 この花敏榮ニ栄ノ如し
老婆多〻歯落て〻、歯と葉 〻〻枝上葉あるゞ如し
と和訓相通ず、故ニ是と蛺蝶ゝ 三月 飛羽觴
き部、曲水 梅若祭 木母寺大念仏會 ○武蔵の国
の条ゐ出、 十五日 葛飾郡黒
田川梅柳山隅田院木母寺の縁起ゐ云、往昔吉田少将
惟房卿の男七歳の時父ゝ母ゝ愁傷のあまり、遂ゐ有
為の門ゐいんゝとゝを願い、叡山月林寺ゐ登りて修学す、
十二歳み〻〻野人の為ゐおぎせむく、東海の旅みもと
むく、病あゝとゝ〻終ゐ貞元元年丙子三月十五日此処
ゐ早世す、忠円阿闍梨ゝ適〻〻ゐ会〻、無上菩提の作

業を勧〻、常行念仏を修すそれゝとゝのゝ今ゐ至〻〻
大念仏会あり、遺語ゐ
諸人群 鶺の巣 塚と築さ、柳を植、今日
集す、 鶺ハ性醇あ〻く 浅草ゐ窠伏す、
随〻〻安んず、巣とす 常居あ〻〻、常西 地ふ
嘗む、雀の巣ゐ似〻秘あ〻 萍生初る 月令曰、
穀雨之節 萍始生ス
氣候也、 ね 俳七生、

正月 賭弓 江次第

射礼の後朝ゐ以く行ゝる、 射礼正月十七日
賭弓翌十八日 其略ニ云、主上射場
殿ゐ出御、ニ〻射手四人立具〻ニ是ニ射る、南ゐあゝとの
二人射すて後ゐ退出す、次の番歩進む、又次者到来
を待つ、其退出路、左近ハ射場の北の砌ゐ退き右近も
弓場の東面北間小部の下ゝる、退く〻〻勝方乱声ゐ
て勝負の舞ゐ奏す、左 左雅陵王
右納蘇利 ○賭弓ハ清和天皇貞観
二年正月十八日ゐ始て行ゝる、公事根源是ハ天子射場殿
ゐのゝそゝそ、弓ゐ御覧ずる、仲春ゐ弓どゝゝの礼記ゐ
どふも侍るゝや、堋とゝき的どゝけゝ〻左右の近衛左右
の兵衛四府の舎人どもの射侍うゝ〻事ゐて〻後ニ大

将射手ヲ饗ヲセラルヽ、是ヲ射礼ト云、○射礼ハ三月ト九月トニアリ、此ハ三月ノ上巳ニアタル、○上巳ハ三月ノ上ノ巳ノ日ヲ云、○巳ハ十二支ノ六ツメ、○三月ノ上巳ハ、三月ノ初ノ巳ノ日ヲ云、○上巳ハ三月ノ三日ニ定マレリ、○射礼ハ、公事根源ニハ、二月ト云ヒ、又射遺ト云ヒ、日ヲ、昨日射礼ヲ奏ゼラル四府ヲ今日射ラルヽ事ナリ、

【下部古事記】天照太神伊勢国五十鈴川上ニテ神代ノ人形ヲ学ビ給ヒシヨリ、壐斗ヲ作リ始メ、打鮑ヨリ、

残雪

【続拾遺】春ヲ身ニアマル風ヲ山ノ外ニ見ヨ

ノ——雪 一条前関白

野大根

【説文】菩水衣、水土○青海苔、甘苔、鶏冠菜、潤藻所生在水傍 於期苔、櫻苔、素麪苔、黒海苔、浅草海苔、以上おのく頭字の部ニ出ヅ、○奥津苔、廣サ六七分、長サ五寸ゞゞ、頗ル厚シ、紫色、○葛西苔、総名ナリ、○十六島苔、雲葛ヲ出ヅ、紫菜ノ一種ナリ、

【夫木】春部野遊 都人宿トヲスルノ——ヲ今日ハ野辺ニヤ摘ラン 後京極摂政【貞享式】野遊ノ条ニ云

兼三春物海

野遊

苔

二月

茖葱

時珍曰、山原平地ニ多ク生ズ、野人ノ食フ菜ヲ食フ、白花ヲ開キ実ヲ結ブ、

軒端の梅

うめ部、梅ノ条ニ云、

三月

上巳 桑

和 漢 三才畫会 魚梁ハ竹簀ヲ左右ニ立テ廣ク下狭クシテ、春秋ノ二ヲ用ルニハ、例ノ衆銭ヨリ多ク出ス、

長閑

春の日のユウタリト長ク閑ナルヲ云、

茖葱

時珍曰、山原平地ニ多ク生ズ、野人ノ食フ菜ヲ食フ、白花ヲ開キ実ヲ結ブ、

軒端の梅

うめ部、梅ノ条ニ云、

三月

上巳 桑

和 漢 三才畫会 魚梁ハ竹簀ヲ左右ニ立テ廣ク下狭クシテ、春秋ノ二ヲ用ルニハ、例ノ衆銭ヨリ多ク出ス、

空口ニ引ヲ簿ヲ曲ゲ籠ノ如クシテ底ヲ、奥梁ノ空口ヲ入ル又簀ヲ次ゝニ扉ノ如クシテ、奥入ルトコハ順ニシテ、障ガイ出ルトコハ逆ニシテ去ルヲ子ヽ、○上リ梁ハ若鮎ノ川水ヲサヽノボルヲ逐下ニシテ、梁ヲ入ルヽトコロニ取ルヲ云ヘリ、

水

ヲ部ヲ併出ス、

正月 元日、元朝

三朝 王畑宝典 正月一日為元日 朱子曰、元大也、始也、ニ 尚書大傳 正月一日為歳之朝、月之朝、日之朝、故曰三朝 ○師古曰、漢書注 元一也、三亦三也、

春 れく

又元三者三一元之轉称也、[魏宣傳]元日ハ歳之始、月之始、日之始、故曰三始[玉燭宝典]元日ハ歳之元、時之元、月之元也、ぐんそのもちを

元日節會 諸司奏 七曜御暦

故曰三元元始也

氷撰 国栖奏 [滑稽雑談]この節会ハ天子紫宸殿ノ御ノ儀ニ出ル

腹赤奏 ○本頭注の部ニ出 お渡御ありて、群臣百官お酒をたまへく、宴会おこの儀し、宴会と書てトヨノアカリとよめつゝ、大きの節会の名うて侍るうや、十一月中辰日の豊明節会ハ限るぐずゝ、其式江次第ホ詳し、

○おつさたつるのそおやそそし

あるらん、くずのそ

顕昭 国栖奏

[日本紀]應神天皇十九年冬十月朝、幸吉野宮時、国樔人来朝之因以醴酒献天皇而歌之云〳〵[延喜式]元諸節会ハ吉野の国栖御贄を献じ歌曲を奏す、節毎ニ十七人とおて甚淳朴にして毎ホ国栖廿二人山城綴喜郡ニ居り、夫国栖ハ人となす、これを毛味山果をそう食ふ赤蝦蟆を煮て上味とす、これを毛味と名づ、其土京よりて東南の山を隔て吉野の川上ホ居、峯嶮〳〵谷深〳〵道路狭峻なる故ホ、京ホ遠〳〵ずと

来ることお希し、まろうどびと

恭うて土毛と献ず、其土毛ハ栗菌年魚の類ニ云〳〵

近世吉野より参ることお絶〳〵り、[公事根源]今の国栖の奏ハ、吉野〳〵年の始ホ参り、歌をうたひ笛と吹あはせ、古風ホ存せりと云〳〵

国栖笛

[江次第]国栖の歌笛ハ兼明門の外ホ於て奏之云〳〵[雑談抄]国栖の歌笛ハ諸書と考るホ、元日ホ奏ずして、七日の節会ホ奏ずと皆哥ふ、

江戸の商家多くは元日ホ戸お開ず、一日ホ開く、

春ホ許用ゐ、

元日不開戸

廃務ニ、又俗間ホ家内お掃除せず、元新年の陽氣ニ重ねおそれ慎む故ニ、唐ホ此事あり、閩部疏ニ云閩の俗歳首ニ重ず、民間正戸を開ず、

元日草 福壽艸

畫鶏帖戸 荊楚歳時記

正月朔日畫鶏お戸上ホ帖し、葦索お其上ホ懸け符お厭ふ挿めバ百鬼ニ畏るゝと云〳〵

食積

追加のくれ 部ホ注ス

串柳

会竹の串

和漢三才圖會 雑組 柳ホ七絶あり ホ壽六

ゐ嘉賓云〻」今新年嘉祝の物

〻〻蓬萊葦ニ用ゐハ此愛ら、**蓍葦**

本朝食鑑 整立

ハ久〻多知と訓ず

ず、葭蓍青く、春二三月ゐ玉て、

莖肥大高く立〻葦とも

あり、悉く其豆するの謂と、其供ずる処の具足の鍒特ゐ刀を

以く截ことと忌む、故ゐ手をそつて、槌をそつて是と破り

かくことを賞〻て鏡開と云、**具足鏡開**

雑談抄 和俗年の

新年截の字と忌む故あり、**蔵開**

始ゐ蔵と開て積

蓄の金銀米銭ゐかぎ〻〻〻、一切の貨財と取出て用ゐ売

く、賣買の事と調ふ、是其年始をハ吉日と撰ひて庫蔵を

ひらくことを

いひめて、**偃傖師**

攝州西の宮よう出る夷廻のこと、わ

部、若吏の条あらせ見るがごとし、

花燈夕

し部、上元

日の条ニ出

本朝食鑑 **慈姑**

於毛多加根ヨ

白久和井ト云

月苗と生ず、青莖ゐて中空〻〻〻、稜葉あり、燕尾箭鏃

の如くして、前尖て後ゐ岐、四五月小白花をひらき穂と

なす、霜の後葉枯る根顆を結ぶ春の初堀て果とす〻〻

兼三春物 慈姑 烏芋

浅水中ゐ生ず、或ハ又ことごと種、三

同上 烏芋 黒久和恵 俗ゐ不

中ゐ生ず、其苗三四月土をいだ

く、肥大ゐ〻〻二三尺、こと〻〻と刈て帚を造る、其根白鶉卵

後顆と結ぶ大栗の子の如く、脇ゐ聚毛あり、累〻と〻

泥の底ゐ生ず、自ら生ずるもの黒くして小く食〻〻滓多

く、種て生ずるものハ、紫ら〻〻〻大く、こと〻と食ハ毛多く、

冬春堀收て果とす、半食煮食皆佳し○時珍曰慈姑ハ

一根歳ごとゐ十二子を生ず、慈姑の諸子と乳するがごとく、

故ゐ**くろのり** 又雪海苔

名て、**黒海苔** ゐ服ず、色黒く美あり、**貞享式** 此とも

北越の名産ゐ〻〻、海辺の岩間ゐ降積る雪を波の打浸

す拍子ゐて、凝て海苔と雪とのまじる訓ずべし、今按ずるふ、海苔の

名ハ春夏とこそ〻〻〻れバ雪海苔を以く冬〻〻あらバ例乃

衆議ゐ及ず〻〻〻、こそ〻〻〻

二月

枸杞 蘇頌圖經 春苗を生じ、葉

當用の如くして薄く食ふ堪、俗呼て甜菜

石榴の如く軟く蓮〻〻〻、其莖幹高三五尺叢をなす子、六七月ゐ小き紅紫の花と

生ず隨ひ紐実と結ぶ形微長し、くさ
東その枝の如し、其根と地骨と云、**草の若葉** 兼文曰 俳諧活
法の書ハ正月の部ハ若草新草初草と
出せり、又二月の部に草の若葉を稍長きと、**草芳** 慕要
春草を弱草 **熊谷櫻** 大和本草 高サ尺ハ過ず、梁武
又芳草と云、さく、長ハ四五尺の過ず、彼岸 三月
櫻ハさきそめて、八重の好花ぞ、花色白くして
小紅を帯ふ、櫻ハ源平の合戦ハ熊谷次郎直実振舞一つ
谷の先登ハ名と形りなり、平家物語ハ記せり、
此種余種の櫻ハ魁るとハいへ、是と熊谷櫻と云、

草餻 蓬餅部 二月始生ず、莖葉白く、脆く、三月三日婦女
こぞりて採ハ蒸ハ搗て糕とす、俚俗歳事
とす、○嵐翁曰ハはの部、もちの条可ニ見合一、 **勧学會** 十一日
朗詠注 真林寺月輪院にて行ふ、天台の大衆法華と誦す、紀
典の儒も詩聯句を成す、康保年中ハ大内記保胤狂言綺語
の罪をもろをさんとて、文道先達の学徒をもとめて、三月九月の十
五日毎ハ行ひ始めらると侍り、勧学院ハ三条の北今の雀の森その

跡ハ **鞍馬の雲珠櫻** 神中抄 唐鞍の雲珠ハ似
たれバ鞍馬の縁ハ云へ、 **雲ニ入鳥** 朗詠 花落
隨風鳥入雲、行末ハ雲ちハ入てとハ、
ととかすなぐわて春のかすぐ林、
此虫と育ハ始終菜の嫩葉と
以てす、仍て菜子云 **九輪草** 救荒本草 葶と抽ぐ小
畧大く、並の囲ハ八拇各一様車輪の如し、くれのそく 花を開く、櫻草の花ニ似り、
梢ハ至て七層或九層、浮図の九輪ニ似さ、 **暮春** 注及
叢入 六の餻 紀事 正月十六日農工商おの〳〵遨遊す、是七十
六日遊びとす、又叢入と称す、叢入ハ林叢ハ入めん〳〵遊楽す、一説と子ご〳〵叢入ことハ宿入の
誤りく、此日洛内外の男女或ハ両親の家ハ到ハ、又姻家ハゆき或
ハ寺社ハ詣で、又山林ハ遊び、各随意ハす、又奴僕ハ我宿所ハ帰ら
○六の餻とハ大和国の俚語ハく、叢入とハ同ど、泉州ハて八六八
とハ大和の民間ハく旧年嫁〳〵る女、今日親里ハ帰らて、必
餻を巻て祝ハ八是と子六餻と云、十六日の餻と云、
混雑〳〵、六の餻六入の名ハ、 **藕氏将来** ○山城
又江戸ハく八宿おとゝり、 **厄神詣** 十九日

郡八幡一の鳥居の内ゟ八幡の御旅所あり、年毎の正月十九日、この所ゟ疫神を祭る、諸方の男女參詣す、この故ゟ此所を疫神の社と云ハ非ス、一日の勧請ニ宿院頓宮のゟゟ預め榊數千本ニ走り疫塚を表し、夜ゟ入て宮守、神主各榊を囲ミ立つ、凡宮守の上首を一の行事と云、その次二の行事三の行事と拠すつゝ八人燎すことゟ初りとぞ、旧きゟ做ひく囲ミ立つこの榊ハ疫を攘ふの弊、神人を背炙衆と云、參詣の人年齢丈干と小さ木札ニ記し、捧ゟ所の銭ゟ漆、疫塚の内ゟ投入るゝ、昔ハこの木札疫塚共ゟゝと焼て、ゝゝと又疫を攘ふ、十五日ゟゝ參詣ゟて、十九日ハ愈の、凡厄年ゟあるゝの、疫神の社前ゟある砂をとりかへり寝所の下ゟ置年過ゝ此砂を倍ゝゝ返ゝ納む、故ゟ俗又厄神と称ス、○李吟曰神代ゟ半頭天王、蘇民ゟ情を得ゟて、汝ゟ子孫永く災難を免るべゝと誓ゟる故蘇民将来ゟ子孫ゝ云札をうけとる、尼神ハ牛頭天王なるべし、

鑓梅　中花ゟゝ白く淡紅色と帯ぶ、

柳衣　冬平　公柳

説面白

山笑　卦遊録　春山淡治ゟゝ笑がごとし、夏山も暑翠ゟゝ滴るが如し、秋山ハ明浄ゟゝ粧ゟ如し、冬山ハ惨淡ゟゝ眠るゟごとし、

兼三春物

柳　本草　時珍曰、揚ハ枝硬くゟて揚起ス、故ゟ揚と云、柳ハ枝弱くゝて垂流ス、故ゟ柳と云、蓋ゝ一類二種ゟゝ春初条黄ゟ生ゞ、即ち黄緑花と開き晩ゟ至ゟゝ葉長成の後、花中ゟ黒細子と結ぶ、蕊落て絮出、白絨の如ゝ、風ゟ因ゝ飛ぶ、子衣物ゟ着ハ能虫ゟ生ず、池沼ゟ入ゝ即ち化ゝゝ浮萍となる、

柳髪、**柳腰**、**柳眉**　いづれも美女の風姿ゟ見立てゝゝ、

○青柳、川柳、玉柳、捻柳、箱やなぎ、瘤柳、めなぐさ柳、風見草、以上おのゝゝ入ゝ注ス、尋見るべし、

八重霞　糸部、霞の条ゟ出ゞ、

○糸やなぎ、注ゟ及ず、

二月

山櫻　一重櫻の一種、山野平林ゟ自ら生ず、梅ニ野梅と云ハ如、

山根草　蔵の異名、

八重梅

梅の条
下出づ

三月　柳髪曼

西陽雑俎 唐制三月三日侍臣ホ
細柳圈ヲ賜フ言ハ之ヲ帯ビバ
蠆毒ヲ免ル、ニ依テ故ホ柳髪曼トイフ〳〵、又一説ホ陶淵明挑
柳ヲ好ンデ齢ヲ延ブ依テ本邦モ取傳ヘテ、世俗、上巳ホ柳
挑ヲ必ズ〳〵雑〳〵雛ニ供ジ、髪
ルコトモ〳〵ナカラシテ毒伐ヲ予フルナラン、やすらい花 左部、高尾
条ニ 法花会の
出づ、

薬師寺寂勝會

七日ヨリ十三日ホ至ル、七ケ日の法会ニ、
薬師寺ハ大和国高市郡ニ在リ天武
九年十月創ヲ持統文武の二帝継ギ壮観妙絶ヘヘ
トイフ馬琴ガ野狐の薬師寺と註セルハ誤リ

八重櫻

詞花集ホ、
いづくのあらの都のやざくらぞ九重ホ匂ハヌハ、伊勢大輔
此哥ヨリ八重櫻ヲ〳〵ハジメ九重ホ匂ハヌカン 徒然草ホ八重櫻ハ、奈良
の都ホのみなりと、紫ニ 部、梨花
世ホ多ク、ヨノ侍ルニ、

棠梨花

の条ホ注ス、

楊梅

本朝食鑑 樹高サ丈餘、葉如瑞香水揚而細厚、

花

深青経冬不凋二月開花三月四月結実ス、

山吹

大和
本草 棣棠ハ園史及ビ元斎花譜ホ其形状詳ニ、疑モ多キ山吹
ナリ、ソノ詳ホ記ス〳〵ハ〳〵ニ譲ル、

山吹

古今集 山吹の花色衣ぬしやたれ
どゝくずロ奇〳〵、是ハ山吹の花の色の黄〳〵ニ掬子染の如
き故ニ口無シの意ホトリ〳〵ニ、又口無シ色ちなみそのゝ
ぬ色あゞとりつゝ、

冬の日

僧まめらず山吹とのむ、 又 後拾遺
七重ハ重花ハヒケゞヽ山吹の実の一ツゞヽもさゝ
あやゝさ、よゝて実の無きヲヒトシキニ譬ヘタルナラン、
又花山吹ト云 桃花御説 面薄打葉裏黄、冬ヨリ三月ホ至ル、〇
裏山吹 同上 面黄裏紅、春冬多ク着ス、〇青山吹 唯心院
御説 表青裏黄、

弥生山

二月三月ニ用ユ、
負憶曰、弥生山、名呼ホあゞず、只春の
山トイヽ〳〵、 題林 あすかゞは
とゝゝゝやうに山ゝゝゞゝ花

柳魚

和漢三才圖会 韓未詳 俗字処〳〵
河湖の中ホ多シ、状鰌ホ
のおとのゝ〳〵やゝ 為重、
似テ、白色淡黒ホ〳〵略青色ヲ帯ブ、性好テ群集シ、水上ニ浮
遊ス性蝿ヲ嗜ム、故ニ魚人馬の尾鬃の髻鬘ヲ以テ、蝿の頭ニ摸
シ成シ、先砂糖ヲ水上ニうかがるときハ鰡襲ル時ニ蝿の頭ヲ水ホ
投ジてこれヲ釣リ、或ハ細ヲ以テとる、春夏多ク出、其大サ二三寸、
水中ヲ行ヲ玉て速シ、故ニそゝト名づく、

柳葉の魚

其、柳の葉ホ似ルヲ以テ、柳魚ト云フ、

の条見合すべし

正月 舞初

紀事 四辻家の楽始あり、舞人楽人来集り、多く陵王納蘇利あ

松離 詣初 紀事 公武の両家、松拍子あり、俗正月三日より十五日迄唱詣し、或ハ鼓舞をす、是を祝ふて松拍子と称す、松ハ長久の義と取、豊臣秀吉公家譜 天正十五年正月二日詣初あり、諸士皆賀祝を献ず、

松の内

注連の内○正月十五日迄と、松の内注連の内ともいふ、江戸ハ七日ハ門戸の飾を除く、近来の風俗と、黒田家にて八古来のごとく十五日迄飾らるゝ、

松の花

十くさの花○時珍曰、按るに、小王石が字説にいふ、松柏八百木の長とう、松ハ公の如し、故ニ松ハ公ニ従ふ、二三月雄を抽で花を生ず、長四五寸、其花蕊を采りて、千年ニ一たび花咲と、或ハ百年ニ一度ともいふ、兼三

藻塩草

松の花ハ十ぐさの花

春物

鱒

孫炎曰、鱒ハ好で独行す、尊で必するのゝし、故ニ字尊ニ従ふ、必る従ふ状鱒ニ似て小く赤脉瞳を貫き身円くして長し、鱒ハ鱒よりも細く、青質赤章好で螺蛳をくらふ、網を逸るゝを善とす、

摩耶恭、摩耶昆布

洲崎原郡畑原村の山上にあり、大化元年の草創伽藍坊宇三百餘ありしが、後廃廃して今纔ニ存す、二月初午の日土産の昆布を買て帰るを、摩耶昆布と云、

佛母摩耶山 忉利天上寺ハ摂

松笔

鳥

千梅ぐさ 京師の小鳥雖ありふれども、菊ぐさの類の小鳥ありて甚殊やかなり、竜中に育ひがたし、

とりつ 例ニ春旅行するニ、東三河より遠州路にて並木の松ニ蝉の声の如く喧く鳴るのあり、擔夫ありていふ、松むしといふと吾ニ袋井掛川日坂ニての間殊ニ多し、是ハ鳥にあらず虫なり、〇秦文曰、京師の鳥雖ニ一年西近江の大浦の出生の婢と仕ふ、かの大浦の児女の唄ふ、松むしといふ、恋の哥すつゝ木の根が絶ずやと唄ふ由と聞ゝ、此唄の意も啄木鳥のやうにこそ聞ゆれ、俚語諺ともいふべし、越後国にて菊戴鳥ニ似る小鳥と苔むしといふと云、下野の山中ニて、松ハむしといふ、このとの春松の緑と食ふ故ニ松の未葉ニ集る彼

松ヲ一ハ松ヲ一ツの下略ならん、夫木こもるの雪る巣ようかをそて新ぐるつふ松もつ〻ハ寂蓮

馬刀 陳蔵器曰、蜃、海泥中に生ず、長さ二三寸、大サ指の如し、両頭開く、きく

花

あ部、劇の条を見よ、

け

正月

雞旦 東方朔白書 歳後八日、一日為雞旦と云、七日と人日とふるお〻ぶ、外記政始 公事根源 是吉日をえらび、宰相廳おはく、事となるふ、上卿以下位次の公卿あるともも、弁少納言外記史かゝる、上卿ハ一ハ大弁も廳ふ、おのく作法をつゝしでゝちをて、坐ざのそこゝゝ、南の所おく勧盃のことゝゝ、番肉〻て左近陣おて、外記ハ恒例臨時の政とふるお官ゝゝ、正月先年の政を行い始むる心と、検非使の廳ゝゝ、今日ちぐあおこるふ、拾芥抄 結政所、在陽明門内、近衛南、左衛門府西ニ在、

削掛挿 或書ニ初子の日小松と引て、是と百並ふ〻ぐりおこ御方の御殿ふハ東方にかけうるもの、此遺意うぐ〻と記ちり、今八十四日の夕べ貴賤ともに家毎ふ、柳の枝とりくふ門おさすく、懸想文賣 鶺水云赤き袴立鳥帽子おそありくく、銭と与へつゝバかの縁の目出さ有べしといふをつくり祝〻て洗米をあく帰るこ、今ハ絶て其事おれバ意の文のやうふ覚えるる人もあり故ふ口傳をそふもちゝ〻ぐる、

三月

元已 魏書三才會条

蕪頌曲經 墨粟今処ふふる人多く蒔て花と以て飾と手、紅白二種あ、微醒を氣あ、其実の形鉾子の如く髄箭の頭ニ似り、米粒極細ちゝとの古、圃人年を隔て地ふ糞〻、九月子と布、冬を泄て春ニ至り苗と生ず、摘めて繁茂すく、是若葉ゝ柔て蔬ふ、

元已 啟良辰、 曲水宴 ○三月三日をえん、

曲水宴 高サ尺餘、葉石竜苟ふ似て小し、三月豆端ニ花をゆらく、淡紅色、房とおす、其花ぐきハ微長く、

張華上已篇 姑洗應時月 和漢三才會条 華髪 華髪艸 高サ尺餘、葉石竜苟ふ似て小し、三月豆端ニ花をゆらく、淡紅色、房とおす、其花ぐきハ微長く、華髪

を釣る状に似　漢名碎米薺、俗云、五形　草、和漢三才画会　春苗を生ず、其葉皂莢及び槻の若葉に似て、両々相対し、枝莖地に布て蔓の如し、節の上に莖を抽んで頂に花を開く、三月より四月の末に至るまで盛に、其花淡紫色、ここの間に白き処あり、状蓮華に似て、故に名づく、莢を結ぶ三稜黒色長さ六七歩、中に細子あり、おのづから撒て生じ易し、人以て野遊の一興とす、

源

平桃

日月桃　三名一種、漢名を金銀桃と云、八重にして其多き処錦を地に敷が如し、

江戸桃　其色紅に白く、或は咲こと飛入あり、

毛桃

万葉　はしきやしここのの毛桃本繁く

花のさかりあふぐべくや

月

紀事　福壽艸を畧に揃ぐ人の家に贈る、其名の宜しきを以てなり、

福壽草

元日草　和漢三才画会　春苗を生ず、

うるはしく新年の観とす、又元日に開く故或は元日草ともいふ、

船乗初

桜州大坂の船乗始に、船乗初に、船霊へ鏡餅神酒を供じ、水主とそろひ、九十段ばかり乗出し、漕戻せり、其外所々にもあり、

正

船霊祭

船に酒饌を供じ、以て船神を祭る、

吹初

笙笛のたぐいを吹初る、

舊年

新続古今　春きぬと方に聞つる初寅詣と同日同所に、

紀事　初寅詣、或は二の寅と用ふるもあり、此日鞍馬近辺往還の西の山岸に高く小楼を構へ、その内より縄をうけて賽銭をおろし、参詣の人燧石を求めもとめるその銭と賽銭を入るを引上げ、其銭の多少に応じて燧石を入まして再びこれをおろす、因て奮ておろすといふ、其賽を操るもの、鞍馬の地の出生の地下人うたひ、鬢髪を剃るその交を勤む、世に鞍馬坊主と称す、燧石は二の山の名産あり、○初寅詣は部類みるべし、

奮却

雑談抄　箸のをち落馬の揖と云、将軍義勝、幼少にして薨じ給ひし比、元朝規式の箸折ざりしが、其年の秋落馬して失給ふ、御舎弟義政続て治世の時、をれざるやうに取計らひて太くせしより始る、古実にはあらず、

福藁敷

紀事　家庭に藁を敷、こゝに福藁と称す、

雑談抄　正月の神を祭て勧請する間、不浄

と除く心ならん〳〵一説ゐ
賀客を送迎の為ともいふ、福沸、福鍋 紀事ニ若水と
汲てこゝに煮る福沸と云、是福と云餅の異
雑談抄 俗ゐ七日の粥を呼て福〳〵福沸と云、是福と云餅の異
名ならん、其故ハ古へ福〳〵とて餅と二人〳〵て引合ことなべ
つもり〳〵や、其うへ餅の異名を福生果といふ、今朝餅と
粥小和〳〵 妓つもり
煮熟るとき、 部毬打 福引 俗部
の條ゐ出ツ 宝引
の条 蕗薹 本朝食鑑 冬十二月宿根花を開く、正二
月最盛ん、初め地を出る時、小蓮の如し、其
ゐ止
蒼漸く〳〵ひらく、普黄ゐ、外ゐ紫夢あり、土とさゝこと一
三寸、ゐさゝ小蓮の如し、花開きて、重ゝして蘤をなす、俗
ふ蕗の蘤と号す、相重る狼をき、貞享式 中古の式目ゐハ、
蕗のさゝふも蕗の花を同く春ゐ用ひられど此名ハ例の賞玩が
むら消の雪ゐおもふも、蕗のさゝふも冬と定むて、ちがひ
蕗花ハ漢ゐハ賈島が春雪の詩よるも、春といふんも宜ゐまど、
その名ハさゝて俳諧の用ゐ〳〵、但〳〵蕗の芽ハ
春ゐ〳〵一物二用の例とりがたきこと〳〵 兼三春物

鮒膾 大和本草 膳夫録ニ云、膾ハ鯽ゐ先ちゐハかし、膾
魚の生ゐこと也、 紀事 正月ゐ三月ゐ至ら迄、事う迄
江の鯽魚ゐ生ゐを源五郎鯽と云、傳ニ云、漁人源五郎始てこ
生ゐとる、其大ちゐとの〻膾鮒と称す、
截て膾とする歟、京近江の人専賞之、 二月 二日灸
紀事 二月二日男女ゐ〳〵点灸すゝことを二日やいと云、中
華の書ゐ八月朔日針灸ゐうへとらゝことを、誤て二日と
用る歟、八月二日もさゝ同く和俗大人小児ゐ〳〵点灸すゝ
是ゝ二日 やいと云、 三月 ぶらこ
花單ゐ、 普賢象櫻 横川詩序 普賢堂ハ天下ゐ一ゐ、
世う傳ふ、鎌倉ゐ堂ゐ、普賢こ
ゐと安ふ其地ゐ櫻を、俗ふ普賢堂と云、或ハ普賢象と云、
和訓 鼻と花と音同く、花の白くちそかつ大ちことの、普賢
の乗るところの白象の鼻
の如〳〵と、両説ゐれ是ん、 藤 大和本草 花春の末ゐ四月
充うゐ、花瓶ゐ花をさすみ、酒と加ゐ日ハ久〳〵ゐ茎ゐ、本
ゐ敗酒の中にこゐと用ゐハ正〳〵と、互ニ相助ること如此人

藤波 藥塩草 波に似るゝ、藤波をかこゝろにつくるともあり、藤が枝 若紫ふ十

うつくしの花とあり字 藤曼 玉玲をくるまきやふ

枝の藤がえ 文明十六 さくるふぢかづらつゝ山べの

かつら ○下り 松をどの梢ようり咲

ざくふ 藤、下りくるまきるどき 藤善 菜の木の溜と菜寺生

とき 類こ、泓石集に藤 藤綱 藤づゝとより合て綱と

こぶを茎ともさゝこゝも、 しくるゝ、春季とくゝ藤

三ッのふぢのやう 裝束の○青藍日、藤緋 藤丸 藤瘤の類

内也、藤丸 紋あり、と春季 ゝせんこといくゝや、蔦門

あるく雜物くゝ隹るんうまで、 花のあつひ称くゝ八るでゝす、

は、部、初暦 同上、初子 ○正月 曆開

の条ふ出ず、小松引 日の条に出、去年、今年

雜談抄 貞徳の説に、去年今年春と、今年とぞう人

勾ふうぐし、師説に、連哥ハ去年とゝ詞ハ春と、今年ハ雜、 耕

ト子 大和本草 包橘ハ橘よも小と、

皮薄く瓤のへぐく上りくゝ

一抹ふ〳〵林とうす、葉長さ二三丈ふと長昆布〳〵ゝ、大一

抵幅四五寸、長二三尺、海人鎚と用て刈とる、松前の産を最

上とす、專ら嘉祝の物とす、和名 左部田作

ふくぶとつる訓に似る故の、小殿原 の条ふ出ず

ここきのこ、は部 江梅 俗云、野梅、其

羽子板の条に出ず 花單葉小白

文木 梅とゝ、○晉の哀帝、書とう時、四時、まふ随く

梅花ふく、 翰墨全昏 羅江東が梅譜云、梅ハ花

中の儒 者あり、この花 あうぐつる

今ハ多ぐ さくやこの花冬ごそ

哥よう梅の異名とす、○又賀茂真淵翁ハ、御齋会

この花いふの花うゝ、梅にかざる、非ずと

八日ゟ十四日迄 公事根源 是ハ太極殿ゟて、八日ゟ十四日ゟで

七ヶ日の間、最勝王経を講ぜらるゝ、朝家と祈

此経とう分国家を護持する功能あうとうてあらるゝの

年の始ゟて先ごふ内論義 公事根源 正月十四

講ぜらるゝや、御齋會内論義 日ハ御齋会の結願

あり内論義ハ御殿ゟ行なる、御物忌の時ハ南殿ゟて、

誡者講師あどみて、御前みゝ論義まゐバ内論義と分ゝ又天長十年正月廿四日、延暦寺の僧円證をめして、論義ありとこゝろ、是らこの起こるとぞ、

木の芽

万木の芽立ちぬ、

説文 芽、萌芽也、 兼三

喬物

黄鳥

詩經 綿蠻黄鳥、丈又云、出自幽谷迁喬木、〇うぐひす部、鶯の条三虫、併せ考べし、

駒鳥

和漢三才画会 正字未詳、其声高清すゝ長滑なり、毎ゐ左右ゐ振り、走馬の轡をまゐるが如し、其頭春夏とゝ囀る、 大和本草 形ハ鶯ゐ似ゝ故ゐ駒鳥と名ぐ、どゑ、身ハ淡黒、頭のんどの廻りと乳紅褐色あり、

九霞

尓雅 東風謂之谷風、注谷風五穀養育意也、春晴而風曰光風、 万葉 細注東風越の俗安由乃可是とゝ、東風痛久吹良之奈呉乃安麻乃瘤抑都利須流乎布秋撜可久流見由家持

瘤抑

白楊ゝ丸葉抑とゝ、その皮を剥バ瘤あるゐ肌の如ゝ、故ゐ名づゝ、多く楊枝とまるの是ゝ、

二月

事始

針供養 八日〇武江の俗二月八日を事納とゝ十二月八日を事始とゝゝ竹竿の先ゐ目笊をつけて、家ゝの軒ゐ尘ゝ又牛房芋六根赤小豆ゐの六種を烹ゝ汁とゝ、これを六賀汁と名づゝ、婦人ハ針の折ゝらを集めて淡島の社へ納め、一日糸針の業ゝ停む是を針供養とゝ、其由来いまゞ詳ならず、

水葱摘

年祝の事えゝもとゝ、二月八日を事納とるハ近世の誤ゝ冬のこの部事納の条ゝるべゝ、

本草

水葵ゐ生ず、葉沢瀉ゐ似て小く、花青白色、蒸ゝ喫ふ堪ゝう、

大和本草

浮薔 三才図会 草木考十 其図ゐ書ゝ葉花沢桔梗ゝ、水沢ゐ生ず、葉厚くゝて慈姑ゐ似たり、夏秋紫碧花と開く、水葵とゝ沢桔梗とゝゝし、

紅梅

范成大梅譜 紅梅花色杏の如ゝ、色淡紅、実扁ゝて班ゝ、

寄居虫

三才図会 文蛤鳥蛤ゐの殻の間ゐ寓生ゐ形小さ蟹ゐ似て白色、甚石より小ゝ身ハ柔軟ゝ、蓋一寄生木と相類す、

長明方丈記 かゝる外ハちいさき貝をこのむゝ、

三月

小弓引

著聞集 延長五

年四月彈正親王内裡ゟ小弓ヲ召ル、酒宴果テタベ
ゟ及テ清涼殿ノ東ノ廂ニ、又小弓ノ勝負ヲ行ハル
考 揚弓雀小弓ト類シテ、二物トモ公家ニ玩ブ
游興ノ器ニシテ武家ノ用ニアラザルヲ以テ云々
公事根源 是ハ天子ノ北斗ヲ灯明ト奉ルヨシ書ハ北山
霊岩寺ノ辺ニ、高キ峯ニ火ヲトモシ供セシ事ヨリ
和漢三才図会 庭梅 正字未詳 叢生シテ、高サ三四尺花ト開ク形梅ニ
似テ小ク白色ヨリ紅色ト帯ブ蕊黄ニシテ甚繁ク艶美シ、
花落テ葉生ズ、枝ク長シ、庭櫻ノ葉ヨリ小ク生ルヲ以テ
ヨク小梅ト生ルヲ以テ青ク熟スルニ赤シ、味イ酸ク甘シ、云々
小梅ト庭梅ハ部、花ノ
ト同ジキニ、護花鈴ハ部、花ノ
鈴ノ条ニ出
筆、正二月開花落テ実ヲ結ブ 夫木 うちわたりてもとふざくら 為家 ○十梅曰、抑
ここづゝのまんせざくらを数ふるに 万葉
の葉ニ似テ紫ノ苞紅焔アリ、又白花ノモノアリ、小弊ノ如
し、故ニ幣こぶと云、紫ノモノハ木蓮ニ似テ、香気蓮ノ如
く蘭ニ近し、
糝米
和漢三才図会 糝米ハ小樹叢生ス、高サ
三四尺葉狭ク長ク薄シ、縦理アリ、二三月

白花ヲ攅ク、大サ銭ノ如シ、蒸シテ糝ノ如キモノヽ、故ニ俗呼テ
小米花トイヘリ 同上 木ノ高サ四五尺、葉狭ク長シ、
小粉團花
粉團花ニ似テ小ク白シ、其大サ豆粒ノ如シ、其花ノ形
俗ニ小粉團花ト云、高麗菊 毛部、春菊ノ条ニ出ヅ、金玉櫻
一名憂忘櫻ト云、江戸渋谷八幡ノ社地ヲ、小鮎 魚部、鮎ノ
渋谷金王ノ栽ルトコロナレバ云ヘリ伝ヘテ、
子ノ条ニ出、蠶飼、蠶棚 蚕部、蚕
ぞ棚 蚕部、歳徳神ノ条ニ出
正月 元旦
ゑぐ摘 藻塩草 芹ノ異名ニシテ、顕昭曰、
ゑぐと八女蒌ト書ニアラズ、くことハ同音ニシテ或ハ芹ト
芹ノ外ニ別ニゑぐヲヨメルヲアヤマレリ、
ゑぐの 夷 ゑびす 夷廻 ゑびすまはし 部、居篭ノ条ニ出、
わらくちもゝえ、ゑびすの 夷祭 ゑびすまつり 部、春夷ノ条ニ出、
籠梅
中花ニシテ越中梅ノゴトシ、むら〳〵掘景源太景季ノ
枝ト折ク、籠ルヲ云ヘリ、此名アラン、

兼三春物

繍毬

吾山遺稿

肥前長崎五島大村平戸此処ニて男女に限らず会ぶ事を禁ぜり、是ハ邪宗門の多く二月より三月の間ニ開く、

三月

越中梅

大花ありて白く淡紅を帯ぶ、豊後梅に似たり、九重の花、

圓宗寺兼勝会

十九日

元享釈書

資治表曰、延久皇帝後三条院二年冬十二月北六日、円宗寺成る、帝寺に幸して親ら法事をとり行ひ、落慶の寺、仁和寺の南にあり、荘厳都下に冠たり、

江次第

円宗寺最勝会、二月十五日、○今寺跡絶えたり、

三月

江戸桃

御室仁和寺の境内に其名あることとなり、

江戸櫻

遅桜、葉少く赤く、花大輪にして、関東に多き故の名とす、

右衛門櫻

江戸四谷笋木村、延正寺宗師堂の前にあり、昔武田右エ門が愛せしさくらなれバ、右エ門櫻と愛せり、當処笋木村なく、右エ門が屋敷ハ今多く庭園に植ゑ其花を愛む、後人源氏物語の笋木の右エ門と云ふもの、此

化倫草

和漢三才図会

今多く冬に開く、葉車前子に似て厚く長く、地に布て生ず、三四月莖を抽ゑて花をもつ、肉紅色或ハ淡黄、或ハ柳色数色あり、其根蝦蟇に似たり、

正月

天狗宴

紀事

月二日

愛宕寺の牛王加持、清水坂の西にあり、今日夜ニ入て弦指客殿ニあつまり、南北二行に座して、おのく宴飲す、其座上にある人、片木を以て立舞ふ、是を天狗酒盛と云、転供酒盛ニ其躰兼豪あるが故ニ其音をとるなり、天狗酒盛と云、宴終りのち、各堂に登り牛王杖と云、大ひ門扉或ハ床壁を敲く又法螺と吹太鼓をうつ、其間ニ寺僧牛王と貼す、是を悪魔をはらふの謂ひ、

雑談抄

天狗酒盛ハ東西に座と設く互ニ脊の高き人を出して勝負を争ふ、

天穿

煎餅と繋ぐ

事文類聚

江東の俗、正月七日を号して天穿と云ひて、紅縷を以て煎餅と繋ぎて屋上に置く是を補天穿と云ふ、

三月

田鼠化鶉

月令

季春之月、田鼠化為鴽、

本艸

鴽脚甚短く、嘴も亦短く、僅ニ能行ことを長す、詩ニ、目極て小く、頂花短く、最取やすし、或ハ竹うと安て射て取る、

鷹ノ飼

夏小正

三月田鼠化して鴽と為、八月鴽化して田

縣召除目

十一日 縣召除目ニハ

諸の外官を宗と任ぜらるゝ外官ニハ諸国の司ニ侍り田舎ニあるニよりてさゝるゝ外国の人を召ゝ任官をさゝらるゝ也

更任、任符、返上

除目ニハ八名ばかりゝ京官ニハ京にある諸司と任ぜらるゝ是ハ田舎の官と宗とするゆゑ也

公事根源 名替、名国替、秩滿、

公事根源 申文

紙も書のゝゝ

異花抄 春ハあゞ召、秋ハ司召

とゝ替ゝる ○あまくだりもとゝ北山抄江次第にあり

除目ニハ八十年の学ゝとゝハめゝく、百文の申文ゝ數を不知おゝそこの

公事根源 正月七日ニ青馬とゝまるハ年中の邪気

世諺問答 礼記

節會

七日

公事根源

とのゝゝとゝもゝ

正月豊楽殿ゝりもてゝ青馬七疋を用てゝゝゝり、文青きハ

ふ、春と東郊ゝもむゝゝ青馬ニハ青ざりてゝゆゝとゝゝ、そもゞ青馬と

春の色ゝなて白ゝゝの八青ざりてゝゆゝとゝゝ、そもゞ青馬と

ゝゝかゝひゝゝゝゝ ○ゝゝ又ゝを次ゝ八江次第其外の書ゝゝ、

と部、男踏 あゞきゝゝ

哥の奢ニ註ス

小豆粥祝ふ

十五日 世

風記 正

月十五日小豆粥を煮て天狗の為ゝ庭中案上ゝ祭ゝゝ則

其粥凝る時東方ゝ向ゝ、再拝長跪ゝて服ゝれバ年と終

るまで疫氣ゝ ○かゝ部の

粥未粥柱ゝもゞゝゝゝゝゝ、

ゝゝゝゝ、年ゝゝゝゝの祝辞ゝゝゝ縛ゝてハゝゝゝの周日と

もゝひゝあゝむの春ゝゝゝゝゝ

後の支考が偽作なるべし、かの書と季〻〻見ざるの説と
なるべし、曠野集雪二十句の中に「ちら〳〵や淡雪うる酒盛
飯 荷兮、又冬の部に「雪のふるかぬるうち消えうす黒弾、
又炭俵集に「ぶつぶつきえて軍の大事哉」淡氣の雪に雁
談もせず 「明ちかき篭挑灯とるきけして」とうたる付あり、
是ハ前後二句ともに雑句なるべし淡雪ハ冬季として一句にて
捨られしことなるべし、又支考の著せる真享式に、淡雪、
この名ハ大昔ハ春とのみ、中昔ハ冬とのみ、今按るに、淡雪ハ冬
に用ひき所以かし、雪の斑ある形容ハ初雪とのみ、薄雪と
をわかん、春の雪の平白あるハ、日影あたりて淡雪をよむも、
寒気のあるもの故なれバ淡雪ハ決して春とさだむべ
此ホハ例の加減ことと、例の當用ともいふべし、又同人の著、
九五ヶ条に云、淡雪ハ春季、中古ハ冬季ともさだめ、口傳新古の法式をゝ、
かくのごとくあるべし、春季と定めるハ支考ぶ説にて、翁存在
ホハ、冬季に用ひられしことと、上に挙るあまの集、炭俵集の句
みそもじ〳〵あと。雪と、中古ニハ皆淡雪とかく、淡ハあと。
の假名にて、沫ハあと。古事記万葉にハ阿和由伎とあるべし、淡
雪とハかくべし、沫雪とハかくべし、假字もあと。ゆゑと書べし、

霞 霞飛 歳時記に春の日、取竹為管候霞為灰以
候時氣至則灰飛而管通、あとゝろぎ
以応六律、青柳ろふ

條ニ出ヅ、あとろ

和漢三才画会 正字未詳、俗ニ阿尤利加比、
其形色蛤蜊ヲ似テ小ク、其大ナルモノ一寸、
小キモノ四五分、灰白色ニシテ、紫斑黒斑花紋ノ華ヲ処〻ニ皆
アリ、摂泉播ノ三州ニ希ニ東海ニハ極テ多シ、其腸中
ニ珠ヲ、真珠トゾフエ、

兼三春物 青柳

其ろ葉 暖 又ぬくしぬくい
の翠色なるを、 あどろ
似て糸毛あり、葉深青ろうるの 青苔 本朝食
ことく、常ニ用ろところの茶ノ 芦角、芦雞
つ部、角ぐむ あとの
芦の糸ニ出ヅ 青海苔 和漢三才図会
乾苔ハ海と澤と両品
あり、気味ろき淡きと鹹きと迥ニ
異ニ、多く南海ニ出ヅ、伊勢の産と勝ろり
ろ、正月ごろふ内膳の浦ろくこれと取る、 甘海苔 崔禹食経ニ紫

菜さら繁の帛の如く凝て石上に生ず、このもの三四種あり、紫色を以て勝とす、俗にこれを浅草海苔 武江品川の海辺にて採 青鰻 呼ぐ神仙菜ともいふ、

和漢三才図会 苔の葉青きを酢ふ合せ、魚膾に和ものに食ふ、俗に阿乎乃太ともいふ、

二月

蓋蒔

蔬傾図經 藍八人家の蔬圃に畦と作り種ゑ、二三月に至く苗を生ず、

麻蒔

蔵器本草 麻、早春に種ると春麻子とよび、晩春に種ると秋麻子とよび、其葉入ること佳也、

胡葱

時珍曰、八月種を下す、葉葱に似て根に悲し、

蛍

時珍曰、蛍は翼を以て鳴ず、其声蚩々として、故に名づく、似よう、其味の韮の如くして臭めず、

三月

浅葱

大倫曰、淡青白色と云ふ、異名に「蔵玉」あり、晩春に種ると秋葱子とよび、葉入ること佳也、

櫻

櫻の異名に「蔵玉」あり、晩春に種ると秋葱子とよび、葉入ること佳也、

おぐるま草

櫻の異名に「蔵玉」あり、晩春に種ると秋葱子とよび、葉入ること佳也、

うきふちる

踏青

藾下歳時記 唐人上巳曲江傾

とそぞろむ

都噲飲踏青 三月三日山野に出て遊ぶこと、

粟津祭

江州粟津祭 八島々川の御霊の祭礼、古は三月三日の祭もありしが、今は民家

微雨〳〵祭祀 十八日 〇人皇三十四代推古天皇の御すること能く、

浅草祭

宇、進中臣 の過ちありて武蔵國浅艸の左迁せらるゝ、その臣檜熊濱成武成 三人の兄弟主人の跡をもとめきたり、申日ゟ仕へ漁して世をわたりとす、時ゟ推古帝三十六年三月十八日、件の三人、官戸川の沖ゟ網を下すに、あやまつてその網に観世音の尊像を掛く、即ち草と結びて堂とし、この霊像をおさめ、今の浅草寺観世音是なり、

そのゝち三人の兄弟を祀りて三社大権現と崇む、今日則三社権現の祭礼、先づ祭の前日、三社の神輿三基を本堂ゟ移し、堂前に俳優あり、こまとびん箱と云ふ、この日氏子の町〻遊物ゟの勢揃ひあり、翌十八日祭礼當日八町〻の引山揃ひとのおの粧ひ先づ浅草見付の外ゟ来つて集り、次第を定めて御蔵前より浜町通り、金龍山浅草寺の境内ゟ入る、神輿の前ゟそれ〴〵の獅子ゟ渡り畢て、神輿三基本堂を出る、氏子の町〻と渡御、浅草御門の外ゟ至りて、神輿を船ゟうつし、浅草川を漕上り、一の権現へ上ケ奉る、今日の船八品川の西大森村の漁人祭礼毎ゟ出す、是往古官戸川に在し漁人の後ゟ大森ゟ移ると以て、今日のそれ古へを忘ざる遺

意ふ神輿ハ[illegible]り陸地を本堂へ還御之、今日浅草雷神門の辺あちこち蓑を賣る、あんぼのそお○和名加良毛と　大和本草　こゝろと浅草の蓑市云、かんべい

杏花

其花うすべに、唐音と呼ぶアンズと云、一種花紅ありて八重うつくしく、俗ふ六代ざくら、あせおの其木ひくき時花を見るべし、長ずれバ切べし、故ふ名を、

馬酔木

平重盛の孫六代年長ずるまで、[illegible]故ふ名を、

花

和漢三才図会　山谷ニ生ズ、高さ七の二三丈、小きハ一二尺ふかし、枝葉茂盛す、其葉狭く長くして、鋸の如き歯ハ、もろし、浅緑色、硬くして枝梢ふあつまり生ず、花茅と出ず、春小白花を開き、房と作す、子と結ぶと赤房をなす、一子の中細子多し、四時凋ざず、相傳ふ馬此葉をくふて醉ふ故ふ名づくと、

蒭

眉作の花　蘇頌曰、二月苗を生ず、二三寸の時、根と併せて菜と爲てくらふ甚美し、四月高さ尺餘、刺多し、心中に花頭を生ず、紅藍花の如し、青紫色、北人呼で千針草と云、　多識篇　大蒭、於尓安左ぶし、○此花、婦人の眉掃の形の如し、故ふ眉作の花と云、大蒭ハ鬼の眉掃と云、

通草花

大和本草　木通、葉莨菪と通草と云、軟馬の木

芽漬ハ通草の葉ハ五葉ふ分る、三月紫花を開く、あづさ花の容三ツふさなる、秋円を子をむすぶ、

東菊

其葉初生ハ蒲公英の葉ふ似て鋸歯あり、稍長ずして車前子の葉の如し、茎を抽んでゝ六七寸、小き葉ふ茎の頭ふ花をつく、一茎一花、形菊の花ふ似て色淡碧色、黄心あり、単葉つゞ、細瓣重り咲けども単葉の状を三四月関東の曠野の路傍

鮎子

小鮎　汲鰷　崔禹錫食経　鮎ハ鱒

若鮎

ふ似て小く、白皮ありて鱗細ふ、春生まれ、夏長ず、秋衰へ冬死す、故ふ年魚と云、　和漢三才図会　二三月の初、江海の交ふ在て、大サ二三寸、ほそく鱗肉と生ずして、潔白くして黒眼をとる、呼ぶ小鮎、若鰷と云、　本朝食鑑　鮎ハ長ざる時、小網を以てこれをとる、或ハ二夫長縄をもちゐ、縄の上ふ重りをとゞめ、小石堰をつくり相曳て小石川ふ下る時ハ鮎石声ふおどろきて落つ、一夫下流ふ立ち、扇網と持ちて二夫の到るを待つ二夫近づきふちぐひ相依りて結ひ合すごとく網ふ圍ふ入る、半網と牽、小拘と持ちて鮎と汲ふ是を汲鰷と云、　紀事　大井川ふハ木柄を以て鮎を

取ろこゑを汲鮎とふ

さ 正月 歳旦 開

正月吉辰とそ、ひく、連哥俳諧つゐく 席をもふくそ、歳旦とハ、歳旨賀詞の発句と云歳旦の句とも発し、幸木、幸竜蓁盒子○幸木とハ掛るお粥杖のことく、北国にて幸木ようひく、女の腰をうつをも、又門松の根ふ立るお木とも、さいふ木と云、○蓁盒子ハ盒子のことくおうて、門松おゆひつけ、供物をこの内へ備へ、しめ幸竜もこのくゞりひるこら

綵繭 春繭と載く

荊楚歳時記 立春の日、綵と剪り繭為ゐ鳥くさまことをいゞ、宜春の字を門ふ

箑木牛房

ひ部開牛 房の条虫、三 左義長、どんど、

爆竹、吉書揚、

土吾 徒然草 左義長ハ正月ふ打るきちやうと、真言院ふて神泉苑ふて

菱の葩をおそる

焼ふぐるし、法成就の池ふをとるそをハ、神泉苑の池とそしょい、

和漢三才図会 正月十五日清涼殿の庭ふ於く、青竹と焼く、吉書と天ふ上らる、十八日ふを亦竹と飾て、据扇を結付、清涼殿の裏ふ於く、唱文師大黒松大夫其徒四人、二人

三人媼 鬼面を被り赤縮の髪と蓑て、二媼ハ太鼓と撃へ二の翁ハ逐舞くるまそろ、童子二人素面赤縮の髪と蓑て、腰鼓とおらふ又好らふ肩衣袴とそろとの五人雙ひ立くことを雛

ぐんどやとも、摺餅ともそろる者一人声とおせくまあとるやうき其来由ことをし、

歳時記 元日庭前ふて竹と爆ふ山臊を避く事

文類聚 爆竹ハ、神異経ふ西方深山の中ふ人を、長尺余りふを犯ー寒熱を病ふ、名づけて山臊とふ、竹とひふく火中ふ音爆ゐ

ふて声あり、山臊驚き悼る、紀事 洛中家く今暁爆竹す、其焦あるうくる竹と刖の肉おそろくとゝ

兎義長の史あく餅とやそろ養ふ、是と

この史を以く今朝の粥と煮る○或云漢明帝正月十五日、仏経道書の勝劣を試ふの遺風也、是左伝長の義ちれども其儀式浮図の事ふ拠ふず悉ふく附会の説ふ九民間十五日の朝、毎家の節菓拾ひと取扱め、一処ふ集めて焼を止卒止す、児童の武業の書と天ふ上ぐ、○武江ふてハ官禁あるて爆竹をせず、御仝 花ひらの条ふ、正月の餅ふ菱の花ぴらとてみ花の形ふ造、

猿曳

紀事 九京師猿と舞すとの六人ひり、俗俎公と猿ふそ、又云猿幸、赤縄

と高貴の家ふ献ず或ハ猿を舞して厩の祓と
事ふ云ふ、是馬遷神といふ厩の神を祭るなり、さえがる
冴 廣韻 寒凝也○い部の凝こゞる
ようの部の餘寒、をの門に係る
峨江入楚 春ハ佐保山の神より事おこり、紅葉と謡ふ
く春と落る神とうひ、秋ハ立田山の神より事おこり、紅葉と謡ふ
る故ふ秋と落る神とふ云ふ○貞徳曰佐保姫立田姐と申ハ唐ニハ
造化の神と名づけ、春秋の花をそろと造り出す神ゝうると日本ニ
云ふ春の造化の神とバさほひめとうひ、秋のとバ立田姐と名づくるし、
さほひめも神祇ふハせらる、佐保姐とハ名づくるて、其おもむき事ふ
姐ともうひ、姿のあでやかふ匂と作りて、衣と八寿ともいふべし、実
体あるをゆ名、衣類ふ佐保姐の衣衣類
さへ嫌ふらるゝ、 新式 佐保姐の衣衣類
もあるべし、○霞花あでと

兼三春物 佐保姫

櫻海棠 大和本草 壹岐の島海岸ふ産、其色紅白櫻の花ふ似ゝり、庁々相偶、酢鼓ふ漫て
是と食ふ、

鼈 春月盛ふ出る故ニ、俗ニ鼈の字と用ゐ、山椒の皮 本朝食鑑 椒樹の
皺あり、色灰黒、裏面ハ光て滑らかふ青白、粗皺と削
去りて用ゆ、其味い辛い、

二月 西行忌 十五日 西行法師ハ左金吾藤
原の康清次男、俗名
ハ儀清、鳥羽院の上北面徳大寺家の被管ニして、弓馬奇道
の達人ゝ、保延三年薙髪ゝゝ大奥坊円位と号ゝ、 隠逸傳
西行ハ和哥ハ禅定の修行ふ、吾和哥ふよりて仏法をそこう
と、常ふ仏涅槃の日、花の下ふ於ゝ死ん事を願ふ哥ふ
徒ゝゝハ花のもとふゝ春死んそのきさらぎの
望の月のころ、果ゝゝ建久九年二月十五日卒ス云

崖岌の 山崖大念佛 紀事 九日 十五日 追

柱炬 紀事 二月十五日 清涼寺釈迦堂の前ふ大炬両基
と建、暮ふ及ぶ火を点し、地丁ゝ各炬をめぐり、
除咤の号を唱ゝゝ節を繋ゝ踊る、是西域ふゝ釈迦と葵ろ
の遺意ゝ世ふ、柱炬とゝ、

座論梅 中花浅紅千葉其実枝毎ふ四五顆
長ぎらふ随ゝ垂落ること、坐と論
ずふ如し、

千梅さゝがせこ 虎杖さゝらふ一種ニ
名ゝ其萠出ゝゝをさゝらハ、既ふ長ゝゝをいゝ
云、○い部、虎杖の条と
見合せて、意得ぺし、

櫻梅 中花浅紅八重、さいこつま

三月

あり、是を亦融通念佛の余流と、午の時、士人堂上に於て俳優をこゝろみ、是諸人の夢とさそうさんとよろこぶ、無二集、こゝ後宇多院の弘安二年の

早桜 花單 大和本草 文選況休文の詩、山櫻発欲燃とは果木始て行やと、王荊公詩、山櫻抱石映の名と、花朱色火の燃んとするがごとし、延宝年中長崎にわたりし松枝、司馬温公詩、紅櫻零落杳花開、中華にも櫻とは八朱花と日本の櫻は中華にも有と、こゝ〇初櫻、彼岸櫻、一重櫻、糸櫻、何清甫の云、朝鮮にも有と、こゝ〇初櫻、彼岸櫻、一重櫻、糸櫻、嫉櫻、児櫻、熊谷櫻の類、こゝに二月の季とあり、頭字の部みこゝろと今こゝと見て心得べし、〇八重櫻、普賢象、楊貴妃、奈良櫻、鞍馬雲珠櫻、虎尾櫻、塩竈、伊勢櫻、江戸櫻、庭櫻、撫櫻、浅黄櫻、犬櫻の類、こゝに三月の季とあり、頭字の部みこゝろ入〳〵注ス〇異名、普賢見草、おくれざき、吉野草、曙草、風土名義抄 の類、頭字の部おくれざき見るべし、

左近の櫻、南殿の櫻 禁秘抄 南殿の櫻八紫宸殿の巽角 倭三左近のさくらと 〇南殿の櫻八本八梅ありしを、後拾遺、天徳のころ改て櫻を植くれ〳〵と、歴代編年集成 ももの、

櫻人 連哥新式 櫻人 うぐいすとのおとづれ

櫻のあるゝ居人をと櫻人とよびつゝ入らるゝてハゝゝふさゝ又声をどりつゝ入

櫻人、催馬楽の呂歌 〇櫻人、

櫻田 連哥新式抄 深山櫻のことくそのごとく 八生せぬそのごとくそのごとくと、田のつゝきたるも、一本ぞと何ぞと京砂ふる遠事みゝる、さゝ〳〵田ハ名物とよりつゝ

櫻田、紀伊国の名呼 新式秘傳 櫻田

櫻戸 哥林良材 櫻の木ゝゝつゝるゝる戸と、榊の戸の如し、〇一説、戸の近辺ゝ櫻の咲ゝるゝ、只櫻のある所をいふ、

櫻狩 與俄抄 櫻を尋ねおもむき何を宿ゝゝ、 花をもとる、〇草狩のごとし、

櫻草 和漢三才図会 山谷の中に生ず、即九輪草の一類異種、葉の形相似て微小、邊ふ鋸歯あり、甚光沢ありて、葉の心白し、三四月茎と抽んでゝ花を生ず、單の淡紫、或白花、櫻の花のごとく最艶美、故ゝ名づく、

櫻貝 今櫻貝と称す

千梅ころせと 櫻川の謡ゝ、

櫻貝 作まると孝ふ、常陸国櫻川霞が浦の辺りゝハゝく名のる奥のあらんとおもふそ、子先年筑波登山ゝゝ、彼辺一見せゝ時好

事のさのみ喜ぶべきにもあらねど、昔ながらの国ぞかしと櫻美
よのいつくしうさかえたる奥あて、春暖をそそのかす
てすくなる、則この浦の名産、若さくら云云 奥是に云青藍云運
歩色薬 国栖の産に、又鼓司、吉野の人の名あり、吉野の桜落
て水ふかりの奥とこゝろもあるやふ、櫻奥とかふと
云云 ゝゝとうれバ活法の書これらを因て出んか、 櫻鯛 本朝食
鑑 音書
ふ云、春三月さくらの花ちりそそぎ、漁人多くこれをとる、故に櫻鯛
とも、いゆく春のさくらひの浦のさゝ波かやうらん、
為家 櫻うらひ 千梅こくぞう 正字未詳、俗字なるべし
ゝ、五六寸ほう大きことの七八す、背黒く腹鰭赤く、信州諏訪の
湖水にも赤鯉とて、皆根ある赤腹と云、其外処々にありて、春
花さきちるころ取るものと
櫻うらひいとゝ多かりき、 櫻衣 道遊院御抜 面白 裏青き、
関白大目菩春着之 桃花御
説 面白蛍裏浦菊染 三月大根 江陰懸志 蘆菔一種、
又面白裏赤花ゝゝ 暮春の時有之、形細く
長ゝ、名づけて 揚花蘆菔と云 和漢三才図会 春二
至ても赤葉と採て食べきことの三月大根と名く、 三月盡 三月

の晦日と云、春の果
春の限なるべき、

三 正月 祇園の御掛 元朝 東越

神社啓蒙 祇園社 八山城国愛宕郡八坂郷にある祭る所の神三座、
午頭天王、八王子、少将井、 紀事 晦日子刻、祇園の社神前の灯燭の
外ことごとく火を滅し、暗中恭詰の人口を慥ふ、他人の聴ざる
を伺ふ、假令その声をきく、其人を知るといへども、咎ず、
懺悔の儀ありて勧善懲悪の微意なり、且、刻ざるを執行 拝殿に登て、神前に向ひ、默坐
奥の院の社司前に跪ひて、執行拝殿に登て、神前に向ひ、默坐
すること暫くして、経呪を誦す、東西の欄の内に頭ごとの剣
掛の木を左右に建おくこと各六也、是十二月の数を表、是を杓杖
と称す、而、同時におこすを燎し、傳へ、其烟西にせず時は丹波の国
来年五穀熟せず、東へなびく時は近江の国又もうふ、一ゝ、両
国の豊凶を占ふ、故に西方に居る人は、高声に近江ゝゝと叫ぶ、東方の
人は丹波ゝゝと云、其烟気と避んと欲するなり、其後社司、新に井水
を汲ひ、御掛の火を以て、元朝の供物を調ふ、是新年水火を改るの
義也、参詣の諸人も又其火を乞ひ、家に帰り、元朝の羹と煮る、
紀事に云、君と寿慶卿の書のごとくあるよ、君ともそも讃ゞゝ、それも君あるで

君が春 烏丸資慶卿の書のごとくあるよ、君ともそも讃ゞゝ、それも君あるで
紛ゝ故薬地のうちもそも讃ゞゝ、それも君あるで

誰ぞと云ふを熟し 御慶 年の始の祝詞、○長松が親の名で來る 御慶ハ野坡

云詞ハゆうすゐ、

着衣始 季吟曰衣と着初る祝ふ也 三ヶ日の内吉日をえらぶ

毬打 玉打

萬葉 神龍四年正月、數王子、及諸臣子等、集於春日野而作打毬之樂 袖中抄十節錄云、黃帝蚩尤が頭をうつ是と毬打の始也、彼例を以て、漢土年の始に作ると用ふ、國中凶事多し、仍て日本國その例を學びて毬打をうつ、 醒齋

曾董集 正月男童のそそをふ毬杖ハ、と打毬の變風なるべし、打毬ハ馬上の武事とあれども、事繁きに、和漢ともにその來ること久し、又云、毬杖とハ推の形しくる杖と玉とのごとくハ先木と平ふせづくり、玉のころがり作りごとくのもの、打やう、其間九十間或八十二間をへだて、其中地上にまろび、男兒双方にわかれ、おの玉と地上にまろびたるを、一方より推もてうちとむるとをそそぎて、一方より推もてうちとむるとをそそぎて限りのすぐるを、或ハ打とりて、限りのさきの負とす、或ハ打とりて、限りの勝と、投こゝろさきの負とす、或ハ打とりて、限りの勝と、投こゝろさきの負とす、或ハ打とりて、限りの勝と、投こゝろ

の忌日ゝ故ゟ御忌とゝ○京俗、御忌詣と遊覧の始めとして、
[illegible]當ゝめとゝ十月東福寺の開山忌と終りて春吉田納よ、

三春物 雉子

華蟲ヌ野雉ト、漢の呂后の諱を雉とゝゝ
つゝゝゝ雉を野雉とゝゝ 月令 仲冬
雄始雊、孟冬入テ水ヲ為ル蜃 和漢三才圖会 雉雄ハ頂ヨ
雙とゝる角色ゝ、頸頸胸腹羽翠黒色ゝゝ光ゝ、頬眼紅ヨ
觜青ゝゝて尖り、背翩翩彩斑色ゝ、膕ヨ長ゝて緑の毛あり、尾長
ゝゝく文采あり、翅短ゝゝく蒼黒斑ゝ腥掌、雞ニ似ゝ一動ゝ
雌ハ黄赤黒斑ゝゝく、文暗ゝ尾短ゝ、

鳪恒抄

このゝの雞を愛ゝゝゝ切ゝ、金衣鳥 鶯の異名、
明皇禁苑中ヨ於ゝ黄鳥ゝゝる、呼て金衣公子ゝ、故ヨ金衣鳥の名あり、 閑元遺事
經ゝゝゝ鳥 鶯を云、その鳴声

千掬ゝゝゝ 茶人炉ゝゝと
法華經とゝゝ 末地の爐縁 用ふゝゝ炉ゝゝゝゝ冬中
如一、故ヨ此名を、 ハ塗ゝゝを用ひ、春ヨ至ゝ末地のゝちヨ仕替ゝゝ、茶人曰、春を
陽気ゝゝゝゝ、炉の内ゝ灰を吹上ゲ、炉ゝゝゝゝかゝりて見ゝゝ、
依ゝ末地のゝちと用ふ是茶道の古実ゝ、
他説ありとゝ妄説ゝゝゝゝゝゝ、

二月 行基忌

二日○摂州河辺郡昆陽村、崑崙山昆陽寺、四十五代聖武帝
天平五年草創、開山行基ゝゝゝ、某師の像と作りて安置す、天
正年回禄す、今僅ヨ小宇と構へ本尊及び開山の像をおく、八町
東ヨ池を昆陽の池とゝ、池中の鮒ゝる一眼ゝ、池の魚と祭て行波
明神と号す、三月二日里民恭詣す、是を行基忌ゝゝゝ○行基ハ
姓ハ高志氏、泉州大鳥郡の人、百済国王の胤ゝ、天智七年ヨ生る、
十五歳ヨ〜ゝゝゝゝ、ゝ御ハ講ハ
て薙染ス、 祇園御八講 八日○今絶ゝ此儀ゝゝ、
勅会ゝゝ
等を、今台家ニ於ゝ修行する法ゝ法花経ゝゝゝゝ、
義経を加ゝゝ、三十日の式を、八講ゝゝゝゝ、
鮮之講師問者を立ゝ、右座ハ佛名をゝ、付ヨ唱ゝ左座ハ法
花八巻の大意を論ズ、別ヨ論題を設ゝゝ論義ゝゝ其外ゝ如
陀、唄散花ヨの法式嚴重ゝ、天台一宗ゝゝゝ修行勿論ゝ或ハ禁
庭の御八講ハ、奥福寺、東大寺、延暦寺、園城寺、四箇大寺の碩
徳を召ゝゝゝ行基菩薩の御哥、法花経をゝゝゝことハ
薪ゝゝ菜摘水汲ゝゝゝ、此哥をゝ付ヨ唱ゝことゝ
もあり、提婆品ヨ採薪及菓蔬随時恭敬與の偈とて薪の
行道とて、天子自ら御行道まゐゝ、薪菜篳水掃等六位

戒人三人役之捧物行香まの儀式、悉く記しがたし、祇園御八講を定めらる、台宗別院の時、勅会を行はるゝ例なり、今も社内ふ慈慧大師の像を安置し奉て遺跡分明ふ、

吉祥院八講

九五日 菅家長者記 吉祥院八菅家氏寺、天神の祖父清公建立、東寺の西南ふ在り、加賀国富墓の庄八古へより主事ら荒廃の地なりしを、宣旨とや請ひ、神領ふ施入せしめ、永く法花八講の料所とせり、

公事根源 二月廿五日八天満大自在天神のうぶすなにおはしまし、夢のつげありしより、御日ゝ、天仁二年より吉祥院ふて八講あり、菅家の人ともから参りて是を行ふなり、

北野御忌日

九五日〇北野社八山城国葛野郡ふあり、北野の家、大小の御供を北野の社ふ献ず、宮司老少相迎へ立て、幣殿より神前の階下ふ至り、手毎ふそなへ傳ふ、宮司の一老と巫女の丈子とをぐらふ是と取つゝ神前ふ供ず、是を御供と称す、供物の上ふ菓花と挿む、又轉供とて、或八菜挿の御供ともなす、或八菜花ふ梅花と挿む、故ふそらふ或八歳ふゝて菜花ふ開ざる時ハ梅花と挿む、

公事根源 二月八日ふ

紀事 今夜、西京御供田を頒つ、

永子御讀經

江次第頭書 春秋二季、百僧と南殿ふ請じ、大般若経を読しむ、其内御前僧九口を定つ、納言参議各一人南殿ふ着て事を行ふ、自餘ハ御殿ふ候ず、貞観御時毎季ふと行ふ、元慶の天皇践祚之後、二季ふ修之、

公事根源 二月八日大般若経と百ゝ講ぜしむ、四ケ日のことふつゝ行幸とて僧に桑とのふ、天平元年四月八日ふ、

菊若葉

本草 初春地ふそめらる、行桑ハヒキチヤとよむべし、布て細苗を生ず、是ふ宿根より生ずるとのべ、又種子ふて繁始て分るゝ、

三月

經供養

二日〇指ふ四天王寺、太子堂の北隅ふあり、多尊如意輪観音、三月二日経供養と修ス、太子夢殿の経供養是ふ、寺説云、今日未の下刻、聖霊院の白洲ふおゐて経供養を、宝幡を宝殿の西ふ出御ふ奉り、衆僧諸役人看坐寺僧惣礼田向、次ふ舞楽を其外、

曲水宴

二月十五日ふおゐて、

荊楚歳時記 三月三日四民水浒ふ並び出ゝ流觴曲水の飲をなす、〇

公事根源 むかし王卿ふゝ泰りて、御前ふて詩を作り、講ぜられ、御溝水ふ盃を浮べて、文人

河骨の花ゝ似よう毒草ゝ、千葉のこゝ美ふて可愛、**金盞花** 時珍曰、金盞州一名長春花、金盞ハ其花の形ゝ盞ゝ、長春ゝハ久ゝ耐ゆゝ、夏実ゝ尺蠖虫の数枝ゝ蔸出ゝよう、○周憲王曰、金盞児花苗高ゝ四五寸、葉初生ゝ蒜葉ゝ似ゝ厚ゝくゝて狭ゝ、莖ゝ抱ゝ生ゝ葉ゝ脈ゝ、莖頭ゝ花ゝ開ゝ、大サ指のがらの如ゝ、金黄色、状盞子の如ゝ四時絶ず、**菊栽替** 月令廣義 菊花、穀雨の時、根ゝ堀起ゝ、壮嫩ゝ剖揀ゝ、根ゝある種ゝ、肥地ゝ栽ゝ、但ゝ其根ゝ上ゝ浮起ゝる白鬚ゝ去ることゝ要ス、乾燥ゝ土ゝ以ゝ種ゝ築実ス、雨中ゝ令種ゝべからず、湿泥ゝ根ゝつけゝむることゝ、花茂ゝずゝ早ゝ分ることゝ、宜ゝからず、**霧島つゝじ** 紅白紫数種ゝ大隅国、霧島ゝ云ゝ出せるゆゑ、

ゆ 正月

子 ゝゝしのぶる歯固の具ゝゝそゝつゝひらゝる 埃嚢抄 杜の字ハユヅリハゝ世俗正月ゝ用ゝ○此木ハ新葉生ひ出ゝのゝて後ゝ旧葉ゝ落ゝ故ゝ譲葉ゝ名ゝ又和名親子草ゝ、

弓始 甲陽軍鑑 弓始ハ正月七日ゝ、豹尾黄幡ゝ忌ゝ

以下ゝゝとのゝよゝ、康保ゝ御記ゝゝ、元年三月上巳日、後苑ゝ曲水ゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝ

是みよりて豹尾の頭と踏こそ、黄幡の尾と射べし、陰陽暦 黄幡の方弓もじめよ吉、**湯殿始** 雑談

拙 和俗、歳の始めに沐浴すると湯殿始といふ、**柚枡** 和漢三才図会 廃耕ハ柚の属にて其枝葉花ミな柚にこと〴〵く実の状も柚に似て最大きやう、**雪解** 雪消 ○陽春の気あひいたり氷解 旧年の雪の消るとき、

真 亘式 **解** 春と冬と、消ると冬とそれ〴〵分さるゝハ泥まるゝとき〳〵ハ冬の内にも雪の消みるハあれど、大きに春気の催さいとこゝ冬の気の去りゆく天地の理よりこそともあれ、只打ちつゞく雪消雪解をいふ時ハ春と、其取かたハ冬と定むべし、既に古式ニハ解ると消ると春ふあるべうず、 **月令** 辛春之日、東風解凍 **風俗通** 積氷と凌とらい、氷壮まると凍とらい、氷流ると泮とこのひ、氷解ると泮とこゝ、 **月令廣義** 正月中、両水中、気、雪散為水也、これらの本文、天地間大きの理を以て言ことのしこゝろみよりて其意を得べきことなり、**雪の絶間、雪の雫** 御伞 雪のしたゝり、雪のくだくる、残る雪、春ハ雪の名残とぞいふ、久しくなどころ〳〵雪の名残とぞいふ、

残雪のふるゝ、雫ともも 春暖みよう、山ふう雪のとけ落ること、 **雪消の水** よりめぐり、 **雪譜ニ** 北越

湯島天神の砚餅

十日〇江戸湯島天満宮八、文明十年六月太田道灌の曼想のこゝろよりて、城外の北畔ま、菅神の祠堂を建さ、数十頃の美田をも、梅樹数百株を栽こゝ、〇毎年二月十日、別当喜家しお配る、世俗、湯島の砚餅と称ス、或ハ、産餅ともいふ、

經會

九日ゟ十五日迄、〇瑞應山大報恩寺の釈迦堂ハ、洛の訓讀會ニ式、上立賣条雀の西ゟ、元天台宗ゟり、近世真言宗ニ改ム、古文と養命坊と号ス、千本の釈迦堂是ニ、

紀事 この寺ハ藤原の秀衡建ふところの堂、尭二平の教経幼年の御手習せしこと云、 **寮** 一説ニ秀衡の堂、教経の室、ゟり、ともいふ、ある処ゟ、多く廃頽す、近世てゐと再興すこと、又一説ニ描聞の中納言光隆卿の家士岸高拾、千本の地ニ大報恩寺を建さ、如琳上人と請ス、ゐろ〳〵ゐれど秀衡の堂、教経の寮ニお釈ゟ、毎年此節雪ゟ風烈す、故ゟ児童の誘ふ、雪経お奏ん、と、寵の節ニ奏んおもりずと、云、し遺教と雪ニ和語相近、故ゟ

もろこし此寺の普賢像の櫻あり、倩普賢堂の前ふき、凡千本釈迦堂念仏とハ支承年中加賀上人を始ふすとぞ、実ハ恵心僧都の高弟定覚上人ふて、是叡山堂念仏の祖ふ、音乱名号大念仏ふて、一旦中絶〳〵二百五十年のそし徒然草ふとこゝろ、此法會九日ふ十五日ふ至る、東山智積院の僧徒ふとゞまりて、訓讀會ふ、遺教と訓読さするふ、此教ハ釈迦涅槃ふ入のふ前ふ仏弟子の為ふ遺戒〳〵のふ経ふ、故ふ遺教経ふ云

雪の果

凡毎年三槃の時ふ及〳〵多〳〵雪降る、故ふ世俗雪の終涅槃とふ是なり、

三月

捴抑の火

お部寒食の余ふ出ス、

油花の卜

関経 洛陽上巳の日、婦女膏の花を以〳〵油ふ点ト祝ーてゝふと水上ふ洒ぐ若竜鳳花弁の状を手ふ沢ハゆめ〳〵ぐさ〳〵ふたゞくそうふ夢見吉、これを油花卜ふ、

夢見草

櫻の異名、蔵王植おきふ云

櫻桃花

花彙ハ関通志ふ、櫻桃の木大きふらるものハ丈ふ近〳〵春花さい形止渇ふ似〳〵小〳〵白花紅暈最繁密ふて枝ふ満ツ其葉円尖ふ〳〵擾葉の如〳〵頗狭小ふ細ふ及び ふ毛あり、

行春

春の過行て暮春ふ、〇行春ふ和哥の浦ふ〳〵追ひ付こう芭蕉

和漢三才圖会

竹串と以〳〵鱠残魚の目と貫き相聯ね曝し乾ふ〳〵製ふ作るふ、勢州桑名ふて専ら製之、

めかり

抑

早春芽のまだふ出んとする抑ふ、犬子抑をめかり抑と云人あまたゞ別種ふとぞ、

時

お部蛙のめう時ふ出ス、

供御藥

藥子 署薯蕷
白散 度嶂散

〇元日ふ三ヶ日平旦ふ供之、天皇清涼殿の東廂ふ出御あらゝ、御歯固の御膳と供〳〵次ふ一献と供ず、此度度嶂散ふ、次ふ二献と供ず、則白散ふ事終ふ〳〵三献ふ、次ふ御酒ふ入〳〵奉るふ、其儀式江次第ふ、〇藥子とハ署薯蕷ふ前ふ分〳〵藥子ふ誉〳〵むさて帝ふ奉るふ、次ふ二ふ屠蘇ふ〳〵、

紀事 古へ屠蘇の屠死戸の戸を御生氣の歳ふる童女の〳〵嫁ざる者を求めてつとう〳〵むるふ、忌〳〵一点を加へ〳〵戸ふ作、是本朝之故実ふ、

三朝

日の条ふ出

三物の連歌、三物の俳諧、三物賈

紀事 四

俳諧おのく席をしらく、凡京師おおそ連哥の長、是を花の下と号す、又宗匠と云、毎年今朝其一家中其事を玩ぶ、及び才子ま其宗匠家ゐ集り、各連哥を句すが、其ま一句を発句とや紀、才二句を脇と称す、才三句を第三と作るを栄とす、近く此三句を三ッ物と称す、今朝これを作るゐ随ひ剖判氏捽ゐ鏤めて市中ゐ賣る、近世俳諧も亦然り、高点ゐ連哥俳諧の三ッ物と呼く街衢を徃来す、

水祝

旧冬新らしき水を祝ひ其家ゐ至りて、水を祝ひその士せうく今八官より捺ぜらる、

箕面の富

七日〇今夜諸人指物箕面山の麓天ゐ競ひ来く、堂上ゐ富とつく、先天文の前ゐ大擣三箇を置、才一才二才三と称す、その擣の上ゐ小孔ゐ穿、今夕寺僧数千枚の木札を積おさ、参詣の人寺僧とて已が名を札の上ゐ記さしめ、穴より擣の内ゐ入、或ハ一枚或ハ三枚其意ある毎、各三の擣ゐ納了く大ゐ運転して後寺僧長き錐を以く穴より突名ありところのハとくび、富と得ること

札の次才のく

御薪

十五日 公事根源 是ハ百官悉く新と奉りて、宮内省ゐをしめくりて、其数ハ延喜式神名帳駿河国盧原郡御穂神社ゐ毎年十五日奉書てこれをつかさどる、

三保祭

十五日 延喜式神名帳駿河国盧原郡御穂神社ゐ毎年祭祀の時ゐ社人の神鉾を神幸く、羽車の社ゐく神祭を初め、神供ゐこ献ス、云、慶長年中より有度郡ゐ属ス、羽車磯田の社ハ本社を去ること南へ六丁余外濱の海畔ゐ在、此社祠古へハ数十町ごへ、海中三四丁ばかりの島ゐありしを、往年狂濤衝突、漸く汀渚を没くて社地と退く、只今此処と、羽衣の旧跡とてゐ附会の事ゐ、風土記ゐ、御穂大明神の離宮ゐく、今ゐ至るく毎年祭祀の時ゐ社人の神鉾を神幸く、羽車の社ゐく神祭を初め、神供ゐこ献ス、〇羽衣のこと、往昔この島へ天女天降く、故ゐ、羽車ごこと、神主の家の傳ゐ云、其ハ羽衣の旧跡ハ今の社地ゐありざることゐ明らく、例祭正月十五日ゐ、十四日ゐ十六日ゐ至る、恭詣の人昔よりゐ馬と多くゐ牽来る、十四日ゐ簡賜の神事、十五日神前ゐ於く天下太平の祈禱あり、十六日吉来ハ神輿神幸く、湯立ゐあく、大永二年細川弾正忠宗基の兵火ゐく、神殿諸宇神器ゐ悉く焼失、十八今ハ神供神酒の

祭祀のそのほか、社說あるべし、**水入菜**　洛の近郊畦の間ゝ水を貯へ置く、蓮葉甚だ繁くして味美し、洛の野珍とす、**未開紅**　梅の一種にして色紅ゐ、八重にして花大に、ひらざる時も紅し、故に名く、

兼三春物

水ぬるむ　春陽をむかへ、水もあたゝかになるをいふ、**三葉苔**　二月苗と生じ、一本叢生してこの八自然と生ずる処多し、今江戸の市中より蘚苔くさの八ゝ人の作り設る故ハ非ず、

二月

水間祭　上午日　泉州府志　水間寺縁起ゐ、中冬の頃よりおこなひ、竜谷山水間寺八聖武帝の勅願ゐ依て、行基僧正、天平年中ゐ開闢をる処にして、本尊正観音、行基四十二歳ゐして作る、二月初の午日を以て会日とす、相傳ふ此日歩を運ぶその八四十二歳の厄難を消除し、且福壽を得ると、こゞろ當日參詣の人出産ゐ草藥を求めかへる、**水取**

外傳　三月桃花水之時、鄭国之俗三月上巳、於溱洧両水之上、

韓林

執蘭招魂續齪敍除不祥　朗詠　源起　周年思巍文、

ゐ已ノ日の祓八周の世に起り、魏の世より三日を用をそれゝの邦ゐを早くこのことを、す、部須ゐ千の御祓の条併せ考るべし、**御酒古草**　藏玉の名人や千代をおくらんこゝろざしありてこのくさゐ御酒ゐ入らるゝ桃をもつゝ、**三千代草**　桃の異名にして西王母の園ゐ三千年ゐ一度花咲こゝる桃のこゝろ花咲こゝろ春ゐいふ、

水尾祭　九日　神社啓蒙　水尾神社ハ丹波国桑田郡、愛宕山の傍ゐあり、祭ゝ所の神一座清和天皇、

雜談抄　帝の御国忌の日を用ゐず、三月九日ゐ祭ゝ、

○祭式未タ詳ならず、御国忌ハ元慶四年十二月四日ゐあるべし、

生念仏　十四日夕ゟ四日迄　雍州府志　心浄光院、壬生寺ゟ云、中世三井ゐ属ゝ故ゐ小三井寺と字す、本尊地蔵ゐして、傍ゐ鑑真の像をゝと真言ゐ南都の招提寺ゐ属ゝ開基にもあらず、中興ハ一条院西暦年中、快賢僧都ゝ後伏見院ゐ安年中、円覚上人妙寺ゐ住して始ゝて融通念仏を修ゝ今ゐ於ゐ三月十四日ゟ九四日

お玉く念仏あり、其間士人俳優とす、世お壬生狂言よな是衆人の睡と
さゝるんが為く是もの融通念仏の余流あるべし、雑談抄
この俳優お用る仮面ハ仏工
定朝が作、二面あり、

壬生祭

通俗志 壬生念仏お
兼ゝ記せるもちろんぐも
別お祭あり、鎮守
祭八五月十三日あり、

御影供

九一日○弘法大師の御影供
和漢三才図会 元一日
定、今お至迎、此日真言家の寺院大師の像を安置
〳〵御影供と修ス、禁中御室東寺へ詣るもの多し、

蓑

荷竹

和漢三才図会 薑の葦葉及竹ユ似く葉嫩
時荳も亦啜ふべし、俗お蒼荷
時珍曰、茅蒐三月葉と生じ、水お貼ス荷葉ょう大く皺紋
穀の如く、蹙凹〳〵佛が如し、面青背紫、荳葉ょお剌ス、
其荳長さ丈余ょ至る、中ょ孔あり絲を繋ぐ嫩者皮を剥ぐ食べし、
五六月紫花と生ず、花開く日お向ふ芭と結ぶ、外お青き剌
あり蝟剌及び栗毬の如し、花芭頭もの、雞喙蝟喙の如し、
多識篇 水沢の中ょ生ず、俗お雞頭盤と云、或ハ鬼蓮と云、此もの五
六月花と開く、

水蕗

和名抄 芡、和名三豆布木、

○新式芽ょ三月ょ出ス據あるよ考るべし、

正月

春 し

四方拝 元日寅の一刻ょ、天皇清涼殿の東庭ょ於て
天地四方を拝し、

公事根源 属星と唱へ天地四方山陵を拝し、日下ょ私の奏ス
拝ス、

年災ょを掃ひ宝祚

諸司奏

是ハ元日の節会ょ中務省、陰陽寮と率ゐ
永撰腹赤の御贄と奉ると云、其儀式江次第ょの諸書ありよう、

七曜御暦

是元日の節会ょ中務省、陰陽寮と率ゐ
奉る、

公事根源 七曜の御暦と、日月火水
木金土の七曜をもつて
ものはねの暦ありと、

淑気

是ハ元日の節会ょ中務省、陰陽寮と率ゐ
千門淑気新と、詩ょ
作れり、○只新春
の気なりを、

試筆 試毫

吉書 羅山文集 我朝
書初 年甫ょ字と写
す、こゝお試筆と称ス、故ょ試簡試鬼
試頴 試毫或ハ試春と称す皆然と

椒鰕

荊楚歳事記 元日椒拍酒を
精と、これと服するハ人と〳〵身挺〳〵よく走らず、
拍ハこれ仙某と、

風土記 元日長幼こゝ
拝賀椒酒と進む、桃湯及び柏葉酒を
飲む、○椒鰕 椒盃 椒

盤を撤して進む、酒と飲の器也、**如願**　歳時記　商人あり清湖を過ぐ清湖君を見ゐ君問ふ須有人教てえ但如願をとなへよと一椀を得たり、如願ハ即其名也、尚求る所あればハ悉能くすと致す、後正旦ゐ如願晩く起るふりして商人こゑをかけ走り糞壌の中ゐ入るを見えず、今人正旦細繩をとりて偶人を繋ぎ糞掃の中ゐ投ぐ令如願とえ、五雑組　聞中の俗糞土と除らず、初五日ゐ至りて輦車おびただしく野地ゐ至り、石と取り返りて宝と得たりとえ則古人如願と喚、

春盤　生菜　齊人月令　立春日生菜と食ひ新と迎の意ふるゑ立春日の条ゐ出つ、上辰

の意也、

春餅生菜を以て相饋送る、春盤と号、**裁翼春燕**　部、綵燕ども、部、松の

薮　西京雑記　高祖宮中、正月上辰池辺ゐ出ゐ鑒濯し蓬餅を食ひ以て妖邪をとらふ、五雑俎　謝肇淛曰今の人三月上巳をもちゐ、正月の上辰をもちゐ、

注連の内　内の条ゐ歩、齒朶

穂長　李章其根一本ゐて数枝ともと貫く故ゐ鳳尾と裏白　名づく、根と貫衆とえ、和漢三才図会　葉ハ蕨及ひ狗脊ゐ似て葉柔ふ薄く、面青く背白く四時拈ず、以て元旦嘉祝の物ゐ飾る、〇一説ニ蘭ハよろひ朶ハえぶ、朶ハ長延ゐるとの故、齢のぶ延る義とえ、

人日　東方朔占書　一日と雞と、二日と狗と、三日と羊と、四日と豕と、五日と牛と、六日と馬と、七日を人と、八日を穀とす、

宿直人　〇八日ゐ十四日迄被行之後七日之御修法是ニ記　兼和元年始ゐ真言院を宮中ゐ置、鎮護国家、五穀豊饒の為、毎年一七日と限り修法せらる、公事根源　こゝ金剛界あるゆゑバ、明年胎蔵界、年ごゐ修法せらる、拾芥抄　真言院ハ八省の北ゐあり、〇宿直人　徒然草　後七日の阿闍梨、武者をあつむることいつとやぬさべあひあるゆゑ、宿直人とて、かくことごとくあつまりゐるゆゑ、一年の相ハ此修中のあひだ、つつしまんふことこゝろあるバ兵とあつまるてふぐやうあるぬこと、漢語抄　晝勤を直と、夜勤を宿と云、合せて宿直とのゝしる、

春し

止乃伊　

叙位　五日　公事根源　天智天皇十四年正月ゐ諸王諸臣ゐ爵位をかうぶらしむ、此叙位ハ六日ゐて侍りしと、天徳五年より、五日ゐ始て此儀あり、是ハ諸臣

持て悪神を切拂ふ体を舞ひ、即座ゐ獅子頭と舞衣ゐて押つゝ其社へ納め入るゝ、十五日より十七日まで

下崩 月令 是月也、天氣下降、地氣上騰、天地和同、草木萌動、

は、部、万春樂

白魚 春魚、鱠殘魚、王餘魚、銀魚、和漢三才圖 俗云白魚、江海の交ゐ生ず、立春の初ゐ出、人ごまを賞す、二三月腹ゐ子あり、潔白あり、下暑青色と帯、水と離るゝ時バ白く煮ゐバ赤し、

兼三春物

ちゝ玉姫 拾芥抄 霞 とらふ云

蜆 階書 刻蔡が父蜆を嗜む、呼んで

扁螺 文字集畧 蜆貝ハ蛤ゐ似て小し、黒色ゝ字又顯ゐ作る、

檉柳 本草 一名 垂絲柳 按ふ羅願尒雅翼云、天の雨ふんとす、檉ちづこまと知ゝ、氣と起して以て應ず、又霜雪と負て凋まず、及び木の聖きものゝ、故に字、聖ゐ从ふ、又雨師と名く、或ハ曰、雨と得るときハ、垂ゝて絲の如し、幹弱く、枝まと掃む、生ず易く、赤皮細葉絲の如く、

品川海苔 の部、海苔の条ゐ出ゝ、

白藻 本草 竜鬚菜、東南海中の石上ゝ生ず、叢生ゝて枝葉

の年労と奏ゝ、位と次第ゐ叙すゝ、

十四日年越 紀事 今夜、俗十四日年越と称ゝ相祝ふゝ

上元日 花燈の夕 ○正月十五日と上元といひ、七月十五日を中元といひ、十月十五日と下元と、○花燈の夕とハ、唐の世ゐ上元の夜、燈燭と列ゐ游観するとゝ、五雜俎 天下の上元灯燭の盛まるゝこと、闔中ゐまさるとの

獅子頭の神事 十六日 ○伊勢国、渡会郡、山田郷ゐ祭るとゝ、

太神宮、御山内 今村の社 高柳、坂の社 坂の町 世古 苗の社 高倉山の内 苗裏 大社一の木町 藤の社 中島 箕曲の社 箕曲 是七社、瀬木の社 岡本上町 以上八社、一社ゝ各の獅子頭と合せゝ八つあり、此内一頭、虚空より降るゝ、常政長宮ゝ神職、幾り七ツハ、獅子と出ゝ、松明ととも舞ゝ、土人傳、武人皇百五代後柏原院、永正の末の作ゝ云、祭の日、八ヶ所の町ゝ氏子、竜の如く長き獅子と出ゝ、飢饉疫癘まやしこゝろ、獅子頭を作り山田上の在家ゝ送り、次ゐ下の町へ追やりしこゝを、其頭と、町ゝこの疫神ゐ祝祭りて、産沙神と崇む、毎年正月中旬、社より取出ゝて、皷吹ゝ舞ありくゝ、氏子の家ゝくゐものとて、鏡餅松明、或ハ十二灯ゐと出ゝ、十五日終夜廻りて、十六日小田橋の上ゝて、刀を

あり、状ち抑眼の如く、髪漸長きをの尺余、白色にして醋を以て浸して喰ふ、

二月 常樂會 十五日

拾芥抄 二月十五日、南都興福寺常樂会、紀事 今日、東金堂に闍浮担金の釈迦像あり、その扉面ゐ、涅槃像を、相博ふ、金罡が画く所之と、今日其扉を開く、涅槃経 常樂我淨四德波羅蜜、云〻、○涅槃会、常樂会同じことゝ、捴名四天王寺にて、涅槃会と、

積塔 十六日

紀事 二月十六日亡盲人、検挍以下衆分ゐ至る迄、各京高倉綾の小路なる清聚庵ゐあつまり、光孝天皇の皇子、雨夜の御子の為ゐ積塔会と修す、宿忌の頭人大検挍淳営と設く、座上ゐ守瞽神の画像と置く、衆盲ゐまこと拜〻、其後大瓶の酒をくゝと盲人六汎の中ゐ四人ととゝ〻〻と、平家と謡ひむ、守瞽神ハ、日吉ゐ一社の中十社と取く祭之俗、守瞽神と誤く、病神と称ス、妙画幅常ニ捴検挍の宅ゐ安置ス、其人死すれバ次の検挍ゐ与奪ス、盲人琵琶と弾ずる故ゐ、妙音毎才天と崇むゝ〻盲人平家を誦ずることゝ生仏ゐそゞまる、中暑相傳ふ、雨夜の皇子盲きやうなる故ゐ、衆盲と憐をゆゑり、明日、皇子の忌日ゝ、これゐよりて衆盲心經と誦〻、琵琶と弾じて、宿忌を修す、○

春し

千掬曰、雨夜の皇子薨じて後、諸の座頭、墓に毎年石と積て、弔ひ祀ること遺風ありとぞ

聖靈會 廿三日

○按ゐ東生郡四天王寺聖霊会と、八聖徳太子の鳳輦を、一宇霊院にうつし、六時堂にうつしその会式ゝ、紀事 二月廿二日、太子像并舎利堂の両興と移〻、一舎利二舎利の十二坊の僧徒と合せ、堂前の舞臺ゐ於く大法事ありて、寺中男一萬と、一舎利とゐ、ハ、二と二の舎利とゐ、是舎利ゐ頒ること、當寺、年の法会の中、この会と以ゝ第一とす、ト云

時宗踊念仏 彼岸

上人ゐ二世應阿自作の弥陀の像と奉尊ゝ、毎年二季の彼岸中、そゞり念仏ゐ中世以来、尼と拵乍ゝ、寺中ゐ扇と製〻て、これと四方ニ鬻く、世御影堂扇と称ス、是ニ寺社新書見

社日

高書 社日、土地、玉神也、按ニ今立春の後、第五の戌日と秋社と手、社と主る神と勾芒とゐ、立秋の後、第五の戌日と秋社と手、社と主る神と句芒とゐ、

月令 二月之節、擇元日

命民社郭玄曰、社稷と祭るとき、春事興るゞ故ゐ祀之祭祥と祈る、礼日ニハ、春分の前後ゐ近を戊日と云、元ハ吉也、

社翁雨 提要録

社公社母旧水と食た、故ゐ社日雨あれバこれと社翁雨ゐ

治聾酒 石林詩話 世ゝ云、社日酒と飲べば耳聾を治す 鹿角落 月令、仲夏鹿角解、仲冬麋角解 衝波傳 鹿生まれて三年めごとに其角れのづゝ墮〇兼文曰凡鹿の角ハ春生じ〳〵夏長じ秋堅く冬脱ス春ふたゝび角解の義未詳 地虫 出の条ニ委ス

穴を出ゝ蛇 出の条ニ委ス

三月 上巳

紀事 今日を俗ニ節供と称ス年中五節供の一貴ゝ上ハ猶初とニ月ゝ三月初の巳日と上巳と千ゝ三月辰巳と建と除日とす、以ゝ不祥と除くゝ 五雑俎 漢ゐて上巳を用ゐゝ三日と以ゝ 東書 魏徐幹齊都賦 青のさ三月三日を用ゐゝ巳を用ひず、ゝ 陽季月上除之辰、無大無小 秋千 韆の戯 荊楚歳時記 春の節長き縄を於水陽〇所謂上巳の拔除の義ゝ、

胃索 ゆさ ぶらこ 荊楚歳時記 春の節長き縄を高木ニ懸ケ士女袨服ゝ、其上ニ坐ゝ立ゝ、ゝ推引ス名づけゝ秋千と云、楚の俗ニこと施鈎と云、涅槃経ニこと胃索ゝ秋千ニ似ゝ縄戯ゝ、

康 ゝ然ゐてゝことを字書ニ考ゝるゝニ、秋千ニ似ゝ縄戯ゝ、今其字ニ従ゐ実ニ従ゐず、ゝ當て韆と用ひず、 天宝遺事

宮中寒食ニ競ゝ鞦韆と立ツ、今宮嬪笑ゝ宴楽とす、 荊楚歳時記 春の節長き縄を

明皇呼て半仙戯とす 古今藝術 秋千ハ北方の山戎の戯ゝ、以ゝ輕趫と習ふゐゝ、

和名抄 鞦韆、和名由左波利ゝ、

白酒

本朝食鑑 酵ハ白酒の甘きゝ、和名之良加須ゝ、

和俗三月三日節物ゝゝ、雛祭ニ供ス

潮干

紀事 三月三日海潮大ニ乾ゝ泉州堺の浦、殊ニ甚一諸ゝ競ゝ入来て蛤蜊と拾ゝ小魚とゝる、當日士女の祭ゝ、紀州加多、武州品川、其外所ゝ有ゝ、

修学寺祭

五日 紀事 凡此邊七郷、三月五日祭ゝ、其神一条寺の八大王ニ同ゝ、

一説 半頭天皇、或ハ云赤山明神ゝ、是天台護法神ゝ、この神ハ慈覚大師、唐ゝり帰朝と共ニ来朝の神ゝ、山門法流守護の誓約あゝ、大師の遺誡ゐゝて、徒ゐ堅ゝ社を建て勧請せゝ赤山と号そゝことゝゝ、かの国ニ鎮座の地名ゝ、釈書慈覚大師の傳ニ載ゝす、

順の峯入

雍州府志 往昔役の行者、入峯の道とゝゝハ、年毎ニ熊野ゝり葛城大峯ニ入て、吉野ニ出、是を順の峯入と云、尓後大蛇大峯ゝう生ゝ路を擁ゝて入峯久ゝ絶ゆゐゝ聖宝 建禅寺開山 ゝづゝ斧鉞を執て吉野山ゝ

大峯山の後み入て、蛇の尾よりすこし截り、遂に熊野へ出、是を逆の峯入と云、○春の峯入と、順の峯入と、二度の峯入とも、本山方へ入ことを勤む、聖護院御門室に於て是を受、三井の長吏増誉僧正その年始めて秋入是を逆の峯入と云、當山方へ入ことを勤む、三宝院御門室に於て是を受、日月桃 赤白二種八重あり、単あり、桃の条に出、

白桃 碧桃と云、○白桃や雪も落す水の色 桃隣 **石蒲花** 本草 石間陽向の処に生ず、故に石南と名づく、花稟 処々深山中に多し、大和金剛山最多し、樹大なるもの丈に過ず、枝條柔軟にして葉も蓬莱榮に類して、厚く長し、面深緑色、背に毛茸おおく、茶褐色、四月枝梢に花さく、数十集り生ず、粉紅色、筒子六出、形開羊花に似て大サ寸余、頗る栄観に堪う、雑談 **拙** 京都江戸は移し植るに、二月のま三月の始花を開く、五出形鄙陋花の如く

撫の花 我波奈能奈能其等也之 和漢三才畫会 木撫八葉もの丈に似て、長く、撫ればその気を、六月細き白花を開き結実久しくして伎美尓故悲和多利奈無

沉丁花 和漢三才畫会 瑞香俗に云沉丁花、按に瑞香疑うらくは此山奨の類にて、葉の四五尺枝幹皮光をうしなく、葉ハ楠の如く、春花を著く、丁香の如く、紫色、既に開くる時八出、外淡紫内白く、十余朶攅簇す、其香烈くして沉香丁香相兼るが如し、故に俗に沉丁花と云、 **五雑俎** 相傳ふ廬山の一比丘岩下に昼寝して異香を聞く覚て尋るに此花と得る故に瞳香と名く、後好事のもの以て祥香とす、改て瑞香とす、

春菊 高麗菊 和漢三才畫会 俗に高麗菊、春菊、春菊、花を開く菊に似る故に名く、同蒿、茎葉と深く食ふに脆美、然とも百菊いまだ開ざる時を之故に花と賞ず、蔬とせず、一たび苅て後おのづから秋に生ず、六七月花を開く、

新桑摘 月令 孟夏之月、后妃斎戒親も亦美し、 東郷豹 桑摘婦女働蠶事

塩竈櫻 此花至て艶色あり、其樹葉くふるに堪ず、 **秋色櫻** 東叡山清水堂のうち井のうへ、一名大盤若櫻と云、小網町菓子屋の娘秋と云ことの、十三歳の時花見に来り、井のそばの櫻ちるを酒の酔紅色

おくのひ〳〵ともう此名を、秋色八秋ぎ俳名、
其角の門人あり〳〵、此句人口に膾炙やう、

正月

氷様

延喜式宮内省式曰、氷様之奏、主水司奏之、此司ハ宮内省ニ属ス、氷様ト八氷室の氷の厚薄すゝ炊、瓦石と以て其様と〳〵く奏之、公事根源、氷の多くなるハ聖代の験し、氷のあるハ凶年、侍るハ、氷の御祈とそ、大法秘法と行ふもの也、○こゝに元日の節会にあるとしるべし、部見合

開豆、開牛房、

紀事、水煮の大豆、是と炒ることを、開牛房煮ずして生の牛房ニ、菁水の如くこまと盛る、仍て菁木牛房とも又むき牛房とも云、両種ともお土器ニ盛、歯朶の葉をしく、

人と帳お貼す

荊楚歳時記、人日縁と剪人とつくり屠蘇の上お貼す、きゝ頭髪お戴く、又或ハ相遺る、新年旧を改め、新〳〵をおもてなす意し取るなり、

弾初

俳諧歳時記云、琴三絃鼓弓の類を弾ことをしめ始、年の始お其ことを試るとき也、

しめ始

年山紀聞ニ云、貴兼王日記、明應十年ニ云、諸社之遥拝之後、三献有之、次ニ雑煮、次ニ吃目始、海人藻苅、

中御門朝右子息
恵明亮僧正宣中

公家御膳飯者強飯也、勅柄家等如此、姫飯全分畧儀也、但人〳〵依好悪用之、強飯時、飯湯也、而近代姫飯之時もこゆまゐらせ〳〵召不叶理也、為章曰、如名称ニ、非米嚼而非粥之義也とありて、その次ニ別ニ粥と出し、和名之留加由、薄糜也とあり、ハ、糒糅ハ、ひさこめのつゆあらひおもめハ、糒糅を食ひたるの諸説、ひめ始のまうごんと解ふ足ず、ひめのつゆあらひおもめハ、糒糅の義と、

毘沙門功徳経

元日

雑談抄、古老傳ニ云、往古ハ元朝黄の時お犬神人禁裡日花門の外ニ恭ゐて、毘沙門経の文句と訓読し、唱〳〵祝の義をおせり、故ニ此音の黨類と呼て唱文師と称ス、又元日毎ニ風お候ひて故風の者と号ス、風の字音志久世誤〳〵もの〳〵ふ、風と宿と音近き故ニ、民家ニて元朝未明お門〳〵来〳〵毘沙門経と訓読もてゆく、中古迄侍りし、當世絶て汲ふ(ゑ)、

常陸帯の

神事

十日 神社啓蒙、鹿島の神社、常陸国鹿島郡ニ在、一宮記云、武甕槌神と、〇年中祭礼七十五度ありて、中ニ常陸帯の祭あり、其日男女の名と布帯お書記し、神前お置、社人ことゝ取接し、相見〳〵婚姻と定む、正月十日の祭是ゝ、

奥儀抄 夢と

帯みづく、一つ又我名を書て、折返して、中を
バ隠しつゝまと称して、お結びつゝをバ左の方へ
結ぶれバ、ちゝこバ掛帯のやうにて、ゆるく結ひ
陸帯との二バ神祇
あるゆゑ、意あるなり、

十五日 **神社啓蒙** 牧岡社ハ、河内国河内郡に在、社記云、
祭る所の神四座、方一殿天子星命、方二殿鵜鵜草葺不合尊、
三殿大国主神、第四殿天照太神、又若宮一座、天兒屋命の子、
押雲命、正月十五日卜田祭、當日神供所おゐて小豆粥と煮、
粥の上に寸竹管を掛け、百穀を納置、蒸氣の強弱によりて、
年数吉凶を占ふ、當社方一の神事なり、神主水連氏の外、相乗
することなし、是を平岡の御粥と云、十四夜より大釜を居て、小
豆粥と煮、其釜の上に、五十四本の竹を五すづゝ束ね、管と
一束と一釣置、十五日早朝、其粥と神供とを、五穀成就の祝詞
あり、五十四品の種物と、一管毎に書付、釜中の粥に浸して、さて
一一管を割く、管中の粥の多少によりて、
耕作の吉凶をよひ、恭詰の諸人に告知ます、

兼三春物 人来鳥 鶯と云ふ、

古今俳諧哥

さ部三毬打

の条に出ス、

掛の花見ごゝろ来つゝ

うぐひすもる、 **雲雀** 三才画会 吉犬子 褐色、鶉の似て小し、
海上叢草の中多く有之、黎明詩に過天晴音則且鳴、直上雲端、其声連綿不已、云、叫天子 和漢三才画会 大
低雀に似て大く、頭背黧色黒斑あり、鮮明、
眼の傍頷白く、胸腹灰色、脛脚細く長くして距あり、 雲雀

脊 痩ると云、誹ふ、痩る人
と雲雀よ譬ふるも是なり、 **もめ鳥** 雲雀の異名 秘蔵抄 春の野に姫ひばり
鳥ぐもりする霞の

鹿尾菜 本草 東南の海中石厓の間に生ず、
中よりきざみ、
大ぎ鉄線の如、 和名抄 比須木毛、
伊勢物語 おきべむぐらの宿 なども
しめし ものこゝろ 袖をうつとよめり、

千鱈 和漢三才画会 乾鮭魚ハ色
白きものと上手、黄と帯るものと次とす、世つゝ、角カと好む
もの、常に嗜ミ、多く食ふ時ハ、其カ倍ス、 多識篇 黄顙魚和名多良

三月 **彼岸** 時正 竜樹菩薩天正験記 欲界六天中夫夜摩
高楼閣と雲処墓と云、此院内、竿に二八七七ケ日の間、色界摩
兜率の中に大城あり、名て中陽院と云、中の
音羅天尊を上首として、八神并大梵天王、大歳神、乃至王女、道

祖神等の人、中天上の冥官冥衆集会して、一切の善悪を注す大天尊降りて、八神より教勅して、三巻曲帳を持ちて、三復八校して天尊に献ず、天尊覧すて、善を証する為には、非室非室印と指し、悪帳と証する為には、縛印と指す、然中善を証する為には、縛の印と指す、彼八神は、帝釈、閻王、天大将軍、天一行祝司、金司禄、倶生神し、間彼天尊何の由、あつて、二八月と以て天地の神に召や、答曰、阿迦尼吒天は、自在尊の所居宮殿の前に高樹あり、天生樹と名く、形ち須呂の如し、春華と秋菓と結ぶ七日を経て落つ、菓七菓七色、青黄赤白黒紫翠を、秋菓と結ぶ七日を経て落つ、菓七色上の如し、花の開くことは、中陽院より数り、落葉と見て本宮より還る、定て知る、法尒道理然らしむる所なり、彼岸功徳成就経に説く仏道と成せは、当に二八月七日昼夜同時にあつて、一切の諸仏三世の諸尊及び無数万億菩薩説法して、衆生を接て楽と与ふ、金剛疏、生死は此岸なり、涅槃は彼岸なり、煩悩の中流とす、涅槃の即般若の一心三観なり、生死の此岸より、煩悩の中流とす、涅槃の彼岸に到る、云々　玉門和尚筆記　○時正は、彼岸の中日とす、中日は、中の昼夜少しも長短なく、平均なり、同じき故、時の正きを以てなり、

比良八講

比良の八講は、四日○八講の式、祇園の御八講の条に記す、

犯事　江刕比良大明神社、古へ今日比叡山の衆徒、法花八講を修す、今に至て比良の八講と称す、此日湖上多く風烈しき故に、帰帆事を失ふ、うらでは引鶴、引鴨老荒湖十日引は帰る、雀鴨のうるを、出さず、引鶴、引鴨　冬より春まで多く集り居て、春去て引去る、云々　○続撰集　引鳥の中に文ある田螺取　支泉、この引鳥ともかくも意に半時庵其外さまざまに説あれど、三月の部に引残る雀とあり、合せて考へもろくに、一重桜　一重桜は、春分の後花とひらく、彼岸桜　小白早桜、春分の後、彼岸桜は、開き、余の花より先だつ、一名小撰、

三月

雛遊

雛祭　雛飾　犯事　三月三日良賤の児女、紙偶人を製して是を立雛、雛と称す、一説ことのはに、贖物の義なり、祓具に擬して、先ふることと十日ばかり、遅速あるべし、九穢及ぶべからず、○古へ女児のわざは、遊びに三月みそぎしてと、源氏物語にも見えたり、今三月三日にこれを祭りて遊ぶは、全く上巳の後の贖物の人形より移りしことなるべし、

姫桃　堀川次郎百首　春霞たちわかれゆく雛とこの花

餅鏡 は、部、歯固の条を出よ。 兼三春物

百千鳥 八雲御抄 ももちどり

ももくさ春百千の鳥の囀るを、 万葉六 我門之榎実毛利喫百千鳥来座、 古今 百千鳥さへづる春とうたふ。

和漢三才絵会 海温み雲、俗に海雲の二字を用ふ。状乱絲の如く色青く黒く、柔滑り、長数尺、石上に生ず。水上に浮ぶ、是と雲菜と同物なり。

海雲

二月

鹽花煎

十五日○京師の俗、正月用ふる処の餅花を貯へ置き、二月涅槃会に煮て供物とす、又正月の餅とおなじ。

諸子魚

湖水の小魚、長さ三寸と限らず、鱗あり光あり、其味脂多し。湖水産品の内、江西坂本のモロコ川にとる、此魚花多し、故に名とす、大和本草に西州のモロコあり油身魚と記せり、アブラメハ其鱗細の毛の如し、鮴魚と一類の異なり、其味甚佳品なり、是モロコとハ大に異なり、大和本草の説る所、又モロコハ黄顬魚あるべし、是もろこ、

大和本草 拾江

府志云、桃花千葉あり、大に紅色なるものを、蓬桃と云。

比良祭

十五日○江刕比良村の祭礼、神輿二基、山王十禅師、飛梅天神の両社と、十禅師ハ南比良村の鎮守、天神ハ北比良村の鎮守と、両神の社一処にあり、村ハ南北十余町とつゞく。南小松村の鎮守八幡、北小松村の鎮守八十禅師天神を合祭る、両村三社の神輿三基、同月同日祭之と、比良祭と称す、山王と崇祭る。

人賓忌

此辺古ハ一円に山門の領分と、故に多く山王と称す、和尚と好む人多くこの日寄会と修す、南都薬師寺の塔を、或ハ、和州初瀬の近処にある寺塚、是人丸墳墓と、洛西鳴滝の妙光寺に人丸堂あると木像八傳ふ、俊頼の作る処と、又播刕明石にも人丸の社影供と修す、右大窪谷に社あり、○人丸終焉の地ハ石見国と、神社ハ高角の山上にあり、世に高津と称す、この祭祀中絶〳〵、御影供の義ハ、霊元帝の御宇に及び勅〳〵絶〳〵と奥〳〵廢さゞると挙〳〵、徒一位を授けられまろ〳〵と、

引残る

鶴

二月の部、引雀の処に記す如く、二月末引のころ去ると云ふ、雀の三月末も引のころ去ると云ふ、

正月

黄鯛魚ハ○○○○、江州の俗ワタカと云、大○○○の七八寸、是も湖水に
甚多し、モロコ三寸ニ一種ニ活法
の書ニ、柳葉魚と出せしこの是ならん、形モロコに似て、
○○黒く腹ニ黒筋ありて、柳の葉の如し、九州の湖水
にて、早春字ふることなし他魚ニすぐれて、腸ハもろく、
○子ニ此魚おそるべく、江湖の産魚ニ

三月 桃

本草綱目 太清本艸本云、桃花と漬○○○○を飲む、
百病を除き、顔色と益ス、**千金方** 三月三日、桃花一斗と
○、井花水三斗、麴六斗、米六斗、こねこと炊くこと
好く炊て酒ニ釀し、○○飲ハ大○○○、○
○入○桃ニ委くハ
み部ニ注ス、**桃花** **事類賦** 美艶或ハ仙と成て壽と益し、或ハ鬼と制
○○○○

べし、五月小さ白花と開く、**三月** 生子と献ず　李泌傳 三月朔日、民間音饗を以て百穀瓜果の種を盛り、相問い遺る、号して生子と献ずとて、閭里宜春酒を醸して句芒神と祭り、豊年と祈る、百官農書を進む、以て本と務むるを示す、今と暮しく、**釋奠**　上丁日 公事根源 是八年の二度二月と八月とふみごとは誤なるべし 九日と二令節より今、国忌、祈年祭をどふもふるまいの丁日ふるまいとも 続日本紀 文武天皇太宝元年二月丁巳始て釈奠を行ふ 礼記王制 菜を釈と幣を奠く、先師と礼ス、 さくぎと 大学寮 孔子及び十哲の影と祀る、上即ハ少納言、文章博士、孝経、礼記、毛詩、尚書、論語、周易、左傳、年廻り 九二日〇駿州阿部郡、浅間の祀し、年中ユこもと講ず **浅間祭**　九二日の祭祀、朝廷と撲ーて八十三度より、今ハ各日のくに存ず、もろもろども二月廿二日の祭礼八今ニ至ず厳重之、府中検断が狂言、練物ふと出ス、此日社の外ゆ〜簑と高ふ近郷のもの必ず冥之、〇兼文日、今武ニ浅間祭と称ス、四月八日始て山のぼりをと称して、間の別当ニ尋ふ、二月ニ祭り、四月ニ祭ル、諸人参詣スとぃぇ今武ニ信州と記せるハ誤なり、**狗脊**　蘇頌曰 狗脊苗矢ず細辟、青色、高一尺以来花ノ、其苗葉毋貫衆ふ似ず細く、其色黒、長三寸岐多ー狗の脊骨の如ー、**三月** **音精飯**　本部寒 食の条ニ

西王母　桃の一種し、西王母の園ニ三千年ニ花咲ことある桃ス

泉涌寺開山忌　洛の東山ふ在中興の開山俊芿が忌と修すし、按考ニ、俊芿律ハ不可棄、肥の後州鮑田郡の人母、兼原氏、生て数日樹下ふ棄ル、三日と経ず禽獣の害ル、何ぞ住ず、ことごとくも、洋児とす、抱き帰て母ニ付ス、十八年ず落飾、建久二年四月八来、五月の初来の江陰重ニ着ス、建暦改元年帰朝、嘉禄元年十月某の日、泉涌寺ふおゐて、重閣講堂を建ず、明年の春、華構落成、嘉禄三年閏三月七日、右脇ーて逝て、年六十二ず、法会八八日、或八九日ニ修すと云、**善道寺忌**　一四三〇唐の終南山悟真光明善導大師の忌日ふ、隋の煬帝大業九年癸酉、生ず、善の高宗永隆二年三月十四日迁化ス、春秋六十九歳、本邦東山禅林寺、永観堂、智恩院中の善導院、小松谷百万遍ふの寺院ふて此忌を修すと、**千本念仏**　朱雀通の北南、引接寺の閻ア堂ニ在、 紀事 是も又融通念仏の余流ふ、毎年堂前の普賢像の揚花むくと期ず、寺僧一枝を折て、諸司

代に献ずれば米三石五斗となる、又七日念仏の料とす、一説、此法事ハ元刑人の為にこれを修す、故に諸司代より施米ありしを追薦の為ニしようつう○開基定覚上人、鐘の銘に顕然らう、定覚のこと、遺教経の条にも、此処を千本とそとハ、筆の窟の日蔵上人、異土三百に約すること、其寓に千本の卒都婆と、舟罪山に立て供養を修す、此処舟罪につゞく依て名ハ、

仙甘堂萩 千梅

【追加】五月十三日住吉の御弓、其式社人正鵠を准ハ、尺三寸の的と立つ、立合ニ射、勝負と論ずるなし、

住吉の御弓 十三日

【正月】今日恭詣の諸人竹馬と昆布と買て土産とす、

鈴子さ

【犯事】夏秋花を詠ずることとの異なり、

子

正月

八野菜ハ似てやゝ〳〵、本草菜蔬ハ載らず、首蓿ニ似らう、俱ニ

むらさきハ滑菜の類ニ〳〵、

渕蛤

狩の条ニ、

兼三春物

と捨て、其肉と升ニ盛りて市こる、醋ニ和して是を脍とす、故ニ渕蛤共醋蛤ともいふ、摂州大坂の土人専ら正月賞して食ふ、一説ニ此法事

すゞ石鳥 雄子の異名 【和漢三才】おなじ鳥のごとやく大ニ庶とよりやゝ小

杉菜 【大和本州】春月先花と生ず茎の如し、嫩き時味よ、俗ニ土筆と名く、杉ニ似るニ因て名、漢名ハ未詳、

土黒薄 一説ニ春の野の焼くる跡ニ生ず、墨黒の暑きこと甚し、顕昭ハ未黒の暑きよりとる、

雀の子 部、孕雀の冬ニ出す、

三月

須戸の御稜 【源氏物語須磨巻】やひのつゞくらおぼしやるべきこと

巳の日、こゝにぐし大海の原へぐしてひとうつし、○是ハ源氏須戸ニ在辻の時、三月の朝日巳の日ニて、浦辺ニ舟を人形と立まいて、祓の具と舟一、祓除するなれバ、須戸の祓春とする、

李花 【事物異名】三月花さく単葉五出白色 【和漢三才】

会 形ち桃ニ似て、味酸とす、

蕪坊の花 【宗奭曰】春紫花とそゝく甚ふ、故ニ酸桃と称す、

【三才画会】倭ニ蕪坊の木あり、樹皮濃紫ニ〳〵白色ニ葉薄く光あり、但し葉豆長く、三月花あり、淡紫、櫛の生ずる大さ麦粒のごとく、莢と倍ふ状蕪の子ニ似て小く、中ニ細かなる子を、春子と種ニハ生ず、然ふ

物春風　炎の点ぬるめる寒　春の風　許六、

や春の　松蔭や旭見ふや　春の草　名も知つ巳

草苅ら、春の海　く春の海　不卜、

てつゝめる体、雪きえて水　春の月　山の端ゝち

まるさゝし体をゞむべし、春の　負ふり春の月

町、春の水　ふり春の水　舟泉、春の野　春の野

ハむしろの数　春の日の念佛　春の

あそせ　沾徳、春の日　き野寺ふ　尚白、春の

夜　春の夜ふ誰ゝ初　春の雪　支考、

瀬の堂篭　曽良、春の　春の雪

春の山　月令博物筌　春ハ草木もさう

そて山の景色面白き事たゝ、春の

暮　蚊ひろふ往らまぬ

夜そ春の暮　重五、

婚姻序を失ふ即此氣を生ず、虹あらはるゝ音赤

の色あり、常ふ陰雲ユ依て日衝ゟ見ハる、雲あるゞ

二月

初虹　月令章句　夫遊湯和

追加

正月

初烏　初烏三ツ四ツゝハ　初

そら　千五百番哥合　今朝ゟハ雪げの雲のあ

とゝゝてみどりふゝる春の初空　通具〇

礼空や烏とのせる　虚栗　初ふきもゝゝけ

牛の鞍、嵐雪、初凪　の嶋の空や雛　喀山、花

の春　花の咲春とゝ義ゟ〇誰人ゟ薦

著ていまゝ花の春　芭蕉

兼三春

いゝ大木とゝず、故ゟ其汁物と染るゟ香やとゝゝ

国ゟ生ずる八紫荊花ゝ、縹色と染るゟ

ゝとゝいゝゝゝ、俳諧ゟ　孫蒸曰董菜ハ野ゟ生ズ人ゟ採ル

ゝゝ処ゟゝゝ多く紫荊花ゟゝん、董　処ゟゝゝ、菜蔓ゟ似て花ハ

紫ゝ、和名抄董菜　和名漢美礼、大和本艸　京都にて、相撲取と

云、筑紫ゟて八殿の馬とゟ、小児其花ニ鎰ゟる処と、両花相交へゟ

けて引ゝ戯とす、相撲の形ゟ似ゝゝ、郡ゟて相撲取とゝ草ハ別

ゟり、若水ニ、紫花地丁、別号董々菜とゝ、故ゟ国俗、董菜とす

みきと誤り称ゝ、董菜ハ別ゝゝ

〇壷董、一つ部ゟ注ゟる、

見いまごそ轉日と相互おそ、
日西を以て東方よ見いくる、

大根　冬のふの部、新千蕪、新千大根の条よ注しこう、

ほ

正月　千蕪、千

と

正月　年立

うつる　年の再びうり来るといふ義をうつる、年の花　続虚栗　年の花、富士八ほがめる姿、

ち

正月　千々の春

千々の春
其角、

り

二月　龍登天　俗物論　龍春分にして天ふ登り、秋分ふーふ湖ふ沼む、

ぬ

正月　鬼打木　月令博物筌　大賀玉のふとものふ、門なのうげの木之年木として、正月始ふ疵ある木をきり、鬼打摧ふ家さは菜とのそ、門よよせりけておくふり、鬼打摧ふ家とのふをもて、ふ張氣とそふの義あり、

兼三春物　朧夜　一説ふ朧月夜とをいへ、朧夜とぞりハいをめよーひくり、書蓋按をふ和哥者流の説いそぞ、俳諧ふそハ子細ふるべし、既ふ作

例多ー　曠野　辛崎の松ハ花より朧ふく芭蕉、

猿蓑　鉢くくきこめ夜とをれど朧ふり　去来、

か

正月　**かぐみ草**　大内ふて餅の上ふおく大根といふ、

見きぐみ草やそふそふをふくつるれ、**かぐさくさ**

遺稿　其形も花も百合ふ似て花紫ふり、葉ハ車前草ふ似くり、正月頃花さくもふ初百合ともいふ、花の時菓ふあり、因て姥百合ともいふ、万葉及び新撰六帖ふ、のそのその花と詠をる物ハ是ふありこそ、

兼三

春物　**風光る**　初学記　春晴日出て風吹と光風こ

ふみえぬ、

三月　**嗅茶**　利茶　鹿文云利茶嗅茶ハ俱ふ茶の香氣と嗅こ其氣味の善悪を辨ふるをいふ、茶人の所謂茶香服ふ於をる類の如し、凡茶表裏一の如きと純香ふいい生ふるこそ熟ふらぎ、こをと清香とのふ火候均停ふると蘭香ふいふ、両前純具ふると真香とのふ、更ふ舎香、浮香、間香、漏香此

皆不正の氣と云云、

よ

正月四方の春

そろをいふ、

た

正月玉打　きの部雑上の春の気色の具りを見るべし、**二月**

種芋　種芋や花の盛りと賣あるく　芭蕉、**三月**鷹の巣　和漢三才圖會　鷹窩ふ生ずる者ハ好て眠ル木ふ巣ふ營ふ者ハ常ふ立ル人家ふ育る者を巣鷹とふ、

れ

正月礼者　玉海集　春なちく人いつくぐふ礼者りぬ　伯貞

つ

正月鶴の一ト下　十七日　紀事　舞楽ひまご始らざる前犬楽こせて後、雀高盛等の献あり、群臣まてこれ賜ふ云々、舞御覧の条こゝそ〳〵

ね

二月茄子植　夏のふの部注〳〵、

む

二月薤の若葉　夏の追加薤茂るとゝる条ふ注ス、

く

正月食つみ

や

正月宿

青蓋云々の俗誤ゝそ、蓬萊墓と食ゝしといつる故ふ、俳諧者流もまゝ同物と心得る者多し、むかし食つゝと唱へハ、今の重詰のさゝひあて、賀客狩食應のまもれバ、連句ふハうれらまで食類の差合を繰べし、食つゝとハいろ〳〵ふて夫婦うれ嵐雪、食つゝや山居の味とふ初柳居食つゝ、蓬萊、同物ふらぬ徴、炭俵集春の部蓬萊ふきろぐや伊勢の初こゝろ　芭蕉、さて此句の、飾り松箱の海老、今朝の春、ふをかし五章つゝるる後ふ食つゝる本曽の白ひの檜物山水云々同物ふらんふハ蓬萊食つゝと並ゝ出ス、ゝこゝ隔てこゝふをるべし、但し本曽の白ひの檜物とハ其器をいふあるべし

の春　遠近集　よる年ふ留字と一数と高つゝよ宿の春　路春、二日

麥　大和本草　林中ふ多く生ず、莖ハ麻の莖ふ似くり、缺刻あり、並ハ圓くして淡紅色、節毎ふ葉三ツつきく、節毎ふ葉の上ふ一處ふ十餘花あつまり開く、花の色淡紫小児花を吸ふ二月ゝ

花ひらく、

三月 柳太刀

春 藍云此詞諸抄ニ載ザレド、四季部類ニ桃の節句、雛、柳、太刀云々義未詳、但し諸抄の例ニよらバ、桃の節句、雛、柳鬘と次序まさにきと、柳鬘を省きて、此詞ニ替、柳太刀と出まさにき道理ありそもいかゞ、柳鬘のみ、全ク柳鬘の意ニ誤ることあるべし、さらバ省くべきことゝ思ふ、又贅して猶ほ考へんに、例の老婆心なり、

正月 窓の春

ひや窓の春 野坡、

禁裡へ参ると千寿万歳とうたひ、一条院御宇、大江の定基三河守ニ任じ、其ニ仏教傳来の因縁と教へて舞ふ、町汁 十日汁 紀支 十日の条ニ三河万歳の始まりとぞ、洛下の旧俗、今朝毎ニふるまふ膳食を會所ニ集ひ、此月頭人一汁と設くれこれと汁會と称し、吸ひ果さゝれバ法令と讀て教ふ町中の男女、舞御覧 十七日 此式と守る、五月九月同然云々、

萬歳 五日

紀事 清涼殿東の小庭ニ舞楽あり、鶴の庖丁此時ニ、追加のつの部ニ入、

一名蓮 水傍下湿の地ニ生ず、葉蓮ニ似て肥壮、蓮葉ニ比ゞれ、赤色ニして味よきさう、淘洗浄め油塩ニ調ふ、此詞四季部類ニ、

二月 蕗のとう

ふきのとう 犬子集

三月 蒲

蒲の姫 蒲の芽の義

青藍云 増山の井 若菜ニ条ニ云、昔ハ若菜ニ上の日ニ内藏寮並ニ内膳司より禁中ニ奉ると云ふ、或ハ十二種供ふるともありしとぞ、公事根源ニ侍り、今ハ在家ニ七日ニ福ゝとそこゝろざきを祝ひ侍ると云ゝ、今ハ在家ニこのそもそも文意をもて按ずるニ四季部類公事の部ニ載七種のあつものゝ事なるとこゝ云ゝ注ゝゝるハ誤ゝ、

松菜 歌荒本草 蘿蓬

犬子集

三月 蒲

道織

菊花 秋の部ニ注ス、

三 こもがき祝ふ

此事公事根源又び後水尾院年中行事おうもミクぢ、且又糸偬とぞ[illegible]、當季嬉おちご、祝の詞ともに可ゐらんそあひ草おひ七日のこふけと出せり、和訓栞こうぶき、倭名抄鮮とうめり、又糝とうめり、空書曰糝ハ粉米也とうひ、鮮糕とひ、粉菜攙雑るの義米粉とりく菜羹を和とるあり、云、こうぶきとハ今の菜粥の事へ

三月　**小櫻**　花さく雨や具　物此花の色あかとぞるあり、○小櫻の足親　七寛、花すゝ色密にて咲鎧の小櫻威と云、

正月　**毬つく**　手まり奇　年のそゞめの出替の部後

二月　**出替**　秋の部後

壬海集　書初の真行草　や三ケ日　重負、

正月　三ケ日

里居　里居をるあぐ用うそん為ふ作例どあけく

さ　藪入と里居ともいふ三の句ふ里居うれ或を

二月　麦ふ贅も　類柑子　星合を中

の七日の里居うれ　功徳

二月　**佐保姫鷹**

や　やうふむかし　つけ羽　徳元、

き　**三月**　**きく茶**　追加ハの部嗅茶

ゆ　**正月**　**遊行札切**　十六日遊行上人年中

諸人益のため、一扁上人熊野權現より請らるゝ遊行代々相伝六字名号の印を、正月十一日ふ押るくといふ、これを札ともふあや、東都浅草日輪寺ふく問をへり、ふ札切と称る事あるといふり、此詞四季部類ふ出、

み　**正月**　**御代の春**　題黄金「目ふらぢ一万枚を御代の春　其角

ひ　**正月**　**蘗**　草九くりこぶそ　或説ふひとぞえとひハ、細き芽と生るを、蘗とひふ、木の切株よりと思ひ、ふ新古今曹祢好忠の哥ふ小田の去年の古根のふる蓬今ハ春べとひこそえふ々の「是蓬のひとぞえ、然れハ草本ともふ蘗の名目あり、

三月 緋櫻（ひさくら） 小輪ニして莖長くさま〴〵蒼葛ニ赤し

新撰六帖 タつく日うつろふ雲やゆふ
らん高根ふ立るひ
さくらの花 光俊

正月 掩門戸（かもんこ） 紀事京俗元日

うり三日ふ至つて民間門戸を
掩ふ心ハ福神を出さん為之ニ
注ふ
不足

寸 二月 西瓜蒔（すいくわまき）

増補歳時記琴草春之部終